
最も危険な二人

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最も危険な二人

【Nコード】

N8737R

【作者名】

朧月

【あらすじ】

★ある日突然蘭の前に帰ってきた新一。だが、それが全ての始まりだった。幸せな蘭と、動揺するコナン。生き残るのは、果たして――？ ★「必ず助ける！ 絶対に！」 「約束するわ……工藤君だからお願い、絶対に、死なないで！」 「タイムリミットなんだね。ねえ、新一？ ちゃんと聞こえてる？ 私新一の事が、大好きだよ……」 「お別れだ、蘭……」 ★響いた爆音の中で、組織の陰謀に翻弄された彼らの運命はいかに――！ そして、迫りくるタイムリミット。どうにも出来ない運命が、想いが、胸に突き刺さる。

★ハッピーエンドは訪れるのか！ ハートフル（になればいいな）
感動シリアス長編小説の幕が今開く！ ★2000年GW全国ロ
ードショー……と言うのは嘘で、クリックしてもらえばすぐ読めま
すので、どうぞよければお楽しみください（笑）頑張りまっす！
★今回は、命を落とすキーワードを考慮して、敢えて『残酷な描写
あり』にさせていただきました。が、基本ダーク分類の小説でもな
いですし、グロい系のシーンもない筈なので、その辺は安心してご
覧ください。

1、”工藤新一”の帰還

「ごめんな……コナン」

眩いた彼は、そこにある木にぐったりとした少年をもたれさせて、その場から走って行った。

ぼろぼろの少年は、苦しげに目を開けた。暫くその後姿を見つめていたが、段々と霞んでいく視界に逆らえず、そのまま闇に落ちた。

そう。彼との出会いは、突然だった。そして、別れもまた――。

1、”工藤新一”の帰還

「園子、これから行くって合コンだったの！？ 私やだよ！」

「いいでしょ、ちょっと位。誘われちゃったもんはいかなきゃ。ダシナだって許してくれるって」

帝丹高の制服姿にコートを着て、学生かばんを持った二人組の女子高生が、道を歩いていた。かたや膨れつらで文句を言って、かたや楽しそうににやにやした表情を浮かべている。

「もーっ、新一は、私のダンナなんか……じゃ………」

悪戯っぽく笑う園子に反論しようとした科白は、途中で失速した。蘭は進行方向に生まれた影を見て、驚きのまま表情を止めた。

前を歩いていた園子もまた、不思議そうな顔で振り向き、彼を見るなり、同じく目を丸くした。

その人物は、まっすぐ蘭を見て、そしてふっと笑みを零す。

「どこに行くんだ？ 二人して。オレは、毛利探偵事務所に今行くこととしてたところなんだ」

「し……しん……」

呆然と、衝撃のあまり身動きの取れない蘭の元へ、彼は一步二歩と歩み寄った。黒いロングコートが、彼の歩調に合わせて揺れる。紺色をしたハイネックのセーターは、厚手だが彼の身体を膨張させる事なく、すらりと着こなされている。彼は歩を進めた勢いのまま、蘭をぎゅっと抱きしめた。

「しん、いち？」

「ずっと、探してたんだぞ？ 会いたかった……蘭！」

ひたすら喜ぶ彼とは正反対に、蘭の体はがくがく震えていた。突然すぎる今の状況が、蘭には全く信じられなかったのだ。次第に、今ある状況を把握して、驚愕に見開いたままの目から大粒の涙が零れるのを、彼はそっと拭った。

蘭は震える涙声で新一につめよった。

「い、今まで、どこに行ってたのよ？ ずっと探してたのは私の方よ、新一！」

「……もう、何処にも行かないさ。こうやって、会えたんだからな」

あくまで優しく頭をなでてくるその手は、よく知った新一のものだ。本当に帰ってきたのだ、と思うと、嬉しさの半面胸の奥がきゅっと引き締まる。

優しく見下ろしてくる新一の目を、蘭は揺れる瞳で見つめた。

「絶対に、今度こそ約束だからね？」

「ああ、勿論さ」

答えた彼は、蘭を再度抱きしめた。長い黒髪に軽く触れてくる彼の手の動きがこそばゆい。それでも後ろ髪をされるがままに、蘭の方からも、新一の首に手を回した。

目の前で恋愛映画並のラブシーンを見せられた園子は、何も口を挟めずにただぽかんと眺めるのみだ。完全に置いてけぼりを食らわせて申し訳ない気持ちもあったが、それ以上に蘭の心は幸せに満ちていた。

「園子、あのさ、やっぱり私合コンは……」

「あーっ、う、うん。そりゃ、ダンナが帰って来たらしょうがないね。デートでも何でもしてきな！」

話しかけられて、やっと我を取り戻した園子は、慌てて答えた。恥ずかしそうにほほを染める蘭の耳元で、どさくさ紛れにちゅーもしちゃいなさいよ、と呟く。先程以上に真っ赤になった蘭が反論の言葉を言おうとするのを、園子は愛しそうに見つめた。小さく、”よかったね”と、”頑張りなさいよ”の二つを付け加えながら。嬉しそうに深く頷いた蘭は、新一の方へ向き直った。

「新一、これから、空いてるんでしょ？ 喫茶店でも行こうよ」
「ああ、いいよ。じゃあ今日は、オレのおごりでいいか？」

「うん！」

幸せな顔で、新一の隣を歩いていった蘭を、園子はその後姿が見えなくなるまで見送った。

「あとね、寄って欲しい所があるの」

「あん？」

「まだちょっと早いかな。新一に会って欲しい人がいるんだけど」

蘭は腕時計を見ながらそう呟いた。隣を歩く彼は柔らかく笑う。

「勿論。誰に会えばいいんだ？」

「会えばわかるよ。きつと喜んでくれるから！」

蘭は嬉しさを隠しきれないまま、満面の笑みを浮かべて身を乗り出した。

蘭も園子も、これを感動のラストだと思いこんでいた。

これこそが、全ての始まりとなる”出会い”だったとは露ほども思わずに。

1、”工藤新一”の帰還（後書き）

えー……。こほんっ！

こんにちは、皆様。朧月ですV

スタートしました新連載。読みに来て下さった方、ありがとうございますV

今回は完全な書きおろし、となるわけで……

正直、投稿するの凄く迷ったのですが、どの道現状の連載小説の復帰はまだまだ難しいので、楽しみにして下さってる方もいるという事で、出しちゃいました。

今回も一話一話は短めです。2000前後位。ちょっとした時間稼ぎも兼ねて（へーへ；一週間に一回位の更新頻度でやっていきたいです。ただ、初回だけちょっぴりサービスありますV

今回ののはかなり古くから（それこそ、ノベルズが出来た頃の頃位、ずっと以前から）温めて、ちやかちやか書きためてたお話です。ストックの貯蓄も10話分存在してます。加筆修正する部分はしつつ、時間稼いで投稿しながら、続きもやってけたらなど。

恐らく、次のお話で皆さん「????」ってなるかと思っています。

次話から是非、お楽しみいただけたら幸せですV

P・S・

うざったいあらすじとキーワード失礼しましたW

あらすじは映画予告風にして見ようと思って科白ガツガツぶっこんだのはいいけど、改行なくて読み辛いんじゃないかちょっと心配ですへへ；

ふざけんなって？ ええふざけました白状しますよ、ゴーメンナサ
ーイ！

でも適当に自分勝手にふざけたわけじゃなく、頭使って死ぬ気でふ
ざけましたwキーワードもあらずじも、どうせなら楽しんでもらお
うと思ったのです。キーワードもあらずじも、嘘偽りは一切ないの
で、許して下さい（笑）もしそこでも楽しんでもらえたなら本望で
す♪

もし感想コメント等いただけたらとんで喜びますv
いつでも、お待ちしておりますね♪

では、今後もしよろしく願いいたします〜vvv

2、工藤新一と江戸川コナン

帝丹小の終業チャイムが響くと同時に、彼らは一斉に席を立った。ランドセルを背負い、颯爽と教室を出て行く時には、既に五人グループが揃っていた。

「なあ、今日こそは依頼来てるよな！？ 最近暇でつまんねーよ」
「そうですねえっ！ 来てるといいですね。いつも教室を出てから下駄箱を覗くまでの時間ってドキドキしてしまいます。ねっ、歩美ちゃんと灰原さんもそう思いませんか？」

太った十円ハゲでガキ大将風の彼が言う科白に答えたのは、隣に歩くひよろ長い背丈の、そばかすの少年だ。

そして、話を振られた少女二人、後ろを歩く歩美と哀は、二人それぞれいつも通りの反応を返した。

「楽しみだね、光彦君！」

「……そうね、小学生の持ってくる事件は、血なまぐさいものが少ないから。いい気分転換にはなるわ」

抑揚のない口調で話す科白は、彼女の意味ありげな笑みと同様、少々ひねくれている。

「ねえ。そう思わない？ 江戸川君」

振り向いた先に居た少年は、興味なさげに欠伸を一つ零し、答えた。

「別に思わねーよ。面倒くせえが本音かな。猫探しだの犬探しだの、

終いには、なくなった鉛筆を探して欲しいだの」

「ったくよし、コナンがそんなんだから、依頼もこねーんじゃねーか？ 授業中だって、最近しょっちゅう居眠りばかりしてるしよー！」

「……いいじゃねえか。探偵が暇ってのは、つまり平和って事だろ？」

元太の言葉にヤル気なくそう答えて、彼は再び欠伸を一つ。何も入って居なかった下駄箱に、溜め息をつく探偵団達を置いてさっさと外へ出た。

「それにしても、本当に最近いつも眠そうね。夜更かしして調べごと？」

「ん……ああ、まあそんなとこだよ」

哀の言葉には、どこか煮え切らない答えを返す。

その時まで、小学校の校門前の様子には、誰も気づく事はなかった。が、それによりやく気づいたコナンは、目前に現れた信じられない光景に、驚愕し立ち止まった。

「どうしたの？ 江戸川く……っ!？」

首をかしげながら校舎から出た哀も、学校の外に歩く二人の男女を見た瞬間、凍りついた。

続けて、探偵団達が次々外へ出たが、彼らの反応は、また全く別のものだ。まず、指をさして大声を上げたのは歩美だった。

「あーっ、蘭お姉さんだ!」

「隣に居る人は……確か昔よくニュースで出てた……」

「え、光彦知ってんのか？ あの兄ちゃん」

顎に手を当て、真剣な顔で考え込む光彦に、きょとんとした顔の元太が尋ねた。そんな会話が、コナンの右耳から入っては左耳に抜けてゆく。

「灰原……やっぱり、オメーにもアレ、そう見えてるよな？」

「ええ、そうにしか見えないわ」

「じ、じゃあ、オレがおかしくなったわけじゃねーんだよな？」

「そうね」

震えるコナンの声と、動揺しながらもクールな声が、交互に行きかった。二人の視線の先には、その彼しか映ってはいない。

五人に気づき振り向いた蘭は、探偵団に笑顔で手を振った。幾分、いつもより上機嫌な様子で。そして、同じようにゆっくり振り向いた彼も、その顔に落ち着いた笑みを浮かべる。

コナンは酷く混乱していた。今その男が浮かべた微笑は、その顔は、確かに高校二年生だった頃の、自分のものだ。

明るい顔で校門へ走っていく探偵団の後ろから、コナンはふらふらと二人に近づいた。

「皆、コナン君、学校丁度終わった所だったんだね」

「うん！　ねえ、蘭お姉さん。そのお兄さん誰？」

歩美が好奇心旺盛な顔で聞いた質問に答えたのは、蘭の隣にいた彼だった。

「オレは、工藤新一って言うんだ。初めまして」

歩美の頭を優しくなで、にこやかに笑って見せた彼に、歩美はつ

い赤くなった。その様子を見て、元太と光彦も嫉妬の表情を浮かべる。

蘭は、呆然とその様子を見つめるコナンを、突然抱きしめた。ぎゅっと抱きしめる彼女の鼓動は、いつもより幾分早い。

「あのね、真っ先に、コナン君に伝えたいなって思ったの。今までずっと、新一と私の事心配してくれててありがとう！ 新一、帰ってきたんだよ。これからは、三人で仲良くしようね」

「え……えっと……あ？」

蘭の嬉しそうな様子に、コナンの言葉が詰まる。

視線を逸らした先には、自称、工藤新一を名乗る彼がいる。コナンはそっと手を伸ばして、彼のほほに触れ、それをつねりあげた。だが、結果尚更混乱させられた。判ったのは、今いる彼は自分の顔でそこに居て、変装しているわけではないという事実。

この状況下で、例えば偽者だと言っても、それを証明出来る証拠は何もなく、悪戯に蘭を悲しませるだけだ。それが、コナンにはよく判っていた。だからと言って、当然ながら、あっさり受け入れるわけにもいかない。

コナンはじつとその”工藤新一”を名乗る彼を観察した後、念を押すように尋ねた。

「……ほ、本当に、新一ちゃんなの？」

「そうだよ、よろしくな。コナン……くん？」

ゆっくりと深い笑みを浮かべた彼は、蘭に抱かれたまま浮いたコナンの手を持ち上げ、自分の右手と重ねた。握り締める手の形は、まさしく長い間持っていた自分の手そのものだ。気持ちの悪い事実
に頭が痛くなるように感じながら、コナンは何の反論も出来ずに引

きつった笑みで答えた。

「……よ、よろしく。新一、兄ちゃん」

絶対正体を暴いてやる、と誓った彼の心を知ってか知らずか、終始”工藤新一”は穏やかに笑っていた。

2、工藤新一と江戸川コナン（後書き）

はいV初回のみサービスで連日更新でしたー^^
今回もお読みいただきまして、ありがとうございます!!

ふふふ、混乱する江戸川と共に、このお話は始まるのでーす♪
本当は、前回のと今回ので一話分の予定でしたw
これからこの新一を名乗る彼が、コニヤを、蘭ちゃんを、さまざま
な人達を巻き込みながら、物語を発展させてくれる事でしょう（^^）

というわけで、次話もまた是非お楽しみいただけたら幸いですV

3、敵か否か――

茶髪の少女は、ソファに腰掛けながら、気だるげに手にしたファッション誌をめくった。ちらり、と前を見やり、興味なく視線を元に戻す。熱さが幾分緩和された紅茶を、少女――哀はゆっくり口に運んだ。

向かい合って座る眼鏡の少年は、もう一時間になろうか。そこに腰掛けたまま手をあごにあてて考え込んでいる。そして時折、目をこすったり頭を抱えたりする仕草も見せる。昨日も寝不足だと言っていた癖に、一晩中考え込んでいたのか、彼の顔色はどこか土気色に見える。

一週間ぶりの休日を地下に籠って満喫するつもりだっただけに、彼が邪魔で仕方がない。

「全く……朝っぱらから押しかけてきたと思えば何？ うっとうしいわね」

「憎まれ口たたくらいいなら、おめーも何か意見出してみろよ。ったく、誰の葉のせいで、こんなややこしい事になってると思っただ？」

「あら。彼が現れたのは私のせいじゃないと思うけど？」

眉間に皺を寄せてにらみつけてくる彼に向かって、哀はさらりと返した。

「オレが縮んでなけりゃ偽者なんかに踊らされる事はなかったつつてんだよ！」

「……どうせどこかの気障な怪盗さんのしわざでしょ？ 工藤君もヤキが回ったかしら？」

口調を荒げた彼にも、哀はあくまで冷静な答えを返した。だが、彼は尚更眉間の皺を深く刻み、言った。

「バーロ。んな単純な事だったら、わざわざ博士んちまで来て悩むかよ」

「じゃあ、違うの？」

ずっと手に持ち続けていた紅茶をテーブルに戻し、再度彼に問う。すると、彼は真剣な眼を向けてきた。

「……あれは、キッドじゃないさ。奴なら気配で確実に分かるし――、奴自身も俺と二人になる時まで工藤新一になりきる事はしねえ筈だからな」

「ベルモットでもないわね。会った時、何も感じなかったから。……じゃあ、残る可能性は、あなたが偽者か、かしら」
「おい！」

敢えて皮肉まじりに茶化すような台詞を返すと、彼は苦笑しながらも短く突っ込みを入れた。腑に落ちない表情でソファに寄りかかる彼をしばし無言で見つめ、そしてまたマグカップに口をつける。ふっと吐息をこぼしてから、哀は今度は目を細めて真剣なまなざしを送った。

「なら、何者だって言うのよ。組織の仕業だとしたら――私は彼に何も感じないけれど、わざと気配を隠してる事も考えられるわ。もしそうだとしたら、あなたはあまり私と関わらない方がいい。工藤新一と違って、私の幼少期の顔は彼らに知れてるから、私の正体がバレた時、真っ先にあなたやあなたの周りもまずい事になるわよ」
「わあってるよ。けどなあ……」

いまいち煮え切らない彼の答えに、眉間を寄せた。哀の心配をよそに、彼はいつもこの手の話題を軽く考え過ぎている。微かないだちを感じながら、哀は言った。

「けど何なの？」

「あいつから、悪意とか敵意とか、そういうもんを全然感じねーんだ。昨日結局、あいつおっちゃんがいなかったのもあって探偵事務所に泊まりやがったんだけど、探り入れるとかそっちのけで、オレにも蘭にも嬉しそうにつっつか楽しそうに接してきやがって」

「じゃあなんだって言うの！ 悪意があるから別人に成り済ますんでしょ？ あなたいつも危機感が足りない過ぎるわー！」

つい声を荒げて怒鳴りつける。彼はまた苦笑まじりな表情を浮かべ、初めて手元にある紅茶を口へ運んだ。ぬるかったのか砂糖の入れ過ぎか、一度咳払いをしてから、彼はカップを不満げに見つめた。

「確かにそうだよな。ただなんか、別人って感じがどうしてもしねーんだ。変装が上手い奴ってよりも、オレが分身したみてーな……いやっ、ありえねー話なのは分かっているけどよ」

「非現実的過ぎて、あなたらしくないわね。よっぽど混乱してる？」

「まあ、それなりにな。とにかく奴の正体は、今んとこ保留だな。灰原も、もし奴が組織の関係者だとして、過剰な態度とってたら逆に怪しまれるから、こもったりしねーで、普通に子供らしくしてろよ」

真面目な顔で言った彼に、哀は目を閉じ、小さく息をついた。ゆっくり開けた双眸に未だ釈然としない様子の彼を映し、机にあるマグカップの取っ手に指を絡めた。

数秒、意味もなく冷めかけた取っ手の感触を楽しんでから、哀は口を開く。

「……わかったわ。彼が敵かどうかの判断は、保留にしておいてあげる。私も、あなたがそれに結論出すまでは普段通りの態度でいるわよ。それでいいんでしょ？」

「ああ」

「でも、気をつけてね工藤君。相手が何を考えてるか分からない以上、常に警戒しておいて」

哀の台詞が作った張りつめた空気を、彼の笑顔は一蹴した。

「当たり前だろ？ 心配すんな、必ず守ってやつから」

その力強い科白に、幾分哀は強張らせていた表情を和らげた。

持ち上げたマグカップの中を覗き、一つため息をこぼす。空になったカップは、机の上に軽い音で着地する。まだたつぷりとある彼のカップを一瞥し、哀はけだるげに立ち上がった。

「灰原？」

「まだあなたに付き合わされそうだから、紅茶のおかわり注いでくるわ。早く飲まないと、もう冷めてるわよ」

「あー、オレ出来ればコーヒーの方が」

「ないわよ、悪いけど」

彼のわがままを、きっぱりと切り捨てる。小さな舌打ちを後ろに聞きながら、哀はヤカンに火をかけるべく台所へと向かった。そして、コンロの上で燃える炎を眺めながら、工藤新一と名乗る男の正体をぼんやり考えていた。

3、敵か否か——（後書き）

今回もお読みいただきましてありがとうございますーV V

本当は、今回の話は週末にと思ってたのですが、執筆具合が順調で気が向いたので、投稿しちゃいます☆出血サービスV

三話目になりました。今回は、哀ちゃんとコニヤのやり取りをお送りします（^^）

お楽しみいただけましたでしょうか？

コニヤと哀ちゃんのこんな風なやり取り書くの、結構好きだったりますV

二人のやり取りって言うとかかなりの頻度で阿笠邸での話になるのですが、うん、やっぱり阿笠邸がいいな♪↑

というわけで、彼は一体敵なのか、それとも……という今回のお話。皆さんは、当然敵に決まっている、とお思いでしょう。そりゃあ、コナンが居る時点で、彼が工藤新一を騙ってるという事実は確定しているのですから。

でも、コナンは勿論それを承知で、結論を出しあぐねているのです。

そうですね……彼が敵か否か、悪い奴なのか。今は、私からは何も言えません。

ただ、話が進む中で、皆さんにも少しずつ迷いが生じてくる、かもしれないよ（^^）

あ、コナンも言った通り、『彼がキッドである』という選択肢は存在しない事だけ、今はっきり明言しておきましょう。

キッドファンの方ゴメンネ。キッド、多分出ない（^^——）；

というわけで、そんな色んな謎と伏線をちりばめつつの三話でした！
次話もまた、是非見捨てずにお楽しみ頂ければ幸いですV

4、寒い帰り道

うす暗くなった空に、雲が穏やかに浮かんでいる。うつすらと遠く見える月は、その周りだけほんの僅か白く照らしている。街中には、時折ぼつぼつと灯りが見えた。

時間的には、夕方。博士の家を後にして、探偵事務所に向かうコナンは、何回目かになる大欠伸を一つして、吹いた冷たい風に身体をちぢ込めた。そして、突然背後に感じた気配に、はっとして振り返る。

後ろに立っていた男は、一瞬だけ驚いた様子で一步分のけぞると、軽く片手をあげて微笑した。

「悪い。知ってる子供が歩いてたから声かけようと思ったけど、驚かせちゃったか？」

「し、新一ちゃん。どうしたの、こんな所で」

「おっと。その前に」

動揺を隠しきれずに尋ねると、彼はコナンに視線を合わせるように、自然な仕草でかがんだ。柔らかな表情のまま、彼は自分が巻いていたマフラーを、コナンの首元にそっと巻きつけた。

そう言えば朝よりぐっと気温が下がって、首筋が寒かった事を思い出しながら、ふかふかのマフラーに手を触れた。不覚にも、暖かさに気が緩む。

「あ、ありがとう」

「いや、寒そうだったから。首元冷やすと風邪ひくぜ？　で、オレがなんでここにいたかだっけ？」

「あ、うん」

頷くと、彼はちらりと来た方の道を見やる。

「博士んちに行って、挨拶しようと思ってたんだ。オレがいない間も、色々蘭にフォローしてくれてたって聞いたからさ」

「へ、へー……けど今留守だよ。博士、ここ三日間学会とかで遠出してゐるから」

嘘ではなく、あの家には今、哀しいない。二人で会わせるような事は、極力ない方がいいだろう。

すると、彼は少し困った様子で、考えこんだ。

「そっか、今博士いねーんだ。相談したい事もあったんだけど」
「相談？」

「ああ、ちょっとな。それに今、実は探偵事務所におっちゃん居てさ。酒飲んでるからいずれ酔っぱらって寝るだろうけど、それまで出入りできねーんだ」

「自分の家には帰らないの？」

尋ねて、彼の顔色や反応をうかがった。だが、彼は特に動揺した様子も見せずに、切なげな顔を見せた。そして、少し迷いながらも口を開く。

「蘭が、さ。オレが居ない間ずっと一人だったろ？ オレもずっと会いたかったし、折角帰ってきたら少しでも長い間一緒に居たいと思ってよ。……って、ガキがんなこと聞いたってわかんねーだろうけどな！」

「そうだね、よくわからない」

話の途中で、顔を赤くして照れたようにそっぽを向いた彼に、コナンは目を細めながら言った。わからない、というよりも、わかり

たくないという方が正しいだろうか。

そんなコナンをよそに、彼は話を続ける。

「それにほら、あの家誰か住んでるみてーだし、知らない奴と一緒に住むのは落ちつかねーけど、追い出したら悪いだろ？ 金はあるから、事が落ちつくまで蘭の家とホテル暮らしでいいかなーってさ」
「……へえ。そうなんだ」

コナンは気のない返事を返す。それを受け流しながら彼は立ち上がると、少しだけ考え込んで、言った。徐に、彼は両手を、着ていた黒のロングパーカーのポケットの中に入れる。

「おっちゃんが酔い潰れたら、蘭が連絡くれるって言ってたんだけど、それまでオレ特に行くところねーんだ。だから、ポアロにでも付き合ってくれねーか？ あ、勿論オレがおこってやつから」

「別にいいけど」

「じゃあ、決まりな。お前も色々聞きたい事ありそうだったけど、昨日は殆ど蘭につきっきりだったから、気にはしてたんだ」

嬉しそうに笑って探偵事務所方面への道を歩き始めた彼の背中を追った。

一歩程後ろから彼の様子をじっと眺め、コナンは考え込んだ。笑顔、困った顔、頬を染めた顔、どれも演技には見えないのだ。実際の自分より若干感情表現が豊かに見えるのも、芝居ではなく素のもののようなのだ。

「お前さ」

短く話を振られて、顔を上げる。彼は真顔で後ろに首を傾け、コナンを眺めていた。平静を装いつつ「何？」と尋ねると、彼は声を

ひそめるようにして言った。

「オレの事、信じてくれてないよな？」

「……何の事？」

「オレが工藤新一だって事さ。信じてないだろ？ 偽物だとしても、思ってるのか？」

微かに吹いた風が、二人の髪を揺らした。一瞬だけ切なげに見える新一の口元と視線が、すぐに元に戻る。

そんな彼の様子に、少し逡巡したコナンは、口角を上げ、不敵な笑みを浮かべた。もう一度吹いた冷たい風が、コナンの前髪を乱す。

「だとしたら、どうするの？」

敢えて挑発する言葉を選んだコナンに、彼は目を丸くした。だが、それも束の間だ。

無言のまま、じっとコナンを見つめていた彼は、詰めていた息をふっと吐きだした。手の甲でコナンの頬に軽く触れた後、首のマフラーを少し持ち上げた。

「悪い」

「へ？」

予想外の行動に、思わず素っ頓狂な声をあげ、口をぽっかり開ける。間抜けに見開いている目に視線を合わせながら、彼は言った。

「話振ったのオレだけど——こんな所で立ち話してたら、身体冷えるだろ？」

「……随分過保護だね。マフラーもらったし、ボクはそんなに寒くないよ」

「よく言うぜ。寒さで頬が赤らんでる癖に」

きっぱり告げた後、彼はふっと微笑してから再び歩き始めた。

「おい！」

眉をひそめて、その後を追う。すると、彼はちらりところらを一瞥した。

「子供って、結構簡単に風邪ひくだろ？ オメー、睡眠もあんまとってないみてーだし、顔色もよくねーし、身体壊す条件揃ってるじゃねーか。心配すんな、移動したからって話題を都合よく変えたりはしねーからさ」

「オメーはオレのお母さんかよ」

ぼそりと毒づく、前を歩く彼は小さく笑った。彼は石垣沿いに道を曲がって、肩をすくめる。

「バーロ、逆立ちしても子供は産めねーよ。母さんじゃなくて、兄さんみたいな感じかな？ どうもオメーの事、他人とは思えなくてさ」

「奇遇だな、オレもだぜ？」

語調に目いっぱい肉を込めて、コナンは不敵な笑みを口元に浮かべた。向かい通りの木々は風にざわざわと葉を揺らしていた。もうじき初冬になろうとする風は冷たく、自然と歩いている上半身は強張った。

不本意ながらも他愛ない会話をぽつぽつと交わしながら、二人は喫茶ポアロまでの道を歩いた。

4、寒い帰り道（後書き）

今回もまたありがとうございますー！！

四話目、今度は新一を名乗る彼とコナンとのやり取り、と言う事で。

三話まで読んでいただいた限りでは、恐らく彼の人物像はあまり見えてこなかったと思うのです。なので、今回はコナンとぶつける事で、彼の人物像を少しご覧いただければな、と。

これから話が進むほど、どんどん彼をお見せしますので、その上でもし彼の事も気に入ってもらえたらそれはそれで嬉しい限りデス（^^）そして、彼の登場によって暴走するコ蘭……もといコ↓↓↓
蘭（笑）シーンもお楽しみいただければwwww

それでは、また次話もよろしく願いしますー♪

5、駆け引き

ホットコーヒーを二つ、ブラックで。二人用の丸テーブルで、向かい合うように座った二人は、熱いコーヒーに息を吹きかけながら、同じような仕草でそれを口に運んだ。コーヒーカップから口を離し、熱くなった息をふーっと吐き出す。

「うまいな、ここのコーヒー」

彼の口からぽつりと呟かれた言葉に、コナンは敏感に反応した。カップを置く彼の手を一瞥した後で、視線を彼の目に移す。

「新一兄ちゃんなら、飲んだ事あるんじゃない？」

「暫く飲まない、味も忘れるからな」

揺さぶりをかけるように尋ねた言葉は、余裕の表情でさらりと交わされた。コナンは若干むっと顔をしかめ、頬杖をついた。

無論、彼が工藤新一である筈がないのは明白だ。しかし、あまり強く突っ込めないのは、自身が本物だからである。偽物だと言い切れる程の証拠が他にない状態で主張するのは、自分が工藤新一だとな乗りをあげているようなものだ。

コーヒーの香りが湯気と共に鼻を刺激する。深呼吸してそれを体内に取り込み、焦るな、と自分に言い聞かせた。落ちつくためにも再び、コーヒーをすすする。ゆっくり味わいながら飲みこむと、じつとその様子を眺めていた彼が口を開く。

「お前って七、八歳位だろ？ よく飲めるな、ブラック。身体に悪いぜ？」

「舌は大人なもんでね。新一兄ちゃんって、そんなに過保護なキャ

ラでもなかったと思うけど？」

意地の悪い聞き方をして反応を窺おうと思ったが、今度はきょとんとした顔が返ってきた。

「いや、確かにそうだな。どうにもお前見てるとよ。冷えてる夜に薄着でいたり、あんな人通り少ない道を暗くなってから一人で歩いてたり、ブラックコーヒー平気で飲んだり、身体壊したいか誘拐されたいかどっちかのような気がして、ついさ」

「……まあ、うん。確かに危なっかしく見えるかもしれねーけどさ」

反論の余地もない。

実際自分も、高校生の頃の視線で、今の自分のような子供を見たら色々心配するだろう。長い息をこぼしたコナンは、バツの悪さに視線を窓の外へとずらした。じっと逸らさず見つめてくる視線がどうにも気まずい。

「それだけじゃないんだろ？ オレの事疑ってる理由」

静かで穏やかな声に問われて、小さく肯定する。声質もトーンも、確かに工藤新一のそれに間違いはない。けれどキッドの変装ではなく、ベルモット等の変装でない事も立証済みだ。

「遠慮しないで聞きたい事聞いてみるよ。オレはお前と、兄弟みたいに仲良くなれたらって思ってたんだから」

「じゃあ博士の――尻の秘密知ってる？」

プロフィールや、関わった事件や蘭の事などは、調べていて当然だ。ならばそう簡単には知り得ない事を聞いてやろうと、思ったのだが。ふっと小さく噴出した彼は、笑いをこらえるように口元に手

を持っていき、答えた。

「尻のほくろから毛が一本はえてるって話か？」

「な、なんで知ってるの？」

流石に動揺して聞き返した。すると、彼は当たり前のように少し逡巡して答える。

「なんでって——オレずっとガキの頃から博士には世話になっててさ。一緒に風呂に入れてもらった時に見てたんだ。そっかー、おめーも知ってたんだな？」

「ま、まあね」

顔をひきつらせて答えながら、想像で答えられるかもしれない問いだったかと僅かに反省した。

コナンは、何度目か再び男を細部まで観察した。髪形と、顔立ちには間違いなく記憶通りの自分だ。目が合うと、彼はにこやかに微笑した。服は無地の黒シャツの上から、裏地に白を覗かせた黒いロングパーカーを着込み、スキニージーンズをはいている。衣装の趣味が自分とあうかは疑問だが、そんな事はどうでもいい。

昨日初めて会った時からの戸惑いは未だに消えず心に靄を作っている。

これほど当たり前のように目の前で【工藤新一】のフリをされているというのに、怒りも嫌悪感もさほど沸いてこない事に、ずっと戸惑っていた。だが、暖房が利きすぎに思える喫茶店の中では、頭がぼーっとして冴えた考えが浮かばない。

突然、ずっと差し出された大きくて冷たい手に、頬を軽くつままれた。驚いて振り払うと、彼はどこか哀しげな目をして微笑んだ。

「んな怖い顔すんなよ」

呟いた彼を、猜疑心たつぷりの視線でにらむ。一度逡巡した後で、切迫感溢れる表情で歯をぎっと噛みしめた。そして、敢えて感情的に声を荒げる。

「……前にもあったんだよ、全然知らない人が、新一兄ちゃんのフリしようとした事。けど、偽物だって事になったら、蘭姉ちゃんは悲しむんだ。だから、新一兄ちゃんだって思えないアンタが蘭姉ちゃんの事傷つけるんじゃないかつ」

「蘭の事は絶対に傷つけない！」

コナンの言葉をさえぎるような大声が、喫茶店内に響いた。マスターと梓が、カウンター近くで驚いて身体を強張らせ、梓の運びかけだったコーヒークップは、地に落ちて割れた。

客が今コナンと新一の二人しか居なかったのが幸いだろう。梓はマスターに手伝われながらも、慌てた様子で破片を拾いながら、コナン達に「大丈夫？」と声をかけて来た。

コナンは、動揺した様子で呼吸を乱す彼を、目を見開いて見つめた。昨日初めて会った時から、一度も余裕を崩さなかった彼が、初めて感情をむき出しに声を張り上げたのだ。

「蘭は……オレが守る。泣かせたり、傷つけたり、んな事あったまるかよ！」

早口で告げた彼を、未だコナンは呆然と見つめていた。数秒の間をおいて、彼ははっとした様子で視線を逸らすと、小さく「悪い」と呟く。

コナンは無言のまま暫く逡巡し、そして小さく開いた口の中で、ぼそりと言った。

「……キミは、蘭姉ちゃんの事が、好きなの？」

「——ああ。好きだよ」

若干沈黙した後、彼は眉を寄せ、頬を赤らめながらそれを肯定した。瞬間、胸のざわつきを感じながら、コナンは机の下に隠れている右手の拳を、震えて赤くなる程、きつく握り締めた。

心拍と血圧が、急激に上がる感覚を覚えた。

5、駆け引き（後書き）

第五話ですー！　こんばんはV今回もありがとうございますー！！
最近本誌サンデーの展開がめちゃくちゃ熱すぎてヤバい位興奮して
ますVネタばれになっちゃうので詳しくは言えませんが、新しく出
てきてるあの子！　あの子が個人的にドツボ中のドツボですVVV
あの子について私と語り合いたい方居たらネタばれになっちゃうの
でメッセでどうぞ（笑）

とまあ、関係ないお話をしましたがW今回も予定を早めて投稿ですV
ところで、工藤はポアロに行った事あるんでしょうか？（笑）

そんな感じの描写は原作・アニメ共に一度もなかった……ですよね？
微妙なとこだよなあ、と思うんだよね。蘭の家の下だから、勿論何
度でも通りがかった事はあると思う。けど、中に入って飲んだりし
た事があるかつーと。

更に、梓ちゃんと工藤さんは面識あるのかな？

一応、このお話では、ない事前提で書きました。その方が都合よか
ったの。ごめんねW梓ちゃんがいつからポアロに居るかも分からな
いし。

……というわけで、次回はささやか（？）な修羅場と暴走するコ蘭
の提供でお送りしますW

また是非、見捨てずお読みいただけたら幸いですーV

6、譲れない事

余程会話の内容が気になるのだろうか。先程から、カウンターで簡単な仕事を片付けて居る梓が、ちらちらとこちらを覗いているのが心配で分かる。

目の前の男はそれにまるで気にするそぶりを見せず、もう一度コナンの目をまっすぐ見つめて、言った。

「オレは、蘭の事が好きだ。ずっと、ガキの頃からな」

はっきりした発音で告げてくる。コナンは暫く無言のまま、閉じた口の中できつく奥歯をかみしめた。胸の奥から、腹の底から、何かがこみ上げてくる。目の前にいる偽物は、工藤新一の顔と声で、昔から蘭の事が好きだったとわがもの顔で言っているのだ。

コーヒーに伸ばした手が微かに震えた。カップの取っ手に人差し指をかけて強く掴んでも、震えはおさまらない。そのまま持ち上げたカップを、目の前の男目がけてぶん投げたい気持ちを、必死でこらえた。

小さく深呼吸をして、震えるカップを抑え込みながらそれを口に持っていく、ごくりと喉に流し込む。カップをテーブルに戻して、再び長く息を吐いた。自分の眉間がぎゅっと寄っているのを感じながら。

「蘭は……蘭姉ちゃんは、新一兄ちゃんの事が好きなんだよ？」

俯き、感情をぎりぎりまで抑え込んだ声が、口から洩れた。

頭の中が酷くざわついて、感情をどう抑えていいか分からない。

「ああ、知ってる。だからオレが必ず蘭を幸せにし」

「だから！ 気安く蘭を好きだとか、幸せにするだとか、突然出てきて、んな簡単に言ってるじゃねえよ！ あいつはオメーには絶対に渡さねえからな！」

彼が言い終わる前に、自分でも驚くほどの怒鳴り声が上がった。向かい合う彼を思い切り睨みながら、息を切らす。彼は中途半端に口と目を開いたまま、コナンを眺めた。同時に、店内の空気もピーンと張りつめ、マスターと梓の驚いた視線もまた、横方面からひしひしと感じた。

首に手をかけ、そこに触れたマフラーを乱暴に引っ張り、解く。それを、テーブルに粗雑に置き、立ち上がると踵を返して店を後にした。

冷静なまま居られなかったのは、寝不足のせいかもしれない。あんな逃げるような真似は、自分らしくないだろうと思った。だが、あの場であのまま、あの顔を見ていたら、混乱しておかしくなりそうだった。現に、今もまだ目が回っているように思う。

コナンはいつもより高く感じる階段を駆け上がり、三階のドアを勢いよく開いた。

「あら、帰ったのねコナン君。さっきお父さん酔いつぶれちゃって……え、ちよつ、コナン君？」

蘭の言葉に答えずに、コナンは部屋へ向かった。一度鍵を閉めたが脇で寝る小五郎のいびきがやかましく、部屋から出てトイレに入った。やり場のない憤りを、拳で思い切り壁に叩きつける。

「くそっ」

小さく呟き、拳をゆっくりと開く。目に映った子供の手に、形容

し難く混沌とした気持ちが押し寄せた。そして、ふっと顔をあげて耳を澄ます。ぱたぱた、と廊下から近づいてくる足音が蘭のものだと推測するのは容易な事だ。

「コナンくん！　どうしたの、何かあった？　それとも、具合でも悪いの？」

トイレがノックされた後で、気遣うような声が外から届く。帰ってすぐ「ただいま」も言わずにトイレに籠もれば、確かに心配になるものだろう。

きゅっと唇を噛んで、小さくため息をこぼして気分を落ちつけてから、トイレの水を流す。トイレから出ると、蘭が目の前で心配そうに立っていた。

「コナン君、大丈夫？」

中腰までしゃがみこみ、視線を合わせて尋ねてくる蘭に、俯いていた顔をあげ、笑顔を作った。

「大丈夫だよ、ちょっと考え事してたし、トイレも我慢してたんだ」「考え事って、何か悩みごと？　よかったら何でも話してね、私コナン君の力になりたいから」

尚も心配そうに話しかけてくる蘭を、視界に収める。しゃがんだ蘭の顔も肩も首も、手を出せば簡単に触れられる位置にある。

コナンは、ゆっくりと手を伸ばした。蘭の肩に触れ、首筋に手を回し、身体を寄せる。

「こ、コナン君？」

驚き、動揺した声を上げる蘭を抱きしめる手に、更に力が入る。蘭の肩の上に少し浮いた顎の角度をずらし、口元を蘭の耳に近付ける。

「蘭姉ちゃん、ちょっとだけ……このままいさせて？」

「う、うん」

困った様子の声が耳をくすぐった。抱きしめた身体の触れあっている部分から、彼女の早い鼓動が伝わる。鼻にふわりと香るいい匂いも、温もりも、自分以外の誰かに奪われるなんて冗談じゃない。ましてや、それが堂々と工藤新一のフリをして蘭を騙している男なんかに。

「蘭姉ちゃん……」

眩き、彼女への拘束を緩めた右手で、そっと彼女の頬に触れた。半分左手で抱きしめた姿勢を崩さないまま、それをぐっと引き寄せ、蘭の左頬に唇を押しつけた。

「コナン、く——！」

柔らかくて滑らかな蘭の頬の感触が、唇から伝わって来る。口元から、次第に顔も体も熱くなっていくように感じた。脳がしびれるような熱さに、唇を離さないまま、コナンはゆっくりと目を閉じた。

「あ、あれ、コナン君ちょっと——」

「……え？」

6、譲れない事（後書き）

今回も見捨てず読みに来て下さってありがとうございますーV

……コナン暴走回ですwつつても、一応原作の江戸川を意識した壊し方をしてますので許してー（笑）

蘭にこういう風に積極的に攻める江戸川は好きですw
さて、そろそろコニヤいじめが本格的になって来そうな……（笑）
趣味全開でゴメンナサイ的モード突入……するカモネw

まあ、ひとまずは、次話もよろしくお願いしまっす！

7、届いたメール

さびしい程静寂が訪れた店内は、取り残された者達の気まずい雰囲気支配されていた。未だ先程のコナンがとった態度が分からず、彼は呆然としたまま戸を眺めていた。テーブルに残されたマフラーを手に取り、自分の首にかける。

彼は先程のやり取りを、再び脳内で再生した。

「どういう事、なんだ？」

動揺を隠しきれずに、小さく呟きながら、顎に手をやり考え込む。

「江戸川コナン。あいつも、蘭の事が――？」

そうとしか、あの態度に説明はつかない。子供が姉を取られて駄々をこねるのではない。出ていく時のコナンはまるで、恋人が奪われるかのような態度だった。

「あのー、」

遠慮がちに横から尋ねられて、首を向ける。話しかけづらそうにお盆を抱えた梓が、そこに立っていた。一瞬だけ真顔だった顔に笑顔を作りなおして、応える。

「何か？」

「あ、こんな事聞くの失礼だと思うんですけど――コナン君、どうしちゃったんですか？」

「さあ、オレにもよく……」

苦笑まじりに、頬をかきながら答えると、彼女は訝しげな表情を浮かべた。

「コナン君は、いつも周りに気配りしてて蘭さんとも凄く仲良くて、しっかりした凄くいい子なんです。いつも落ちついてて、あんなに声張り上げてる所なんて見た事ないし、なんか深刻そうな話してたみたいですし」

「ええ、まあ。オレも彼と仲良くなりたくてこうして二人きりでコーヒーを飲みに来た筈なんですけどね」

口調を乱さず、穏やかに答えたが、逆にそれが梓の気に障ったらしい。むっとした顔をした彼女は、手に抱えていたお盆を、先程より強く抱きしめた。

「あなたが、何か言ったんじゃないですか？ コナン君に酷い事。だとしたら、いくらお客さんでも許さないですから！」

「あ、いやっ。オレは酷い事言ったつもりはなくて。蘭の話をしてたら急に」

「蘭さんの？」

猜疑心たっぷりで詰め寄って来た彼女に、慌てて弁明した。聞き返された言葉に小さく頷く。それでも納得のいかない表情をしている彼女に説明しようとした時、ポケットに入っていた携帯電話が鳴った。真新しい携帯電話をポケットから取り出すと、どうやらメールのようだ。

「蘭からだ。電話してくればいいのに」

そう呟きながら、メールボックスを開く。同時に、彼は目を丸くした。余程気になった様子の梓が、横から携帯画面をちら見しよう

としたが、内容を読まれる事には特に抵抗はなく、されるがまま画面を広げていた。

”ごめんね、新一。お父さんはもう寝たんだけど、ちょっと都合悪くなっちゃって。待たせてて勝手だけど、今日は会うの止そう？”

予想外のメールに、少しだけ呆氣にとられた。彼は少し考え込んでから返信画面を出して、早くて滑らかな手つきで文字を入力する。

”どうかしたのか？ オレ今ポアロに居るんだけど”

そう返信すると、ほんの僅かの時間をおいて、また携帯画面に蘭の名前が表示された。

”じゃあ、ちょっとだけ来る？ 昨日みたいに話は出来そうにないけど、来てくれるだけなら助かるかも。今ちょっとコナン君がね、”

続く言葉に、彼は目を大きく見開いた。

携帯電話を閉じた蘭は、ふう、と小さく息をついた。そして、視線を斜め下に落とした。すぐ目の前には、布団に深く入って、目をつむり横たわっている少年がいる。蘭は目を細めながら、彼の少し湿った頭をそっと撫でた。

新一が帰って来たからと、浮かれていたせいで気付けなかったの

かも知れない。そう思うと、胸が痛む。

それは、ほんの数分前の事だ。コナンに突然抱きしめられて、左頬にキスをされた。コナンの顔が赤いのも、その唇が熱く感じたのも、最初はそんな大胆な事をしてきたからだと思った。

「あ、あれ？」

考えて見れば、少し前まで外に居た筈の彼の手は、触れられている頬越しにも熱く、少し前に抱きしめられた時も、彼の体に異様な熱さを感じていた。ほほに伝わる呼吸も、考えて見れば不安定に乱れて、熱い。

「コナン君、ちょっと――」

「……え？」

やけにはっきりしない声が返ってきた。唇を離し、ぽかんと見上げてくる彼の顔はやはり赤く、目は僅かに潤んでいる。そして額に汗を滲ませ、肩を上下させながら呼吸している。

汗のせいで湿っていた前髪を持ち上げながら、蘭はコナンの額を手で覆った。案の定、その汗ばんだ額は予想以上に熱かった。触れた瞬間に、明らかな体温の違いが判る程に。

「やっぱり。おかしいと思ったら熱があるじゃない！」

「ね、熱？」

「うん。しかもかなり高いよ？　こんな身体で、こんな時間まで出歩いてたなんて……！」

だが、とろんとした目で見上げてくるコナンは、怪訝な顔で、眉間にしわを作る。

「大丈夫だよ。……熱いのは、蘭姉ちゃんのせいだ……」

「何言ってるの。こんなに熱があるのに、自覚症状がないわけないでしょ？　待ってて、今私の部屋にお布団引いてあげるから。体温計と氷枕も用意しないかね。まず横になって——コナン君？　大丈夫？」

説明を聞く彼が、次第に俯きながら右手で額をおさえた。先程までちゃんとまっすぐ立っていた足が、二、三步不規則によるめいた声をかけると、彼は額を抑えたまま、ゆっくり顔をあげた。

「へい、き………あ、あれ？」

弱々しく、ろれつの回らない声が、コナンの口から洩れる。同時に、顔を上げた勢いのまま、コナンの体は後ろに重心を取られてしまったらしい。そのまま彼はふらふらと、一步、二歩、後ろに足踏みをしたが、こらえきれずに力を失い、床に仰向けに倒れこむ。

「コナン君！」

蘭は慌てて身を乗り出して、コナンの頭を受け止めた。うつろな眼で蘭を見上げた彼は、自分に何が起きているのかよく理解していない様子で、小さく口を開く。

「だ、だいじょうぶ……だよ……ら、らん、ねえちゃ……」

途切れ途切れに、舌が回らないような発音と小さな声でそこまで言いかけて、コナンはふっと目を閉じ、蘭の腕にもたれかかった。

「コナン君！　ちょっと、コナン君っ！」

呼びかけてもそれ以上応答はない。蘭が抱きかかえる腕の中で、ぐったりと体重を預けたコナンは、目を閉じ、赤い顔で不規則に早い呼吸を続けている。

それから、蘭はすぐにコナンの布団を持ち出してそこに寝かせ、頭を冷やし、体温計を脇に挟ませた。

体温計が示した三十九度五分の熱に困惑しながらも、一通り処置を終えた蘭は、新一にメールを入れたのだ。

7、届いたメール（後書き）

今回もお読みくださいまして、ありがとうございます！

うふふふw

話が始まった時から、さりげなく少しずつ立ててたコニヤ体調崩壊フラグと伏線が、やっとここで回収できたぜvvv

って、”さりげなく”でもないよなw……結構あからさまだったよなw

本当はね、体調崩壊するコニヤはこの次の話におあずけな予定だったんだけど、嬉しいコメントとかもらったりして、出血大サービスしたくなっちゃった☆

てか、前回のあの攻めコニヤ、好評だったみたいでよかったーvこの、『最も危険な二人』ではね、江戸川、体調悪かったりする割に結構攻めるよ…v

楽しみにしててねーv

私ホント、現実ではそんな事ないんだけど、二次元ではとこっとん……特に江戸川とか工藤には、超ドSなんです（笑）……てか、『ドS宣言』何回目だ？w

愛しのあの子が苦しんでいるその様を書くのも読むのも描くのも見るのも大好きなんですwww

変態とでもなんとも呼びたまえ！ いいんだもん、もうとっくに開き直ってるもん☆

病氣的にも手負いのにも、精神的にも肉体的にも、いつも苦しみちゃってごめんねーコニヤv今回もまた、これからどんなにあなたをいじめたとしても、愛してるわv↑

また次回も是非よろしくお願いしますー♪
楽しんでいただけたら……嬉しいなv

8、寝込むコナンと工藤新一

新一はコーヒーを全て飲み干し、立ち上がると同時に、梓にコーヒー二杯分の代金を渡し、少し急ぎ目の歩調で店を出ると、階段を昇った。

「蘭？ オレだけど！」

言いながらチャイムを押すと、彼女はすぐに戸をあけて顔を出した。ピンク色のセーターをラフに着こんだ彼女は、不安そうな顔で道を開ける。

「入って。で、私の部屋にコナン君いるから……先に行っててくれる？ 新一、何飲みたい？」

「あ、ああ。じゃあウーロン茶を」

「分かった。すぐ持ってくるから待っててね」

そう言いながら、キッチンへ行き冷蔵庫を開けた彼女を横目に、新一は蘭の部屋へと向かった。なるべく音をたてないように気遣って、遠慮がちに部屋の戸を開ける。

「……入るぞ」

小さく囁くように言った後で、彼は部屋に足を踏み入れた。

室内は、少し熱く感じた。いつ見ても、女の子らしい清潔な部屋だ。そんなベッドの隣に敷かれた布団の中に、赤い顔のコナンが横たわっていた。苦しそうに開きっぱなしの口をぱくつかせて、ハアハア呼吸音を漏らす度に掛け布団の胸元あたりが浮き沈みしている。堅く閉じた瞳のすぐ上にある額には、少し大きめに感じる白い濡れ

タオルがかぶせられている。

彼はじっとその様を眺め、ふう、と息を一つ。

「だから、言ったじゃねーか」

頭をかき乱しながら呟き、彼はしゃがみこんだ。濡れタオルをそっと手にとって、代わりにあいている手でコナンの額を覆った。

「かなり熱いな」

目を細めながら呟いた彼は、今度は赤い頬にずっと触れた。生温かい汗がこめかみからつたっているのに気付き、持っているタオルで拭う。そのタオルも、コナンの額にあてていた方は随分暖かくほかほかしてしまっているのが、触ってすぐわかった。

「やべーな。これじゃ逆効果だろ。にしても、さっき会った時は熱があるそぶり見せなかったのに」

具合が悪い事を気取られないように気を張っていたのか、そもそも本人が自分の不調に気づいていなかったのか。

そうこう考えているうちに、廊下からぱたぱた軽い足音が聞こえてきて、小さなノックの後、そっとドアが開いた。

「新一。コナン君の様子、どう？」

「熱高いみたいだな。そうだ、蘭。タオル、なんか温まっちゃってるみたいけど」

「やだ、おでこ冷やしてからそんなに経たないのに」

言いながらタオルを受け取った蘭は不安そうにそれを握り締めた。

「ホントだね。……一回ゆすいで、氷水も用意してくる。新一はコナン君見ててくれる？」

「ああ」

再びあわただしく部屋を出て行った蘭を見送り、新一は再びコナンに視線を戻した。重たい仕草で首を左右に振りながら、眉間に作ったしわから汗が伝う。

「こんなに辛そうなのに、無理してたのか？」

こうなって今思えば、あそこまで取り乱したのも、高熱で少し錯乱状態になっていたのかもしれない。それならば、ポアロの彼女が言ってた事ともつじつまが合う。そうだとすれば、無駄に喫茶店に引きとめてしまった事には罪悪感を感じる。

「悪かったな。具合悪いの、見抜いてやれなくて」

呟いて、再度コナンの額に手を乗せ直した。すると、今度は先程まで何の反応もなかったコナンがびくりと震えた。

「え？」

「ぐ——っ！ ふ、うあっ……」

「おい、どうした、大丈夫か？」

「げ、げほっ！ げほっがほっ！」

コナンは、無意識なまま胸を強く握り締めた。激しく咳こみ、苦しげに呼吸を乱している。相当苦しいのか、呼吸の仕草が大げさになり、先程とは違うゼエゼエとした呼吸音を立てている。

「ぐっ……！ げほっ！ げほっ」

「お、おい！」

「どうしたの、大丈夫？」

身体を横向きにして、背中をさすってやっていると、部屋の廊下から蘭が顔を出した。手には氷水の入った桶と、十分冷やしたように見えるタオル。部屋に入る事も忘れて、顔を強張らせて立ち尽くしている。

「蘭、大丈夫だ。喉がちょっと引っかかって苦しくなっちゃってるみてーだけど、ひとまずちゃんと呼吸は出来てるから。それより、吐き気も酷そうなんだ。一応エチケット用の袋を……」

「うん。用意するね」

そう言って、歩み寄ってきた彼女は、目の前に遭った引きだしから袋を取り出した。そして、ようやく呼吸困難が治まったらしいコナンを再び布団に横たえさせて、一度だけ手で触れて熱を確認してから、額に持ってきていたタオルを当てる。

「熱、さっきより上がってるみたい……もう一回測った方がいいかな」

「オレも触ってたけど、九度七〜八分ってとこだろ。ったく、こんな熱があったってのに」

「……コナン君、帰ってきた時から様子がおかしかったんだけどね、何かあったのかなって思ってたらこんなに具合悪かったなんて」

蘭は、不安そうに目を細めながらコナンを見つめた。

8、寝込むコナンと工藤新一（後書き）

こんばんはーV八話目になりました！

今回も見捨てずにありがとうございます！！

今回土日にPCに向かえなくてさほど進まなかったのですが、一応、一話ストックがたまったのでまた予定より早い掲載ですVVV

もうすぐ映画でテンションも上がり、サンデー読んでテンションも上がり。忙しい今日この頃ですV

というわけで、8話。

サブタイはもうなんかやけくそでWWWいやさ、本当は8話もってちゃんとしたタイトルだったんだけどね、前回あの部分入れた事で構成が変わってさ。新しいサブタイトルがまるで思いつかなかった、というWWW

病気のコナン君を楽しみつつ、コナンを看病する彼をお楽しみください。

次回はね、コニヤちゃんと目え覚ますよー！

また是非次回もよろしくお願いしまーすV

9、不機嫌な目覚め

熱い。苦しい。今にも吐きそうな程気持ちが悪い。

頭の中が、ふわふわと、波に揺られて航海でもしているかのような感覚だ。ここ数日は、そう言えばこんな風に重だるい日が続いていた気がする。

まどろみの中でまとまらない考えをぐるぐる廻らせながらも、自分に何が起こったのかすら、理解出来ていなかった。

次第に意識は浮上していき、コナンは自分が今横になっている事実にだけ気づいた。いつの間に寝たのだろうか、今は何時頃だろうか。蘭と会話をしてから、布団に入るまでの記憶がまるでない。

額に何か生ぬるいものに乗っていて、心地の悪さに首を左右に動かした。すると、それがどこかへ外されて、代わりに人の手が額を覆った。大きくて、先程の生ぬるさよりも幾分冷えた手だ。

冷たすぎず、心地いい温度が額に伝わって、コナンはうっすらと目を開けた。

「あ、気がついたのか」

手をあてがわれたままかけられたその声に、ゆっくり視界を移す。目が霞んでいるようであまり見えないが、普段と違う天井と家具の配置は、恐らく蘭の部屋だろう。そして、ピントを隣に座っている人物に移した。

「……え？ オレ？」

呼吸が苦しい上にろれつが回らない声で呟くと、視線の先に居る彼は徐に額に置いていた手を外し、ひんやり冷たくなったタオルを

頭に乗せた。ひやりとして先程よりは意識も多少はつきりするものの、頭の中で目前の人物の情報がしっかりと処理出来ない。

「大丈夫か？　って聞こうと思ったけど、まだ熱も高いし、混乱してんだな」

「……………だれ？」

「思い出して変に興奮させたくないけど——オレは、工藤新一。お前、ポアロでオレと別れた後、熱出して倒れたんだよ。覚えてねーか？」

抑え気味の声で尋ねられて、ようやくポアロでの出来事と、蘭とのやり取りを思い出した。

「お、まえ……っ！　蘭は？　蘭はどこに！」

「ば、バーロ！　まだ熱が高いっつつてんだろ。急に起き上がるな！」

「うるせー！　ら……。うつ、げほっ！　けほっ」

はっとした勢いで起き上がると、酷いめまいに襲われ、視界が回転した。気持ちの悪さに耐えきれず咳き込む。右も左も分からなくなったところで、隣から支えられ、ゆっくりと布団に寝かされた。

「落ちつけ。蘭なら朝食作ってるよ。お前、蘭の事が好きなんだろ？　だったら、あんまあいつに心配かけんな」

「だから、あ、”あいつ”とか、気安く……」

まだおさまらないめまいを、視界を手でふさいでやり過ごしながら、コナンは呟いた。隣で、ため息が聞こえてくる。

「分かった。悪かったよ。オレが、お前に無駄に興奮させた事で、

倒れるまで熱上がっちゃった感じもあるし、浮かれ気分も自重すっから」

「……………浮かれ気分、ね」

「ああ。でも、蘭の事が好きな気持ちはお互い様だ。そこは、許してくれよ?」

大分めまいも治まって、コナンはゆっくりと視界を覆っていた手を布団の中に戻した。横目に見上げた彼の顔は、少し申し訳なさそうに微笑を浮かべている。

一番の問題はその態度。真実なわけがないというのに、まるで嘘やでたらめを言っているように見えない表情と雰囲気、尚の事混乱するのだ。

「ど、どうしても、自分が新一ちゃんだって言い張るんだね」

「言い張るっつーか、なんでそこまでお前がオレを偽者にしたいのかかわからねーよ」

「……………」

困った顔で答えられて、コナンは無言のまま暫し逡巡した。だが、考えた所で、今の朦朧とした頭の中では、思考がまとまらない。それどころか、あまりの体調の悪さに、彼が何者なのかどうでもよくなってきた。自分にもまた、困惑させられた。

生温かい汗が、額から頬を通して首筋に伝う。治まっていた筈のめまいも、再び酷くなってきた。霞んだ視界に映る天井も、ぐるぐると回転して見える。

少し困惑した顔で見下ろしてくる彼の顔も、コナンの目にはゆらゆら歪んでいるように映る。

「兄弟みてーに、なれるんじゃないかねえかと思うんだけどな……」

ぽつり、彼の口から呟かれた小さな声すら、頭の中をかきまわすように響いた。気を張っているのも、そろそろ限界だ。ふと、覗きこんでくる彼の表情がハツとしたものに変わる。

「もしかして、起きてるの辛いかな？」

尋ねられ、コナンは眉を寄せた。正直な話、辛いところではない。だが、彼に弱っている部分を見せるのは非常に本意に思えた。少しだけ無言で考えてから、コナンは口を開く。

「じ、じゃあ……わ、悪いけど、もう少し、寝ても……っ！ げほけほっ」

弱々しく言いかけた科白の途中で、息が詰まり、咳こんだ。一瞬反動で起き上がり身体を丸めたが、すぐに咳は治まり、再びベッドに仰向けで倒れこむ。

「寝るのは勿論構わねえけど、酷い咳だな……大丈夫かよ。さつきより大分辛そうだけど、また熱上がってきたんじゃないかな？」

「すぐ治るよ。そ、それより、オレが寝てる間に、ら、蘭に何か……変な事したり、言ったりしたら……」

「しねーって。判ったから、そこは心配すんな」

「……絶対、だよ？」

釘を刺そうとした言葉をさえぎり、苦笑まじりな言葉が帰って来て、もう一度だけ念を押す。座った彼は困った様子で頭をかき、短く「ああ」と答えた。それを見て、目を閉じたコナンは熱い息を吐きだした。

「あ、待った。寝る前に熱測っとけ。ほら」

「……………うん」

声をかけられて、横を見るなり視界に入った体温計を彼から受け取り、脇に挟む。測り終わるのを待つ時間も、随分だるいものだ。

そうこうしてるうちに、控え気味の足音が廊下から聞こえてきた。コナンは閉じていた瞼を、再び薄っすらと持ち上げた。

9、不機嫌な目覚め（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございますーすV
そして、いつもアクセス・お気に入り登録・感想コメント等、ありがとうございます！ 毎回凄く嬉しく頂戴して、テンションあがってますV

9話は、彼とコナンのやり取りで。

こういうシーンで、彼の人柄とか雰囲気とか考えとかをじわりじわり伝えていけたらいいなーっていう狙いの元で（笑）

文字数的にはちよっぴりいつもより長めです。

楽しいよね、具合悪いコナンを描写するのって……WWWW

次回もまだ楽しませていただきます♪

次も是非よろしく願いしますーVVVV

10、蘭の看病

部屋が軽くノックされて、戸が開くと同時に蘭が顔を見せる。

「あ、蘭姉ちゃん……」

「コナン君。目覚ましたのね！　よかったー」

声をかけると、少し曇っていた蘭の顔がぱっと明るく変わった。声も心なしか弾んでいる。ピンク色の可愛らしいエプロン姿にほっと安堵した笑顔が尚可愛く見えて、鼻血を噴きそうになる。確かに、どうやらまた余程心配をかけてしまったらしい。

「具合はどう？　熱は……まだ、結構ありそうね」

言いながらベッドの前まで来た彼女は、額に乗せられていたタオルをとって、手を当ててきた。先程とは少し違う柔らかく滑らかな手指に、ほっと安心させられる。それと裏腹に、彼女の顔は再び少し曇った。ゆっくり手が離されて、枕元近くに置かれた氷水で冷やし直したタオルを、再び額に戻される。

「やっぱり、まだ高いなあ……体温計どこ？」

「今測つてるところだよ」

「そっか。じゃあ、測ったらちゃんと見せてね？」

「うん」

頷いたコナンに、また蘭は微笑んだ。

「それから、おかゆあるけど、食べない？　少しでも栄養取った方がいいと思うんだけど」

「……ごめん。今ちょっと食べれそうにないんだ」

「そう……お腹空いたらいつでも言ってる？」

「……うん」

少ししゅんとした蘭に、申し訳なさを感じた。

極力心配はかけたくないし、蘭が心をこめて作ってくれたものはいつでも食べたいと思う。だが、食欲がない以前に、吐き気が酷くて、今何かを食べたら全て出してしまいそうなのだ。

「じゃあ、お水はどう？ 喉渴いたでしょ」

「あ、うん。欲しい」

「うん、判った。すぐ持ってくるね！」

そう言って立ち上がりかけた蘭の手を、ずっと一言も喋らなかった新一が、ぐっと掴んだ。

「待った。その位オレが行ってくるから、蘭はこいつについててやれよ」

一瞬きょとんとした表情を浮かべた蘭だったが、ふわりと微笑み、礼を言っただけでその場に座り直した。それを確認してから、新一も部屋を出ていく。

そんな一連の様子を、コナンは布団の上から、じっと見つめていた。

ピピピピッ……

高い小さな電子音が、室内に響いた。

「あ。コナン君体温計終わったんじゃない？」

「うん」

答えて、脇の下に挟んでいた白い体温計を取り出した。ぼんやり眺めてから、コナンはそれを蘭に手渡した。体温計を見るなり、蘭は僅かに顔に緊張感を滲ませた。

「三十九度、かぁ。夜中よりは大分下がってるけど、やっぱり高いね」

「……よ、夜中、そんなにあった？」

「うん。四十度越えてたの。コナン君凄い具合悪そうだったし、救急病院に行こうかとも思った位だから」

「そっ、か。心配、かけてごめんね？」

謝ると、蘭は優しく首を振った。

「私はもう不安で仕方なかったんだけど、新一がね、もうちょっと様子見ようって。凄いの確に看病して色々指示してくれたから、私も落ちつけたの。冷静だったけど、コナン君の事凄い心配してたみたいよ。一睡もしないで、ずっと一緒につきっきりで看病してたの」

「そう……あの新一ちゃんが……」

ぽつりと呟くと、蘭はその言葉の意味を少し誤解したらしい。口元に片手を当ててくすくす笑いながら、言った。

「あの新一が？　って思うでしょ。結構こういう事無関心そうなのね」

「う、うん」

「多分よっぽど、コナン君の事が大事なんだね。もうちょっと休んでからでもいいから、後でちゃんと病院行こうね？」

「……うん」

蘭の言葉に頷き、ゴホッと一つ咳をする。話すうちに、段々意識が薄らいでうとうとしてきた。そんな所に、二人分の水が入ったコップを、両手に持った新一が戻ってきた。

「待たせたな！ オレ、勝手に自分の水飲んで来ちまったけど」
「あ、うん。大丈夫だよ。ありがとう！」

答えた蘭に、まず彼は右手の水を手渡した。

「ホラ、蘭も喉渴いただろ？」
「私の分も汲んで来てくれたんだ。ありがとう」
「いや、当然だろ。それから、コナンに」
「あ、ありがとう」

渡されて、それをゆっくりと口に流し込み、喉を潤した。蘭もまた、ぐいぐいと飲みほしている。冷たいけれど、冷たすぎない心地よい温度の水だった。一口、一口と飲んでいると、彼はぐっと身を乗り出して、汗ばんでいたコナンの髪を撫でた。そして、柔らかく笑う。

「なあ、コナン」
「え？」

「お前はオレの事、よく思っていないのかも知れねーけど、オレはもっとお前と仲良くやっていきなーんだ。だから、早く元気になれよ。そしたら、一緒にサッカーしようぜ？」

「……………うん、いいよ」

少し無言で考え込んでから、コナンはいつもより微かに力のない笑みではあるが、不敵に口角を持ち上げた。ケホケホとせき込み、

再びコップに残っていた水に口をつける。

空になったコップを返してから、コナンはゆっくりと目を閉じ、
やっと眠りについた。

10、蘭の看病（後書き）

今回もありがとうございますーっ！！

ここんところ、震災関連の影響でPCの前にいれる時間がぐっと減りまして^^;

ネタはあれど、書ける余裕はあれど、ストックがたまらないという妙な現象に^^;

でも、一週間に一度、土曜に入るこの時間だけは更新するって決めたので、出しますv大丈夫、まだまだ余裕はある（^^-^^）

来週は映画デスねーv

来週ばかりは、シークレ行ってくるので、投稿時間崩れるかと思っています！ゴメンネv予約してってもいいんだけどさ。

というわけで、今回は蘭ちゃんとコニヤをたっぷりとお楽しみいただけたなら嬉しいなーv

次回もまたよろしくお願いしますー！

11、車内の彼ら

米花町の、とある有名な『眠りの小五郎』という名探偵が住む家の目の前――。

電柱の上で鋭い鳴き声をあげた一羽の黒いカラスが、漆黒の羽を舞わせながら、バサバサと飛び立った。太陽の光に照らされた大きな影が、灰色の地面を、黒に変えた。

黄色いビートルが、道を走っている。休日の昼時はでかける車も多かったが、さほど停滞させられる事もなく、時折少し止まっては進むと言った具合で、目的地に向かっていった。

運転席には、メタボでハゲあがった頭の後ろにもっこり生えた白髪と、白く太い眉、白ひげが特徴の阿笠博士が乗っている。そして、その博士が酷く困惑気味にちらちら視線を送る助手席には新一が。そして、後部座席の右側に座った蘭の短いスカートから出た生膝を枕にして、コナンは仰向けに横たわっていた。タオルケットとひざかけを掛け布団代わりに首までかけて、額には保冷剤を三重に巻きつけたタオルを当てその上を蘭が手で抑えている。

コナンは目を閉じて、口をずっと開いたまま呼吸している。一見寝ているようにも見えるが、蘭が額や頬の汗を拭ってやる時に、拭きやすい角度に首を変えるので、意識はあるのだろう。苦しげに呼吸するコナンをじっと見つめながら、蘭は呟いた。

「コナン君、顔赤いね。……すごく苦しそう」

蘭の手が、そっとコナンの赤らんだ頬を覆う。熱い頬と耳に蘭が目細めると、コナンはうつすら目を開けた。

「……………大丈夫だよ、顔が赤いのは、暖房が熱いせいだから」

「そんな事ないわよ。私だって暖房あたってるけど、赤くないですよ？」

「……………どうかな。少し赤く見えるけど」

そう答えて、コナンは力なく笑った。それから、頬から離れようとした蘭の左手を、彼は逃がさないように抑えた。

「やめないで。蘭ねえちゃんの手と体温、気持ちいいから」

はつきりしない発音ながらもそう呟いたコナンは、顔を蘭の手に押し付けるようにぐっと寄せた。頬の弾力が伝わって、蘭は一瞬、緊張する。

「……………もー。いつも大人をからかってばかり」

「だって、本当に気持ちいいんだよ。蘭姉ちゃんの手も、太ももも」

「もう。コナン君！ 今だけだからね？」

すっかり調子を狂わされながら頬に手をあてたままの蘭を、コナンはとろんとした目で再度見上げた。

「……………やだ」

「え？」

目を丸くした蘭の長い黒髪を、ゆっくり持ち上げられたコナンの左手がそっと掴む。

「誰にも、渡さない。オレがずっと、蘭の隣にいるから」

「……こ、コナン君。自分が何言ってるかよくわかってないでしょ。熱のせいで」

「……………そうかも、ね。だから今は、何言っても許してね？」

そう呟いたコナンは再び目を閉じた。いつもと違うコナンに、蘭は困惑しながらも、左手を頬にあてたまま、右手でコナンの頭をそっと撫でた。

「まったく、いちゃいちゃやがって……」

ぼそっと助手席で呟いたのは、半眼で頬を赤らめている彼だ。その様子を、信号待ちで止まった博士がちらりと見やる。

「あ、そのー。し、し、新一、君？」

「ん、どうしたんだ、博士」

声をかけられて、くると運転席に顔を向けた新一に、博士は眉をひそめた。

病院に連れていきたいが、コナンの体調を考えて、車で送って欲しいと蘭から連絡をもらい、探偵事務所前まで来た。そこで、鍵を閉める蘭の代わりに、ぐったりとしたコナンを抱きかかえて車に入ってきた新一を見て、博士は驚愕のあまり固まった。

「どういう事じゃ、新一！」などと訪ねても、答えたのはコナンじゃなく彼の方で。

「博士にも心配かけたذار。連絡遅れてごめんな」と言葉が返ってきた。

そのまま、とりあえず蘭や彼やコナンに合わせて、何も説明を受けないまま今に至るのだ。

「じゃから、ほれ。いつ戻ったんじゃ？」

「一昨日だよ。博士は今日まで三日間でかけてたんだよな。だから連絡し損ねちまって」

「い、いやあ、構わんよ。君も色々大変だったんじやろうし。――どこに、行っておったんじゃ？」

すると、新一は僅かに目を細めた。

「――詳しくは言えねーけど、色々とな。事件続きで、元いた場所がこんな平和だって事忘れてたよ」

「ああ、平和じゃな。出来ればずっと続くといいんじゃが……」

いいながら、ハンドルを大きく右に回した博士は、そのすぐ目の前にある駐車場へ車を止めた。

「ほれ、着いたぞ。蘭君、コナン君の具合はどうじゃ？」

「うん、なんかちょっと前に眠っちゃったみたい。起きてると熱上がるみたいだから、診察までこのまま連れてこうかなって」

寝ているコナンに考慮して、小さめの声で蘭は答えた。

博士が車の戸をあけて降り、新一も続いて降りた。蘭はそつとコナンにかけていたタオルケットとひざかけをはがし、コナンを抱いて車を降りた。

11、車内の彼ら（後書き）

今回もありがとうございますーV

毎度暖かいお言葉頂いて、ヤル気をいただいておりますV

さて、今回ようやく黒の片鱗を出せませたね。これから数話分、じわーりじわーり黒が姿を見せて来ますヨV

というわけで、今回は嵐の前の静けさ的にいちゃいちゃコ蘭Wなんかもう、江戸川が変態ですW W W ええ、判ってます。判ってるけど、気持ちいいってどうしても言わせたかったんですW W W でも、こういうコ蘭、描いてて楽しいですよーV

というわけで、次話もまたどうぞよろしく願います!!

左手ちよつと痛めてる今日この頃だけど、そろそろまたストック増やさないとね。まだまだ貯蓄に余裕があるとは言え、減り傾向は精神的にまずい^^;

頑張るよー（^▽^）／V V V

12、病院と黒の影

「江戸川コナンくん」

診察室から、よく通る若い女看護師の声が届いた。待合室の一番前列の椅子に腰かけ、ぐったり凭れていたコナンを膝の上に抱いていた蘭は、呼ばれてそっとコナンを抱き上げた。同時に、コナンの目が薄く開く。不安定な視界に映された蘭は、柔らかに微笑した。

「気がついた？　もう呼ばれたから、すぐお医者さんに診てもらえるからね」

「うん……」

小さく頷いたコナンは、もう一度蘭に体重を預けた。その素直すぎる様子に多少不安を覚えた蘭だが、そのままコナンを診察室へ連れてゆく。

「どうぞ、お入り下さい」

「失礼します」

招かれて診察室のカーテンを開け、中に入る。若い今風の看護師が一人と、椅子に腰かけた三十代程の、目に黒ぶちの眼鏡をかけた、比較的がっしり体系の医者がそこに居た。

「じゃあ、そこに腰かけて下さい」

「あ、はい。……コナン君、大丈夫？」

そう言いながら、蘭は頷いたコナンをその用意されていた椅子に腰かけさせた。すると、医者は一瞬驚いたような顔を見せ、すぐに

ポーカーフェイスを見せる。手元のカルテにペンを滑らせながら、彼は話しかけてきた。

「熱は、何度ありました？」

「今渡してもらった体温計では、八度三分でしたけど。昨日は夕方帰って来てすぐ倒れて、深夜も四十度以上の熱が続いていて。朝になって九度台に落ちついたけど、ぐったりしてるし全然食欲もないみたいなんです。意識もずっと朦朧としてるみたいで」

「ええ、なるほどね……コナン君。痛いところはあるの？ 頭とか、お腹とか」

尋ねられて、蘭はコナンを覗きこんだ。コナンは数秒逡巡した様子を見せて、首を振る。

「吐き気とかは？」

「あ、それは結構酷いみたいです。今も気持ち悪いんじゃないの？ コナン君」

「……す、こし」

今度は、コナンが答える前に遮った蘭の言葉によって、コナンはしぶしぶ頷いた。

一通り読めない字をそこに書きなぐった医師は、くると椅子の向きを変え、蘭とコナンに向き合った。そして、聴診器を耳に当てながら、コナンにゆっくり手を伸ばす。

「じゃあコナン君。胸の音聞くから、洋服あげてくれるかな？」
「うん……」

ぼんやりと答えたコナンは、緩慢な仕草で着ていた服を持ち上げる。苦しそうに上下する胸に、医師は聴診器を数度あてた。

「……うん、じゃあ背中もね」

「はい」

蘭が、コナンが座っていた椅子をくるりと回す。医師は先程と同じように数回聴診器をぽんぽんとコナンの背中に置いた。

「じゃあ今度は喉診るから、口『あー』ってして」

医師は、自分の口をカバのように大きく開けながら、そう言った。コナンが口を開けると、その中にライトを開けて数秒調べた。

「うん、もういいよ。……じゃあ、注射一本打とうか。それから、薬も三日分処方するから、三食、食後三十分以内に忘れずに飲んで下さいよ。少し症状が重いから、薬が切れる頃にまた来て下さい。様子見ますから」

「え、ええ。あの、症状が重いって、何か悪い病気なんですか？」

不安になって尋ねると、医師は一瞬黙り込み、答えた。

「……いや、風邪ですよ。じゃあ、注射打つから、そっちの部屋に座って待っててくれる？」

「あ、はい……コナン君、お注射だって」

蘭はそう言って、コナンを抱き上げた。そして、カーテンを一つ挟んだ部屋に入って椅子に腰かけると、すぐに看護師も顔を見せる。コナンはのろのろと袖をまくり上げ、自分の腕を前に差し出した。看護師は、少し驚いた様子で目を見開く。

「コナン君偉いのねー。コナン君位の子だと、泣き叫んだりする子

もいるのに。自分から進んで腕出してくれるなんて」

「う、うん」

頷くコナンに、看護師はにっこりと明るい顔で微笑んで見せた。

「いい子のコナン君は、痛いのもすぐ終わるからね！」

言いながら、彼女はコナンの腕に管をきつめに巻きつけ、そして準備を整えた注射器を右手に構えた。

「じゃあ、コナン君。ちょっとだけちくつとするよー」

彼女はコナンの腕に注射器をした。若いイメージの割にやり慣れているようで、手際の良さを感じさせられた。

「はい、おしまいね。じゃあ後はお会計と、お薬もらって下さいね！」

「はい、ありがとうございます！」

ほっとした様子で頭を下げ、蘭はコナンを再び抱き上げて、診察室を出た。

カルテを書きあげた医師は、無言で左手を眼鏡まで持って行き、中指でくっつと押し上げた。そして、今自分が書き終えたカルテをまじまじと見つめた。

「偶然というのも、恐ろしいものだな」

低い声でポツリと呟いた医師は、不気味に口角を持ち上げる。

「工藤……新一……」

そして、次の患者が入ってくると、彼はにこりと、人の良さそうな笑顔を作った。

「……フン、そうか。ああ。ならお前はそのまま、様子を見て動け」

ピ、という音と共に通話を止め、携帯電話をその黒いポケットに入れた長身の男は、フツと歯を見せるようにせせら笑いを浮かべ、内ポケットから煙草とライターを取り出した。一本出した煙草をくわえ、そこにライターで火を灯す。白煙が、彼の長い銀髪と共に、風に舞った。

12、病院と黒の影（後書き）

今回もありがとうございますーっV V V

医者とのやり取りは、私があんまり病院に行く人じゃないので、子供の頃の風邪でかかった記憶をベースにして、それを更に話の伏線も絡めて歪曲しました。さあこの話が後々どう生きてくるかは、今はまだご想像にお任せしましょうか（^^）

次回、あの二人が出てくるヨ☆

次回もまたどうぞヨロシクお願いしますー！！

13、うごめく漆黒

耳から外した携帯電話の電源ボタンを、彼は静かに押した。数秒、手元にある携帯電話を見つめてから、それを履いていたジープンのポケットにしまう。そして、黄色いビートルに寄りかかった彼は、自然な仕草で腕を組む。組んだ腕にはめた時計を一瞥してから、彼はちらりと、病院の方へ視線を向けた。

「そろそろ、だよな」

ぼそ、と呟いてすぐに、コナンを負ぶった蘭と、その隣につきそう白髪の太った博士が、病院から姿を見せた。

「お、来た来た」

新一はふつと微笑して、手を高く挙げて、彼女達に向かって二度三度振った。気づいた蘭は少し歩を早め、それに続くように博士もドスドスと歩幅を広げた。

新一は、目今まで来た蘭に、車の戸を開けてやる。蘭は短く礼を言っ、コナンをまず右奥に座らせてから、車に乗り込んだ。続いて、博士はぐりと回りこんで運転席に、新一は助手席に座った。

「新一も、こんなとこで待ってないで病院の中くればよかったのに」

唐突に呟かれた蘭の言葉に、新一は後部座席に顔を向けた。

「いや、大勢でぞろぞろ行く事ねーだろ。あんまり、待合室の独特な空気が好きじゃねえしな」

「でも、ずっとあんな外に居て、寒くなかったの？ 今度は新一が

倒れたりとか言うのやめてよ？」

「バーロ、こんな短時間外に居た位でぶっ倒れる程、やわじゃねえよ」

少し呆れ眼で、ぶっきらぼうな返事を返した新一は、蘭の隣で座席にもたれているコナンに視線を送った。意識はあるようだが、相変わらず赤い顔で、口をぱくぱく動かしながら呼吸している。重そうな瞼を半分持ちあげてとろんとした目も、焦点があっていないようだ。

コナンの様子を一通り観察してから、彼は蘭に視線を戻す。

「どうだった？ そいつの具合」

「風邪だって。お薬ももらったし、これで少しは楽になってくれるといいんだけど……」

そう答えながら、蘭はコナンの額に手をやった。汗でぐっしより濡れている前髪が、蘭の手に絡む。額や頬にも汗がにじんでいて、蘭はポケットから取り出したハンカチでそれを拭った。

「汗、凄いね。熱も、少しは下がったみたいだけどまだかなり熱いみたいだし……」

「……大丈夫だよ、蘭姉ちゃん。来る前より大分楽だか、ら……げほっ」

言っている傍から、声が掠れて咳が漏れる。そんなコナンの背中を、慌ててさする蘭の姿を、新一はじっと見つめた。

エンジンをかけたまま、心配そうに後ろの様子を眺めていた博士は、視線を前に戻して言った。

「じゃあ、探偵事務所までじゃな？ し、新一……君はどうするん

じゃ？」

「あ、オレもそこでいいよ。おっちゃんは夜遅くまで事務所に居るだろうし、看病手伝いたいしな」

「そ、そうか……じゃあ……」

返事を僅かに濁しながら、博士はちらりとコナンに視線を送った。コナンは僅かに顔をあげ、博士と目が合うなり、小さく頷いた。

そんなやり取りを、新一は怪訝な顔で眺めていた。

黄色い車が、ゆっくりと病院の駐車場から出て、来た道を走って行った。

黒いコートと帽子が、彼の右隣に停められた迫力ある黒のポルシェの艶を際立たせている。かなり古くから乗っている車だというのに、几帳面に手入れされたボディには傷一つない。さらさらの長い銀髪が、ふわふわそよぐ風に微かに揺れた。

口にくわえた煙草はそのままに、彼はそこにある愛車のドアに手をかけた。

「あ、アニキ」

助手席側に立った、同じように黒づくめの顎がしゃくれたグラサン男から戸惑いがちに声をかけられて、彼はぴたりと手を止める。そして、彼は低い声で答えた。

「なんだ、ウォッカ」

「今、誰と電話してたんですかい？」

「少し、探りを入れさせている。そいつからの連絡だ」

答えながら車の運転席に乗り込んだジンを見て、ウォッカも車の戸をあけ、助手席に乗り込んだ。そして、シートベルトを締めながら、再度尋ねる。

「探りって、シェリーの事ですかい？」

すると、左隣で既にシートベルトを着け終えたジンは、煙草をくわえている口元を僅かに右上がりにつりあげた。

「それもなくはないが、今回は、シェリーはあくまでおまけだ……」

言いながら、彼はハンドルに左手をかけ、ギアに乗せた右手を手慣れた様子で動かしながら、アクセルを踏んだ。黒いポルシェは圧倒的な存在感を持って、道路を走りだした。窓から見える建物や並木や歩く人々が、流れるように視界を動く。

「じゃあ、一体何を――？」

再度ウォッカが尋ねると、ジンはゆっくりと帽子の下から鋭い目で前を見据えた。

「メインのお目当ては、亡霊だ」

「ぼ、亡霊？」

「ああ。バラした奴の顔と名前は忘れるようにしているが、そいつが生きていたとなれば話は別だ。地獄の果てまでも追いつめて、その額に風穴を開けてやらねえといけねえからな……」

威圧的な低い声で、淡々と告げられた科白に、ウォッカもまた、

あやしい笑みを浮かべた。

「当然ですぜ、さすがアニキ。それで、その亡霊っていうのは誰なんでしょうか？」

先程よりもテンションが上がったウォツカは、助手席から僅かに身を乗り出した。交差点を左に曲がりながら、ジンは煙草を噛み潰しながら葉をむき出しにして、せせら笑う。

「平成のシャーロック・ホームズ。あの日例の薬であの世へ送った筈の、工藤新一だ」

静かに冷たく響いた言葉に、助手席のウォツカは息を呑んだ。

13、うごめく漆黒（後書き）

ストックにまだ結構余裕があるにも関わらず、更新ちよい止まりしてて申し訳ございませんでしたー！

今回も読んで下さってありがとうございますv

黒がそろそろじわーりじわーり影を見せて来ました♪

話は変わりますが、皆さんもう沈黙観ましたかー？

あれはもう、絶対観るべきですよvvv萌えも興奮も半端ねえwww
かく言う私は、更新ちよい止まりしてた間、というか今週末ー週始め、とってもコナ充な生活を送ってましたwww

水曜・木曜からは、オフ会で会う皆さんにーとイラストミニスケブ一冊分（結局時間なくてラフ画になってしまいましたw）を作成してー、

シークレからオール明けの初日舞台挨拶、カラオケでコナン仲間とマジックファイル観賞、更にその翌朝の初回映画鑑賞後にまたまた一緒に見た仲間と語りあって、またもオール突入で四回目の沈黙観賞＋語り回www

明日の木曜には、友達と五回目観に行ってきたーすw

と、そんなこんなで全く余裕がなくなつて、返信も更新も出来ずにいましたすみませーん！

記憶が新しいうちのシークレレポ、オフレポ準備なんかも忙しくてまだまだちよつと余裕ないんですけどね☆結構休んじやったから、またご心配かける前に一話投稿しこうと思つて。

でも、今週はちゃんと金曜夜…もとい、土曜に日付が変わる時に次話投稿する予定です。

あ、そんなこんなで、私はもう五回目観る寸前なのですが、当然ま

だ観てない方も居るので、ネタばれ含む沈黙の話は感想欄では書かないようにお願いしますねー！

お返事も、まだ返してない部分あるのですが、時間的に余裕がないので、週末までお待ちください＞＜

ゴメンネー！ でも、ありがたく拝見してますv&いつでもお待ちしております！

14、標的

上ずった声が、車内に響く。

「く、工藤新一！ 奴が生きているっていうんですかい？」

「ああ。そしてそうだとすれば、一つの仮説も生まれる」

「か、仮説？」

聞き返したウォツカに、ジンはまた低い声で答える。

「そうだ。忘れたかウォツカ。以前シェリーと遭遇した時に、警察に指示を出してハンカチを調べさせ、シェリーをまんまと逃がした男。そして、以前貴様が賢橋駅のコインロッカーではめられかけた、我々の事を探っているらしいキツネの存在を」

「ま、まさか、そいつは皆あの工藤新一が！？」

「ああ、その可能性が高いな。知ってるか？ ウォツカ。奴のデータを死亡確認に書き変えたのは、あの女――シェリーなんだぜ？」

驚きのあまり言葉をなくすウォツカに、ジンは更に続けた。

「アイツはまだ組織に居た頃、工藤新一の存在に随分執心していたようだからな。まあ、無理もない……奴の薬を投与した人間で、唯一死亡が確認されていなかった存在だからな」

「そう言えば宮野明美が死ぬ前に、幾度か奴は工藤新一の家に調査に行ってた」

「そうさ。恐らくそこでシェリーは工藤新一の行方に検討がついた。そして奴は組織のデータを改ざんし、更に自分が組織を裏切った後、奴の元に転がり込んで匿われた、という所だ」

ジンは短くなってきた煙草を、車内の灰皿に押し当てた。そして、にい、と口元を歪める。右隣でジンを見ていたウォッカも、興奮を抑えきれずに口元を歪めた。

「じゃあアニキ、後は工藤新一の家さえ調べて、シェリーが奴の行方に見つけた何かを見つければ、奴もシェリーも我々の手に、」
「いや、それはダメだ」

きっぱりとした口調が、ウォッカの言葉を遮った。

ウォッカは意外そうに口をぽかんとあけて、ジンの表情を覗いた。だが、目深にかぶられた黒い帽子と、銀色の長い前髪が目元に影を作り、判ったのは”へ”の字に結ばれた口の形だけだ。

「ど、どうしてですかい、アニキ」

困惑しながら尋ねると、ようやくジンは堅く結んでいた口を開けた。

「工藤新一の家には、今、得体のしれねえ野郎が住んでいる」

「え、得体のしれない野郎……ですかい？」

「ああ、名前は沖矢昴などと名乗っているらしいが、奴はただものじゃねえ。無暗に探りをいれるのは自殺行為だぜ？」

緊迫感を感じさせる声色で、ジンははっきりとそう断言した。ウォッカは暫し考え込み、そして再度発言しようと口を開く。

「……そいつが、工藤新一なんじゃないんですかい？」

「いや、それはねえな。奴が工藤邸に住みつくまで何カ月も、あそこは誰も住んで居なかった。工藤新一が自分の家に帰らなかったのは、当然我々の目から逃れる為だ。今になって、姿形を変えて自分

の家に戻る程愚かな野郎じゃねえだろうさ」

「確かに……けど、じゃあ一体誰なんですかい、その沖矢昴って野郎は」

目前の信号が、黄色から赤に変わり、ゆっくりと車が停止する。同時に、ジンは不敵な笑みを浮かべた。

「フン、さあな……だが、誰であるにせよ、組織にとって邪魔な奴はいずれ排除する。今は、ひとまず目の前の工藤新一とシェリーを優先させるがな」

助手席で、ウォッカもまたつられるように口角を釣り上げた。信号が再び青く光ると、黒いポルシェは妖しく走りだした。反対車線を走る黄色いビートルとすれ違い、米花町の道を静かに進んだ。

家を出た時よりも穏やかな寝息が、静かな車内に響いていた。それでもまだ普段よりも苦しげなのは、まあ熱が下がるまでは仕方のない事だろう。行きと同じように、枕代わりに提供している生膝ごしに、普段とはやはり違う体温が伝わってくる。

蘭は、仰向けに横たわっているコナンの髪をそつと撫でながら、じつとコナンの様子を眺めていた。顔色や息遣いに気を遣い、時折赤い顔に滲む汗をハンカチで拭き取りながら。

そうこうしているうちに、ビートルは探偵事務所の前に停車した。

「着いたぞ」

「ありがとう、博士」

博士の言葉に、蘭は礼を言ってから、降ろしていたバッグを肩にかけた。助手席に座っていた新一は、車を降りて蘭に手を伸ばす。

「バッグかコナンはオレが運ぶから」

「ありがとう、じゃあバッグお願い」

「ん」

新一にバッグを手渡し、蘭はコナンをそっと抱き上げた。そして、車を降りてもう一度博士に礼を言い、事務所の階段を昇ってゆく。途中、二階の事務所の戸を新一に開けてもらい、蘭は小五郎に帰った事を伝えた。面倒くさそうに、事務所の机で頬杖をついていた小五郎は、立ち上がり蘭の元へ歩み寄って来た。

「おう。どうだったんだ、ボウズの具合は」

「風邪だって。病院で注射してもらって、少し熱も下がったみたい」
「よかったじゃねーか。じゃあ上あがってさっさと寝かせてやれよ。オレの夕飯も気にしねーでいいから」

「うん、ありがとうお父さん」

ヤル気のない口調だったが、そこに小五郎なりの気遣いを感じて、蘭は素直に礼を言う。すると小五郎は僅かに居心地が悪そうに、目を逸らしながら、さっさと行け、と呟いた。

蘭は事務所を後にして、三階の自室へ行き、敷かれたままの布団にコナンを横たわらせた。その様子を、後ろからついてきていた彼も、部屋の前に立ってじっと見つめていた。

14、標的（後書き）

さあて、そろそろそろそろ、本当に執筆再開しないとねえw
ここ最近のコナ充生活で、すっかり執筆する余裕が消え去っており
ましたぜwww

というわけで、今回もお読みいただきまして、ありがとうございます
ーすv

感想とか、お気に入り登録とか、いつもいつも本当にありがとうございます
ざいます！ それに凄く支えられていますーv

今回はアニキのターン、でしたネv

次回はお待たせしました！！ やっとやっとの、彼登場☆です♪
え？ 誰の事かって？

ほら、あの人ですよ！ あ・の・ひ・と！！

私の小説にはほぼ欠かせない存在の、あ・の・ひ・と（＾―＾）ー☆
楽しみにしてて下さった方も、そうでない方も、彼の登場によって、
更に楽しくなるとイイナv

にしても、今回の話で2100文字と少し。2000文字そこそこ
って言うと、私的には短っ…って感じなのですが、一話を3000
文字→4000文字位を目安に書いてた時より、かなり精神的に楽
だったりします。

ので、やっぱりこのスタイルでやって行こうと思いまーすv

では、次回も是非ヨロシクお願いしますv v

15、「ふざけんなや!」

夜には、コナンの熱も七度台にまで下がり、朝も昼もともに食べられなかった蘭の粥を口にしたら。とは言っても、食欲が戻ったわけではなく子供用の茶わん半分だけだが、昼までと比べれば大進歩だろう。

渡された薬と水を素直に飲み干すと、コナンは再び布団に入った。蘭は冷やしたタオルを準備しながら、仰向けに横たわったコナンの額にそっと触れる。

「やっぱり、まだあるね」

「だ、大丈夫だよ。もうそんなにだるくないし」

「でも、まだ熱があるんだから、ちゃんと休まなきゃダメよ?」

「はい……」

はつきりしない返事をして、コナンは目をつむった。直後、額に乘せられたタオルから気持ちよさが伝わる。眠りに落ちるのに、時間はかからなかった。

小さなノックの後、そっと戸が開く。蘭は、そこに立っていた彼の顔を見るなり表情を緩めた。

「寝たか?」

「うん、ありがとね、新一」

礼を言う蘭に、彼もまた、ゆっくりと口を緩めた。そして、眠るコナンにじっと視線を送りながら、音を立てないように蘭の部屋へ足を踏み入れた。

「礼を言われる謂われもねえけどな。オレが心配だったから看病し

てたし、ついでに泊めてもらってるわけだし……でも大分熱下がってよかったよ」

「うん」

囁くように静かな声で、ゆっくりと告げた新一を見上げた蘭は、同じように声を抑えながら言った。

「新一は、家には帰らないの？」

すると、彼はきよとした顔で、目を丸くして蘭を見た。

「……邪魔か？ それならすぐ出てくけど」

「あ、そんな事はないんだけど。でも、帰って来て一度も家に寄ってないみたいだったから」

新一の言葉に、慌てて説明した。僅かに声のボリュームが上がってしまったのだろう。布団の中のコナンは身じろぎ、ドアの近くに立つ新一は、口の前に人差し指を立てた。

蘭ははっとして口を閉じ、恐る恐るコナンの様子を確かめる。どうやら、起こしてしまったわけではないようで、目を閉じたまま、変わらず少し乱れた寝息を立てるコナンの様子に、胸をなでおろした。

新一も蘭と同じようにコナンを覗きこんでから、小さく息を吐き、申し訳なさそうに片手を挙げた。

「……悪い、オレが慌てさせちゃったから」

「あ、ううん。私が勝手に質問して、勝手に慌てただけだから」

「そいつにも同じ事聞かれたけどな。ほら、オレンち今居候してる奴がいるだろ？ 面識ない奴と同居すんのも、お互い気い遣うだろ。それにずっと離れてた分、オレは少しでも蘭と一緒にいてーんだ」

「新一……」

「けど、当然ずっと居るわけにはいかねーし、看病が終わったら、ひとまずホテルに行くよ。おっちゃんもオレがいるとあんまり機嫌よくねーし、そいつも、蘭との間に急にオレが割り込んで、いい気分してねーみてえだからな」

柔らかい口調で告げられた言葉に、蘭は少しだけ寂しさを感じながらも、小さく頷いた。暫く続く沈黙の中で、コナンの吐息だけが部屋の中に響いていた。

一方、大阪府寝屋川市の、とある邸宅。厳密には、服部平次の自宅と呼ぶべきか。

「なんやて？ もいっぺん言うてみ！」

自室の机に頬杖をつきながら携帯電話を耳に当てていた平次は、そこから届いた事実には、声を張り上げながら、だれていた身体を起こした。

『じゃかあしいなあ。耳元でとんでもない声出さんといて！』

「ええから、さっさと続き聞かせてみい！」

文句を言う電話相手の事などおかまいなしに、平次は続きを促した。少しむっとしたのか、数秒沈黙した彼女は、耳の悪い老人に話

すような口調で答えた。

『せやから、蘭ちゃんから昨日夕方頃に連絡もろてたんや！ 工藤君が今度こそホンマに帰って来たんやて』

「何やそれ。オレなんも聞いてへんぞ！」

『知らんわ。アタシも、アンタに言うたら絶対すぐ東京押しかけて蘭ちゃんと工藤君の折角の時間邪魔するやろて、わざと今教えたんや。明日学校やし、こんな時間やったら変な氣い起こさへんやろ？ 来週にでも会いに行けたらええかなって思うんやけど……平次？ 聞いてんのん？』

「オレは聞いてへんて言うてるやろ！」

そう乱暴に答えて、平次は一方的に電話を切った。そして、眉間にしわを寄せながらアドレス帳を開き、そこから『工藤』と書かれた名前を――

P R R R R R R R …… P R R R R R R R ……

再び、けたたましく鳴った携帯電話の画面に表示される『和葉』の文字に、彼は顔をしかめ、数秒考えてから、電源ボタンを押した。恐らく、次に学校で顔を合わせる時には、相当不機嫌な彼女に会う事になるだろう。だが、今の平次の心中はそれどころではない。

「オレはなんも聞いてへんぞ？ せやったら、何や？ アイツオレに何の報告もせんと、勝手に組織とやりおうて、勝手に完全な解毒剤飲んで、ホンマの姿に戻ったっちゅう事か？」

順序立ててそれを考えるが、次第に腹立たしさが強まって、口調も声もボリリュームが上がる。携帯を持つ手に余計な力が加わって、血管が浮き立ちながらわなわなと震えた。

「……つぶざけんや！ 何やそれ。直接会って確かめんと、信じ

られへんわ!」

ガタ、と勢いよく立ちあがり、平次は東京までの交通手段を調べた。ギリギリ最終で行けなくはなかったが、流石に今から言って、深夜に押し掛けるのは気が引けた。こうなると両親に怒られる羽目になるだろうが、翌朝一番に、学校を休んで東京へ行こうと心に決めた。

例え午前中に着いて新一と蘭が居なくても、探偵事務所で待たせてもらえばいいだろう、と考えながら。

そして翌日朝早く家を出た彼は、行った先で想定外の光景を目にする事になるのだ。

15、「ふざけんなや!」(後書き)

何に一番苦勞してるかって、本文以上にサブタイだったりしますこ
んばんはー☆

今回もお読みいただきありがとうございますー♪

暖かい言葉毎回もらえて、ヤル気出てますVVV

15話は、やっと彼の登場です♪

うん、もうわかってましたよねWWW

こんなに書いてて愛しいキャラは居ません。なんでこんな服部っ
て工藤命なのさWWW

関西弁が難しいとか、そんな事すらもなんのその! 大好きです平
次ーっ☆

というわけで、やっとやっとの平次のターン☆

お待たせしましたー♪

また次回もどうぞよろしくお願いします!!

16、西の名探偵

翌朝、月曜日。休み明けのこの日は、これから一週間学校に来なければいけないという学生達のテンションの低さが目立つ。朝の通学路は少し眠そうな学生達が目立ち、道を歩く皆、どこことなく気だるげな表情を浮かべている。

和葉も、またその一人だった。さほど学校嫌いというわけではないが、この日は前日の平次とのやり取りのせいで、不機嫌真っ只中だった。ふつふつと沸き上がる怒りに、自然と歩調は速く、強くなる。

「ホンマ、アタシの事なんやと思てんの、あのアホ！」

口からは、自然とぶつぶつ文句が漏れる。学校であつたら、今日は丸一日無視してやろうと決めていた。だが、携帯に静華から入った連絡に、和葉はついにブチキレて、声を張り上げた。

「何考えてんのん、あのドアホーーーーー！」

通学路中に響くドスの利いた叫びは、そこらに居た全員の足を止め、一斉に周りの視線を集めた。

駅から出た平次は、背中に悪寒を感じて立ち止まった。探偵とし

ての第六感というより、幼いころから積み重ねてきた想い出が培ったものかもしれないが、和葉の怒りは特に離れていても関係なく伝わるものだ。

大阪に戻ってから、和葉に口うるさく責められるのを想定して、若干気分がげんなりする。だが、正直今はそんな他愛ない事に杞憂している時ではない。

何よりも、まずコナンの事だ。自分の目で現実を確かめなければならぬ。電話で声を聞くんじゃなく、直接会って、コナンの口から事の真相を聞かなければ。そもそも、その電話すらも、昨晚から通じないのだ。

「ホンマ、何してんねやろ、工藤のやつ」

ポツリと呟きながら、もう大分慣れた東京の道を歩く。羽織っていた茶色いコートのポケットに手をつっこみ、首に巻いたマフラーを風になびかせた。

確かに、コナンは元々薄情者で水くさい部分はあった。誰にも頼らずに、自分一人でなんとかしようとする所もよく知っている。だがそうだとしても、彼と自分の間柄では、最悪事後報告位はしてくる義務があるのではなからうか。それを、和葉から聞かされて初めて知るなんて。

「オレは、無関係とちゃうねんぞ」

平次はむっつりと呟いた。もしも、本当に彼が工藤新一の姿で現れて、何事もなく接して来たら、一発殴ってやらなければ気が済まない。それ位の気持ちで、平次は探偵事務所までの道を歩いていた。

毛利探偵事務所の建物まで来て、ひとまず平次は事務所の戸をノックした。平日の午前中だ。蘭やコナンが居る可能性は、最初から

頭はない。

「おーい、おっさん。おらんのか？」

少し強めに声をかけてから、ドアノブに手をかけた。回しても、鍵がかかっているようだ。

「なんや、おらへんのかいな」

不満げに呟き、念の為に、平次は三階まで上がった。もしかしたら、小五郎はまだ事務所に出ず、家に居るのかも知れない、という可能性にかけて。

平次は片手をポケットに突っこんだまま、ドアの脇についたチャイムを押した。程なくして、想定外にも、女の声が応答してきた。パタパタと駆け寄ってくる足音と、扉の鍵を開ける音。そして、ドアが開くと同時に顔を見せたのは、やはり予想外の人物だった。

「あ、れ？ 服部君！」

「姉ちゃん……なんでおんねん？」

「なんでって、それはこっちの科白よ！」

目があうなり、蘭は驚いた顔を見せた。思わずきょとんと尋ねると、苦笑い混じりのツツコミが返ってくる。

「オレは、工藤に会いに朝一で——」

「し、新一？ 新一なら、今私の部屋に居るけど」

そう言いながら、蘭は自室を指さした。平次は眉を鋭く寄せる。

「ほんなら、ホンマの話なんやな。和葉が言うてた、工藤が帰って

来た言うんは」

「う、うん……新一から何も聞いてなかった？」

蘭の言葉に、平次は無言を返した。そしてそのまま玄関に一步入り、靴を脱ぐ。

「あがるで」

短く、低い声で一言宣言してから、平次は蘭の右横を通って一直線に部屋へ向かった。そして、ノックせずに、彼は蘭の部屋の戸を勢いよく開けた。そして、そこに座りながら、ぎよっと目を丸くして見上げてくる新一を睨み下ろした。そして、いつもよりドスの利いた低い声で、ゆっくり話しかけた。

「久しぶりやなあ、工藤。暫く見んうちに随分変わりよって。お前オレになんの連絡もせんと、どういうつもりや」

どう言い訳するのか、その態度で、降ろした腕の下にぐっと握った拳の行く末も決める筈だった。だが、そこに座ったままの彼は、怪訝な表情を一層深めて、視線に困惑の色も滲ませながら平次を見上げていた。

出てくる言葉を待っていた平次は、次にゆっくり開いた彼の口から出た言葉に、愕然とさせられた。

「あの……誰？」

「……………は？」

十数秒沈黙してから、なんとかそれだけ返した平次に、彼はもう一度言った。

「おめー、誰だ？」

平次は続く言葉を失い、室内は沈黙の空気が流れた。

16、西の名探偵（後書き）

今回も読んで下さってありがとうございますー♪

平次は本当に書いてて楽しいですvvv

和葉は申し訳ないけど殆ど出番らしい出番無くなっちゃうから、今回ちょっとだけ単独シーンを用意してあげちゃいましたw

というわけで、東京入りした平次に突き刺さる新一さんの言葉www
遊び心と伏線を織り交ぜたこの新一の態度なのですが、はてさて♪
次回は、しっかり平次とコニヤンの提供でお送りします☆
次話もどうかヨロシクお願いしますー！！

……早く、見たい？ 今貯まってるストックからあと二話分増やせたらまた更新早めるかもしれません♪増えなかったら、また定期の、今回同様金曜から土曜への日付線こえたところって感じでしょかね。
頑張ります☆

17、平次とコナン

「な、何言うてん。オレはお前のライバルで、大親友の、服部平次やろ？」

「……はっ、とり？」

答えたのは、向き合っていた新一ではない。彼は未だ怪訝な顔をして、平次を見つめ上げているのだから。

声が出したのは、部屋の外からだった。しかも、平次の耳からはかなり下から聞こえたその声は、聞き慣れたより少しだけ舌の回らない、子供の声だった。

平次は困惑しながら後ろを振り向き、やはり自分の視線の高さには誰もいない事を確認してから、下に視線を落とす。すると、そこには水色に青い縦縞の入ったパジャマを着て立つ、見慣れた子供の姿がある。当然ながら、平次はぎょっと目を見開き、もう一度部屋の中に居る存在を確認してから、再び廊下のコナンに視線を戻す。

「くー」

「……平次兄ちゃん！ どうして、ここに？」

『工藤が二人居る！』と、叫びそうになったのを、コナンの言葉に遮られる。

動揺する平次に、コナンは部屋の中から見えないようにそっと口の前で人差し指を立てた。困惑しながらも、平次はコナンの意図をくみ取って、当たり障りのない会話を、頭の中から探した。

「……ボウズこそ、なんでまだパジャマ姿やねん。学校はどないした？」

「ボク、今日は休みだよ。平次兄ちゃんこそ、学校あったんじゃない

いの？」

「あ、あー。気にせんというて。オレも今日は休みやねん」

苦笑い混じりに返すと、コナンはほんの一瞬二秒だけ、ジト目で口元を引きつらせた。だがすぐに、子供らしい表情で、高めの声を出す。

「そうなんだ、じゃあ久しぶりにお話聞かせてくれない？　ボクも平次兄ちゃんと二人で色々お話したいな！」

「……ええで」

相変わらず、演技の巧さに感心しながらも、平次はそう答えてふっと笑った。と、ほぼ 동시에、背後から影が覆って、首だけ部屋の方へ向ける。すると、すぐ後ろに立っていた新一は、平次の肩越しに心配そうな顔でコナンを見下ろしていた。

「……なあ、トイレから戻ったならさっさと部屋入れよ」

「うん。新一兄ちゃん、ボク平次兄ちゃんと二人で話したいんだ」

「いいけど、あんまり無理すんなよ？」

「うん、わかった」

コナンは彼とそんなやり取りを交わした後で、平次の手をぎゅっと掴み、部屋に招き入れた。その様子を眺めていた新一は、ふ、と一息ついてから部屋を出ていった。戸を閉めて、コナンは長い息を吐く。

待ち切れずに、平次はコナンに話を切り出した。

「なあ、どないなってんねん。誰やアイツ」

「……さあな」

再びふーっと息を吐きながら、コナンは布団の上に座り込んだ。

「さあな、てなんやねんそれ！」

「三日前だよ、アイツが突然現れたのは。工藤新一に成り済ます理由もわからねーけど、偽者だって証明出来る手がなくてな」

そう呟いてから、コナンは僅かに俯き、軽い咳を二度ほどした。

「ほんで、そんな怪しい奴三日間もほっといて、何もせんと、手えこまねいてたっちゅうんか？ 工藤ともあろう奴が」

「……しゃーねーだろ、こっちだって色々事情があったんだよ。あんまり敵にも見えねーし、ヘタに疑い過ぎると、逆にオレの正体が、怪しまれるからな」

「敵に見えへんで、せやけど目的わからへんのやろ？」

問い詰めると、コナンは少し黙り込み、目を伏せながらこめかみを右手で抑えた。そして、深く吸い込んだ息を長く吐き出す。その不自然な仕草に、平次ははっとして、コナンの顔を覗き込んだ。

そう言えば、先程はあまり判らなかったが、コナンの顔がやけに赤い。僅かに汗ばんでいるようだし、瞬きの仕草も緩慢で、普通より数も多い。

「……工藤」

「あ？」

「大丈夫か？ なんや、さっきからしんどそうやけど……具合悪いんか？」

尋ねる平次に、コナンの口からはまた長い吐息が漏れた。そして、汗ばんだ前髪をかきあげながら、コナンは気だるげに答える。

「見りゃ判んだろ。一昨日から熱出して寝込んでたんだよ。だから、今日学校休みつつったじゃねーか。サボったオメーと違って、オレはれっきとした病欠なんだ」

「大丈夫なんか？」

念を押すように聞き返すと、コナンは緩く微笑した。

「……ああ、ただの風邪だし、大分熱も下がってるから心配いらねえよ」

「さ、さよか。けどオレかて、和葉に工藤が帰って来たーて聞かされて、驚いて確認しに来たったんやで。思っと思ったよりややこしい事態やったみたいやけどな」

そこまで言った平次は、再び眉を寄せながらコナンの顔を覗き込んだ。

確かに、コナンの顔色は先程部屋に入った時よりも、赤く上気している様子が分かる。汗も、じわりじわり頬を伝っているようだ。うつろな瞳に、不安定な呼吸も合わせて、どうしても微熱程度には見えなかった。

17、平次とコナン（後書き）

えーと、今回もお読み下さってありがとうございますー♪

ちよっともう寝なきや明日ヤバイのですが、とりあえずこの時間まで偶然にも起きてられたので急いでアップしちゃいます♪GWに一話くらいはアップしたかったしね^^

なんとか、今日は時間があいて、ストックやっ和一話分増やせました^^

というわけで、今回の話は早く出してあげたかったのー☆

次回……すこーし核心にさかります♪

また次もどうぞよろしく願いしまーす☆

18、夢の中の少年

「……なあ、工藤……ホンマに大丈夫なんか？　何や顔真っ赤やけど、また熱上がって来てるんじゃないか？」

言いながら、平次はコナンの額に手を伸ばす。抵抗もせず、布団に座ったままのコナンは平次の掌を受け入れた。想像より高めの熱に、平次の表情は自然と険しくなった。

「熱いやんけ！」

「……だ、大丈夫だよ」

「何がや。早よ横にならんと！」

軽く抵抗するコナンの身体を、布団に横たわらせて、掛け布団を肩までかけてやる。そして、すぐそばにあった氷水とタオルで冷たい濡れタオルを作り、コナンの額に乗せる。そこまでやって、ようやくコナンは素直に抵抗を辞めた。コナンはどこかうんざりした視線を、平次に向ける。

「……オメーも、たいがい過保護だな」

「過保護で、そんだけ熱あったら、誰だって心配するやろ普通……それより、体温計ないんか？」

コナンの言葉に答えながらも、平次はきょろきょろと周りを見回した。コナンは罰が悪そうに一瞬視線を逸らしてから、机を指さした。立ちあがって見ると、机の上に白い体温計が置かれている。コナンに渡すと、渋々受け取ったコナンは、その先端を脇に挟んだ。

「起きてたから、多少上がったただただだよ……実際昨日よりず

つと体調はいいんだ」

「せやったら、無理せんと最初から横になっとけばええやろ。ホンマにしんどい時に限って、倒れるまで無茶するんやな、お前」

「うるせーな。……だから、奴の事はとりあえず工藤新一として泳がせておくように、口裏合わせてくれよ。それから、熱がぶり返したとか、余計な事、蘭に言うなよ」

そう話す声は、先程よりも弱々しく苦しげで、平次は頭を抱えてため息をついた。

「ほんなら、誤魔化しきくように、ちゃんと今のうちに熱下げとけや。しゃーないから、オレも当分東京滞在して協力したるから」

「……ん。ありがとな、服部」

いつになく素直な科白に、平次は拍子抜けした。それもこれも熱のせいだろうと解釈して、敢えてコナンを刺激しないように聞き流す。

「……なんか、眠くなってきた。寝ていいか？」

ぽつりとコナンの口から漏れた言葉に、平次はコナンを再度見下ろした。ぼんやりした重そうな眼で、コナンは仰向けに寝たまま平次を見上げている。

「ああ、構へん。早よ元気になってもらわんと、話も進められへんしな」

「……悪いな」

そう呟いたコナンは、目を閉じて数秒で眠りに落ちる。熱い吐息を漏らしながらうなされるコナンを眺めて、平次は小さく息を吐い

た。

まどろみの中、コナンは気づけばうす暗いそこに居た。否、その割に、今の体は小さすぎた。小学一年生、というよりももっとだ。見慣れた視界よりも少し大きく見える周りの景色に、不思議な気分になった。

きよろきよると、周りを見回しながら、壁伝いに歩いていた。ここはどこだろう、広い廊下と、壁についているランプ。どこかの大きな屋敷らしい事は分かった。

人の気配を感じて、くると首を前方に向ける。視線の先――廊下の突き当たりにある部屋から、小さな影が見えた。そして、自分と同じ位の背丈で同じ位の体格をした子供が、ひょこりと顔を出す。

「あ」

声をかけようとする、彼は身体をこわばらせた。そして慌てた様子で、彼は自分の口の前に人差し指を立てる。彼の顔はよく見えないが、音を立ててはいけない事だけ理解した。

彼は、恐る恐るという様子で、自分が足を半分踏み入れている部屋の中を覗き込んだ。そして、肩を撫でおろした彼は、再度その部屋から顔を出す。そして、もう一度念を押すように、口の前で人差し指を立て、静かにゆっくりと手招きをしてきた。

何がなんだか分からなかったが、彼の言う通りにする事が当然のように思えた。コナンは声を出さずに小さく頷き、足音を立てない

ように注意しながら、そろりそろりと彼の元へ歩いた。

彼の前まで来ても、部屋も廊下も薄暗いせいなのか、その顔がよく見えない。けれど、彼が緩やかに微笑した事だけは判った。不思議な事に、口の動きだけは見える。そして、彼はそつとコナンの頭に右手を乗せ、優しく撫でてきた。その手の、どこか懐かしい暖かさに、鼓動が早まった。

彼は、コナンの頭を撫でたまま、ゆっくりと口を動かした。

『だ・い・じょ・う・ぶ』

そして、彼は一度笑顔を挟み、もう一度口を動かす。

『ぼ・く・が・守・つ・て・あ・げ・る』

口パクしながらも、彼は優しく頭を撫でてきていた。

守られるような存在ではない。まして、自分と変わらないこんな小さな子供に。そう思いながらも、彼の言葉に、心の底からとても安心してゐる自分がいた。

そして、彼は頭を撫でていた手を止める。

『こ・わ・く・な・い・か・ら・ね？』

暖かく包まれるような懐かしさが、彼の声のない科白と共に広がってくる。そして、それだけ伝えた彼の手がそつと頭から離れた瞬間、言いような不安が胸を襲った。慌てて彼の手を掴もうとして手を伸ばす。だが、その手は何も掴めずに、周りの景色は先程とはまるで違う真っ白なものになった。

ドクン、と胸が強く鼓動する。手は震え、冷や汗が、額から滲んだ。何故だか分からないが、恐怖が押し寄せてきて、動悸が止まら

ない。

震える手を抑えながら、コナンは必死で首を動かし、自分の周りを見回した。探しているあの彼の姿は、どこにもない。

彼はもう、どこにも、いないのだ。

18、夢の中の少年（後書き）

零時過ぎた頃にうpろうと思ってたけど、絵茶してたら時間忘れて
ましたw w w

いつも読んでもらえて、感想・お気に入り登録など凄く嬉しい限り
です！！

そして、今回もまたありがとうございますv

今回もまた、GWにまさかの連続オールつきオフでw w w

あんまり描けなかった代わりに私にはこの週末がある！ というわ
けで、ストック頑張りますv

さて、今回は結構重要な回だったりします。

これが後々どうなっていくのか……どうぞお楽しみ下さいませー^

^

19、不安定な体調

「……どう！ 工藤！」

強い声で名前を呼ばれて、はっと目を開け、起き上がった。突然身体を起こした事がめまいを誘発した。一瞬、現実に戻ってこれず、額を抑えたままただ呼吸を乱す。頭がふらふらする感覚でようやく、自分が熱で寝込んでいたのだと思うだす。

「工藤、おい、しっかりせえ！」

呼びかける声に、ゆっくり隣に視線を移す。霞んだ視界に映った彼は、次第に鮮明な姿を見せた。

「……っと、り？」

「大丈夫か？ お前今めっちゃうなされとったで」

「……ああ、……うん」

酷く心配した様子で、かけてきた言葉に、途切れ途切れになりながら答えた。そして、呼吸を整えようと何度か深呼吸を試みたが、中々上手く行かないようだ。額に当てていた手に絡む前髪を、ぐしやりと握りつぶす。めまいが、治まらない。

「どないした、苦しいんか？」

再度声をかけられて、横目でちらりと彼を一瞥した。上手くピン트가合わない視界がもどかしい。

「おい、工藤」

「ああ、大丈夫……」

身を乗り出してくる彼にそう答えた。彼はそつと背中の手を当ててきた。温かみのある、大きな手が背中を覆い、多少先程よりも呼吸が楽になる。

「……変な夢でも見たんか？」

「ゆ、め？」

尋ねられた言葉の中にある単語に、脈拍が加速する。

「ちゃうなら、ええけど」

「…………ゆめ…………うくっ」

ぐわんぐわんとめまいが酷くなる頭を抑え、再度呆然と呟いた。

「おい、工藤？」

隣から気遣わしげに呼ぶ声も、耳には届かない。頭を両手で抱え込んで身体を丸めながら、どんどん酷くなる頭痛を必死でこらえた。汗が、じわじわと噴き出た。

「…………ゆめ、なのか——？」

「おい、何言うてんねん工藤！　しっかりせえや！」

少し切迫した様子で呼び掛けてくる隣の声が、遠く聞こえた。目が回り、景色が歪み、不意に再発した酷い吐き気に、コナンは口を抑えて背中を丸めながら蹲る。

「工藤！」

「く……うつ」

「おい！」

「げほっ……げほごほっ！」

激しく咳込み、思うように息が吸えずに、コナンは苦しさからきつく目を閉じた。差し出された平次の大きな手が、コナンの背中をさすった。咳込む音を聞いて心配したのか、勢いよく開いた扉から、蘭や新一が姿を見せた。顔を上げてそんな二人を視界に入れたが、治めようと思えば思うほど、コナンは激しく咳込んだ。

「コ、コナン君！」

駆け寄った蘭は、平次のむかい真横にしゃがみ、コナンの肩に手を添えてきた。なんとか安心させようと思いつながらも、暫くその状態のまま、吐き気と咳に襲われていた。額に触れてくる蘭の手だけが、少しでも苦しみを和らげてくる。

ようやく治まるまで、数分を要した。乱れ切った呼吸はその後もすぐには回復する事なく、ぜえぜえと口から漏れる。呼吸困難でいたせいか、熱のせいか、口を抑えて息を整えながらも、頭の中は酷くぼーっとして、心配してかけてくる彼らの言葉にすら、上手い応答が浮かばなかった。

「……コナン君、本当にどうしちゃったんだろ」

不安げな声が、耳に届く。真横で発せられた言葉の筈なのに、随分遠くに聞こえている事に多少動揺させられる。コナンは口を抑えていた手を額に持ってゆき、俯いて頭を抑えながら蘭の方へ視線をやった。移る視界が、ぼんやりと霞んでいる。

「……一昨日倒れた時からこんな感じやったんか？」

「熱は、あの時の方が高かったけど、今程酷い呼吸困難はなかったよ。でもまた熱上がってきてるみたい。もう一回、お医者さん行ってきた方がいいのかな」

朦朧とした頭で、そんなやり取りを聞いていた。心配をかけてしまっている事は理解していたが、上手く安堵させられる言葉が思いつかないのだ。”大丈夫”のただ一言すらも。

「どっちにせよ、とりあえず、寝かしてやった方がいいだろうな」

上から聞こえてきた新一の言葉の後で、隣にいた蘭は頷いた。そして、ゆっくりと再び布団に寝かされる。瞼は既に重く、気を抜いたら落ちてしまいそうだ。コナンは蘭に微笑みかけ、そしてゆっくりと目を閉じた。

どれくらい時間が経過した事だろう。深く眠っていたおかげなのか、倒れる前と違って随分頭がすっきりしているように思えた。額に乗っていたタオルをのけて、自分の掌で額を覆った。手にも額にも熱を感じて、まだすっかりよくなったわけではない事を悟る。

薬もちゃんと飲んでいるというのに、これほど回復が捗らないのは、自分には珍しい事に思える。それほど、日ごろの寝不足で抵抗力が落ちていたという事なのだろうか。

ぼんやりそんな事を考えながらも、コナンはゆっくりと身体を起

こした。そして、圧迫されるような息苦しさを感じて数回咳込んだ。そこで初めて、布団に寄りそうように眠っていた蘭の存在に気付いた。すっかり熟睡しているようで、起きる気配もない。そっと彼女の頭に手を伸ばし、さらさらの髪に触れた。

「……蘭」

相当疲れさせてしまった事だろう。自分が倒れて以来、彼女が寝ていた姿を殆ど見ていない気がする。触って、僅かに身じろいだ彼女を、コナンはじっと見つめた。

「コナン……くん……」

「ごめんな、心配かけて」

寝言でまで名前を呼んでくる彼女に、そっと囁くように告げた。蒼ざめて張りつめた表情の彼女に、安心させる言葉の一つも浮かばなかった自分が許せなく思えた。

暫く彼女の頭を撫でていると、遠慮がちに部屋の戸が開き、コナンはゆっくりと顔を上げた。

19、不安定な体調（後書き）

今回もお読みいただきましてありがとうございますー！

ふふふふふw

ごめんなさい楽しいですこんな江戸川書くのが一番楽しいです／＼
（^o^）／

あ、いつも凄い嬉しい反応、コメント、ありがとうございますーv
おかげさまで、意欲も減るところかむくむく盛り上がりwでも時間は最近、サイト関連の記念日が近かったり、沈黙観に行きたかったり、ロンドンだったりで若干足りなくて、今も必死でストック23
話目を作成中ですw

携帯でも執筆出来たらいいけどねー、うち携帯でやろうとするとわけわからなくなるんですわ（^ー^；一日が100時間くらいあればいいのにw

でも、皆さんのコメントにもらったヤル気と萌えをパワーに頑張りますー☆

さて、というわけで。

コニヤ崩壊のターンですw次回は、コニヤの更なる崩壊っぷりに平次が動揺しますwいやホント、どうしたよお前って感じになると思うw
www

どうか次回もお楽しみいただけますようにv

20、曖昧な問い

音を立てないように戸を開けると、部屋を出る前には寝ていた筈のコナンが身体を起こしていた。どこか哀しげな表情で、コナンは隣で寝息を立てる彼女の髪を撫でている。

「工藤」

声をかけると、コナンはゆっくり顔を上げた。

「は、服部……」

赤い顔も弱々しい声も相変わらずだが、その両目がしっかり見上げてきた事に、多少安堵した。どうやら、意識ははっきりしているらしい。喜びの声を上げそうになって、慌てて口を閉じる。眠っている蘭を起こさないようにと気を使いながら、平次は蘭が寝ているのとは反対側の、コナンの隣に行き、腰かけた。恐る恐る蘭の顔を覗き込み、起きていないのを確認して息をつく、改めてコナンに向き直る。

「氣いついたみたいやな。ホンマ心配させよって……どや、具合。ちよつとはよくなったか？」

「ん、ああ。色々心配かけたみてーだな……」

抑え気味の声で尋ねると、コナンの方からも囁くような答えが返ってきた。まだハアハアとした吐息が受け答える声に混ざっているのを聞いて、コナンの額に手を伸ばした。手のひらに伝わってくるコナンの体温は、やはりまだ熱い。

「まだ熱はあるみたいやな。吐き気とか、苦しかったりとかはないんか？」

聞くと、コナンは気まずそうに苦笑する。

「今の所はな……あれから、結構時間経つのか？」

「ほぼ丸一日やな。今もう夜中の三時やで！」

枕元にある時計を指さしながら教えてやると、コナンはそれを一瞥してからきよろきよると辺りを見回した。

「……アイツは？」

「ニセモンの工藤やったら、おっさんの部屋で布団敷いて寝てるでおっさんも相当心配しとったみたいやな、お前の事。事務所早く切り上げて、少し前までは看病してたんやで」

「そっか、おっちゃんがね……」

「ほんで、一番びっくりしたんはニセモンの工藤の看病っぷりや。そらもう、お前の事本気で心配しとって、甲斐甲斐しく看病しよつてな。オレも、アイツそない悪い奴とちゃう気がしてきたわ」

「……………」

何かを考え込むように口をつぐんだコナンは、次第に眉間にしわを寄せて俯いた。布団の上に降ろしていた右手で、前髪をかきあげながら額を抑えている仕草に、心配になって顔を覗き込む。

「工藤、大丈夫か？」

「ああ。……なあ、服部」

「何や？」

「オレさ、オメーの目にはどんな風に見える？」

問いかけながら顔を上げたコナンは、凄く切ない表情を浮かべていた。すぎるように張りつめた潤んだ双眸と、微笑を崩したような口元。ふざけ半分で聞いて来ていないという事だけ伝わって、質問の意図がまるで見えずに困惑させられた。

「何やそれ。どう答えたらええねん……そら、工藤は子供の姿やけど、ホンマはオレと並び称されとる東の名探偵で、ライバルで、大親友で……」

変な地雷を踏まないかとひやひやしながら、単語単語でコナンの表情を覗いながら答えた。だが次第に、平次を見るコナンの目は細められた。そして、じっと視線を合わせてきたコナンは、再度念を押すように言った。

「……オレの事が、ちゃんと工藤新一に見えるか？」

「当たり前やんけ！ 工藤は工藤やろ！」

「……………だよなあ？」

心配になって、若干声を荒げながら答えた。すると、コナンは心底ほっとした様子で長い息を吐く。そして再び、頭を抑えて張りつめた顔で俯いた。そんな”彼らしくない”行動や言動に、不安を感じずにはいられない。

平次は、コナンの肩を強めに掴んだ。顔を上げたコナンの驚いた瞳が見上げてくる視線を受け止めて、じっとその眼を見ながら言った。

「工藤、お前ホンマにどないしてん。しっかりせえよ！ 何や、病気で弱気になっとなのか、混乱しとるんか知らんけど、工藤はお前や！ 本物はお前しかおらんのやで！」

抑えたつもりだが、少し声のボリュームが大きかったかも知れない。蘭が身じろぐのに気づいて、平次は僅かに慌てた。だが、起きる気配はないようで胸を撫でおろす。コナンは大きく目を見開いた後で、とても哀しげな、思いつめた表情を浮かべた。

「そうだよな……それで、いいんだよな？」

「ええも何も、それが真実やろ」

きっぱり告げてやると、コナンは自嘲気味な笑みを浮かべた。その表情の意味がよくわからずにいると、数秒沈黙していたコナンは徐に口を開く。そして、コナンは妙に掠れた弱々しい声で、ぽつりと呟いた。

「……病気のせいで弱気になってるとか、そう言うんじゃない」

「ほな、何やねん。ホンマにお前今めっちゃ変やぞ？」

「わからねーんだ……」 あれ” が、誰なのか」

震えて掠れた声が返ってきて、平次は眉を寄せた。額を抑え込んだまま俯くコナンの顔は、やはり強張っている。

” あれ” って――」

平次は眉を寄せ、そんなコナンをじっと見つめた。コナンの頬を伝った汗が、顎から一粒、掛け布団に落ちた。見ると掛け布団には、丸く滴った汗に濡らされた後が模様のように沢山ついている。

「考えようとする、と、頭ん中がぼーっとして、頭痛もめまいも吐き気も酷くなって、息も出来なくなるんだ。……はっ、どうしちまつたんだろうな、オレ。マジで」

言いながら、コナンは再度自嘲的な笑みと共に表情を崩し、辛そうに額を抑えた手にかかった汗まみれのぐしゃぐしゃな前髪を握り締めた。眉間にしわを寄せた下の両眼は、虚ろに揺れてぼんやりとどこかあてのない場所を眺めている。

「く、工藤……」

伸ばしかけた手を、どうするべきか分からず彷徨わせ、平次は困惑気味にその名を呼んだ。

20、曖昧な問い（後書き）

皆さんこんばんはーV今回もお読み下さってありがとうございます！
予言したとおり、服部困惑、コナン崩壊回ですwwww

あ、ちなみに、5月28日にサイトの記念日を控えてまして。まだ
準備がまるで出来てない状態で。ストックは確かに24話まである
んだけど、今週全く進められないようなら次週は更新ないかもしれ
ません。ゴメンネ><

アニメも今日からロンドン、原作もむっはむは展開で、映画も大興
奮な、凄く楽しいコナンな日々ですね♪

次話もまた頑張ります！ ストック増やしも頑張りますV
次もまたヨロシクお願いしますーV

21、深夜の電話

コナンは長く息を吐き出すと、ぎゅっと目を瞑り、空いていた方の手でも頭を抑えた。苦しげに肩で息をしながら、ぶんぶん強く首を横に振る。

「おい、工藤？」

「や、やべ……なんかマジで頭ん中混乱してきやがった……違う、アイツは……。あいつ、は……」

俯いたまま、ぶつぶつとろれつの回らない独り言を呟くコナンを、平次は張りつめた表情でじっと見つめた。どう対応するべきか一瞬迷ったものの、思い切ってコナンの両肩を掴み、無理やり身体を自分に向き合わせた。

コナンらしくない、朦朧として弱り切った汗まみれの表情が、平次をぼんやりと見上げた。若干肩を掴む手に力を込めながら、平次はコナンの虚ろな目に視線を合わせた。

「く、工藤……大丈夫やて。お前やっぱり熱のせいでちょっとおかしなっただけやねん。あいつが偽物やっちゅう事は判ってんねんから、正体突き止めるまで泳がせとくんやろ？　元気になるまでの辛抱や。それまで余計な事考えんと、オレに全部任せて、身体治すのに専念すればええねん」

基本的に、なんでも貯め込んで平気な顔で居るコナンが、遠まわしにでも弱っている部分を見せてくるのは珍しい事だ。その様子に心配になりながらも、それを表に出さないように、平次は諭すような優しい口調で言った。だが、コナンは辛そうに首を振る。

「……アイツの話じゃねーんだよ」
「は？」

予想外の言葉に、平次はトーンの外れた、高い声で聞き返す。コナンは言おうか迷うように、一度だけ唇をきゅつと噛みしめ、それからゆっくりと口を開けた。

「オレは一体、なんで今更、あんな夢を……」

絞り出すような科白に、平次は困惑を隠せずに目を見開いた。

さて――、話はほんの少し前に遡る。

いびきの音がやかましく響く室内で、新一はゆっくり目を開けた。布団の中で欠伸をしながら、時計に目を移す。深夜三時――当然ながら、まだ外も暗い。新一は再び欠伸をしながら、身体を起こした。隣で耳障りな音を立てる小五郎に視線を移し、不満げに眉を寄せながら寝癖のついた髪をわしゃわしゃと掻き回した。

「あー、くそ。こないびきん中じゃ熟睡も出来ねえ……」

ぼそりと呟いた彼は、真剣な表情を作り、上半身だけ起こしたまま、布団の上で腕を組んだ。

「服部……平次、か」

あまりにも小声過ぎるその呟きは、小五郎のいびきにかき消され

た。彼は無言のままじつと逡巡する。

「オレの知り合いみてーな口ぶりだったけど、結局アイツはずっとコナンのそばにつきっきりで、殆ど何も話せなかったな。アイツ一体、何者なんだ？」

顎に手を当て、新一は考え込んだ。そして、徐に布団から出ると、かばんの中から黒い携帯電話を取り出した。ちらりと隣の小五郎を見やり、起きそうにないのを確認してから、携帯電話を持ったまま、足音を立てないように部屋を出た。そして、人の気配の様子を覗いながら、戸をあけて外に出た。

彼は階段を数歩降りて、三階と二階の真ん中位の所に立ち止まり、手に持っている携帯電話のボタンを素早く操作した。自分が入力した電話番号を数秒見つめた彼の表情が、一段と引き締まる。発信ボタンを押すと、彼はゆっくりとそれを耳に押し当てた。

無言のまま、携帯のコール音を聞いていた彼は、数秒待ってやっ
と出た相手に、低くひそめた声を出した。

「早く出ろよ……聞きたい事があって電話してんだ」

『――どうした？』

「服部平次って奴に会った。アイツは一体何なんだ？」

『来ているのか、そこに』

「ああ」

答えると、電話の相手は暫し黙り込んだ。そして、十五〜六秒程の沈黙の後に、ふっと小さな笑いが携帯から耳元に届く。

「なんだよ？」

『放っておけばいい。話はそれだけか？』

返された適当な答えに、新一はむっと携帯電話を睨んだ。そして、小さく息をついてから答える。

「それだけじゃねーよ。もう一つ、確認しなきゃならねー事があるんだ。蘭の家に居候していた、コナンの事について」

『ほう、言ってみろ』

「正直に答えろよ。あの時、病院で――」

先程までよりも更に低くひそめた声を、携帯に口を近づけながらぼそぼそと問いかけた。傍から見れば、ただ口を動かしているだけにしか見えない程の、小さな声で。

電話相手の返答を黙って聞きながら、彼は目を細め、口をへの字に結んだ。携帯を持つ手にも、降ろしている手にも、僅かに力がこもる。電話の相手の言葉に小さく「ああ」と答えると、彼は電話を切った。そして、携帯電話をきつく握り締めながら、彼はギリ…と歯を軋ませた。

「だから、病院には連れていきたくなかったんだ……！」

握りしめた拳を、壁に打ちつけようとして、寸前で止めた。一度だけ深く息を吸って吐き出した彼は、携帯電話をパジャマのポケットにしまい、家に戻った。足音を立てないように玄関を出て、廊下に進む。途中コナンの様子が気になって、コナンの部屋の前で足を止めた。戸を開けようと手を伸ばした新一だが、中から小さく聞こえてきた話し声に、手を止めた。

「アイツの話じゃねーんだよ」

「は？」

「オレは一体、何で今更、あんな夢を……」

静か過ぎる声で聞き取りづらかったが、新一はそつと戸の前に伸ばしていた手を下に降ろし、音を立てないように壁に寄りかかった。そして、真面目な顔で戸の隙間に耳を寄せる。時折聞き取れない部分はあったが、彼はただじつと耳をすませた。話を聞く程に、目を細めながら――。

21、深夜の電話（後書き）

はい、こんばんはー☆今回も、お読み下さってありがとうございます
すーV

先週は、結局やっぱり自サイト以外の事が出来る余裕がなくて、更新できずですみませんでした！今週は頑張って、ストックも3話増やして、無事更新出来ました（^^）

さて、今回ようやく彼を動かすことが出来ましたーV
江戸川さんは相変わらずの崩壊ぶりですわいらっしやいますWW
コニヤはさ、今意識が少しね、朦朧としちゃってるから変な事言っても許してあげて下さいV↑

では、また次話でもヨロシクお願いしますV頑張るよー！

22、倒れてはいられない

「夢って、何の話や？　そう言うたら、さっき起きた時も夢がどうこう言うと思ったけど」

質問した平次を一瞥し、コナンは俯いて口元を抑えたまま、眉間にしわを寄せて暫く黙りこんだ。その顔色は悪いというどころではなく、平次も眉を寄せてコナンの背にずっと手を添えた。

「工藤……大丈夫か？」

尋ねると、コナンはゆっくり顔を上げ、うつろに揺れる視線を平次に向けた。そして、彼はふっと切なげに微笑した。

「ああ、大丈夫。悪いな、服部」

「気にせんとき。なんや、お前が素直やと調子狂うわ」

若干乱暴な仕草で頭を掻きながら答えると、コナンはむっつりと不満げにジト目を向けてきた。彼は再度視線をうろつかせ、迷いながらも口を開く。

「ら、蘭には余計な事言わねえって、約束してくれるか――？」

「ああ」

平次が頷くと、コナンの口元には自嘲的な笑みが浮かんだ。そして、ゆっくり語り始める。

「実は……ここ最近、ずっと夢見が悪くてな。まともに寝れてねーんだ。……た、体調崩したのも、熱が下がらねーのも、それが原因

だと思っ」

「一体どんな夢やねん。お前がそない追いつめられる夢てあんま想像出来へんぞ。よっぽど酷い夢なんやろな。組織絡みか……姉ちゃん絡みか」

布団の上で呼吸を整えながら聞いていたコナンは、苦笑を浮かべつつ首を振る。そして、ふーっと長い息を吐くと、汗で額にはりついた髪をかきあげた。

「んな事、ねーよ……むしろ、大切な夢の気が、する……」

「大切な夢？」

「あ、ああ……実際はどうかわからねー、けど……少なくとも、お、オレには……けほっ！ げほっがほごほ！ げほっ！」

「くど……っ！ おい……」

次第にろれつが回らなくなり、苦しそうに胸を抑えてむせ込んだコナンの背中を、平次は慌ててさすった。咳の音で蘭も身じろいだ。その刹那、コナンは唐突に大きく目を見開き、はっとした顔で蘭を見やった。

「ら、らん……」

「何や？ どないしてん」

尋ねると、コナンは変わらず胸を抑えて苦しげに吐息を零しながら、下に降ろしていた右手をそっと持ち上げた。同時に、その手包むように握りしめられた蘭の手もまた浮き上がった。そして、起きる気配はないまま、彼女の口がゆるく動いた。

「コナン君……大丈夫だからね……私がずっと……ついてる、から……」

もろ寝言なのが判るはつきりしない声だったが、彼女は確かにそう呟いた。じっと蘭を見つめていたコナンの目が、不意に優しく変わる。辛そうに沢山汗をかいた顔が、ふっと微笑した。コナンは胸元を抑えていた左手をそっと降ろし、蘭の頬を静かに撫でた。

「ら、ん……ごめん、な……」

「工藤……」

「元気になるから……すぐ、に」

弱々しく吐息が混ざる声で告げたコナンは、再び苦しげに顔を歪めて呼吸を乱し咳こんだ。

少し経って、咳は止まっても苦しそうに息を切らすコナンを見て、平次は強制的にコナンの身体を倒し、布団に押し込めた。そして、テキパキした動きで、何も言わずにコナンの額を冷やした濡れタオルで覆う。そして、コナンの赤らんでいる頬に手の甲を当て、眉間に皺を寄せて目を細めた険しい顔で、じっとコナンを見下ろした。

「な、何……」

「また熱あがったとるで。お前もう、熱下がるまでは無駄に起き上がるのやめとき。話したい事あるんやったら、そのまま聞いたるから」

「お、大げさ……だな。た、ただの、風邪だから……いづれ治るよ……っ」

途切れ途切れにそう話したコナンは、辛そうにぎゅっと目を瞑り喘いだ。

「なあ、ホンマにそうなんか？ おかしいやろ。薬飲んでも効かへん、熱もめっちゃ高い上に、あないドロドロなお粥も殆ど受け付けられへんで、よーわからへん呼吸困難やらまで起こしよる。もう四

日目やる？ お前ホンマに風邪なんか？」

「……。風邪、だよ」

真剣な視線を受け止めてそう答えた後で、コナンはふいとそっぽを向いた。そして、変わらず繋がれている蘭の手を、静かに握り返した。そして、囁くような声で小さく呟いた。

「服部……」

「なんや？」

「オレは、オレが苦しんでるせいで悲しむ蘭を見るのが一番辛い……だから、早く治して安心させてやらねーと。……倒れてらんねーだろ？ いつまでも……」

そう言ったコナンは、深い呼吸をして、辛そうに目を閉じた。ゆっくり空いた目の視線は、蘭をじっと見つめている。

平次はふーと息を吐き、コナンの頭に手を置いた。

「当たり前やろ。早よ治して、姉ちゃん安心させてやり」

「ああ、そうだな……」

「せやから、もう一回……診てもらた方がええと思うねん、オレは」

平次の言葉に、コナンからは無言が返ってくる。平次がもう一度それを勧めようとしたその時、突然戸の前に人の気配を感じた。

「誰や」

突然部屋の空気はピンと張りつめ、平次が放った威圧的な声がヤケに響いた。ゆっくりと部屋のノブが回されて、音を立てないようには開けられた戸の前には、新一が立っていた。無表情よりは少し陰しく思える表情で。

「お、お前……いつから聞いてた？」

「まさかずっと、盗み聞きしとったんか……」

平次とコナンの言葉に、彼は眉間を寄せて小さく肩を竦めた。そして、コナンを物言いたげに数秒眺め、ゆっくりと口を開いた。

22、倒れてはいられない（後書き）

どうもこんばんはー！　今回も見捨てずお読み下さってありがとうございます
ございますーVそして、いつも温かい言葉をありがとうございます
ーっ！　皆さんのおかげで、私今凄いやル気むんむんですV頑張
れます♪

さて今回。夢の話について、コナンの口から少し語られましたね。
これもまた、最初の頃から少しずつ織り交ぜてた伏線の回収となり
ました。ただまだ夢の事については、判らない事沢山あると思いま
す。それもまたおいおい紐といていきますので……。

今回のコニヤと蘭の関係、平次とコニヤの関係、私個人的には最も
理想な形で描きました。皆さんにとっても、こういう関係いいよね
！って思ってもらえるものだといいなあ（^▽^）V
とりあえず、前回動き出した新一さんは、何を思っているという行動
を取ってくるか。そして、コニヤは平次は、どう対応するか。

次回も是非、お楽しみいただければと思います！
では、次話でもヨロシクお願いしますーV

23、その手と温み

「病院には行くな」

彼の口から静かな声で告げられた言葉は、想像からは全く離れたものだった。困惑するコナンと平次に、彼はもう一度真剣な顔で告げた。

「最初からオレがもつとはっきりしておけばよかったんだ。コナン、お前を病院には行かせない。絶対に」

「何言うてんねん、こいつこない具合悪うしとるのに、ほっとけ、て言うんか？」

苛立ちの混じった声で反論する平次の言葉に、彼の表情は引き締まる。コナンは布団に横になったまま、呼吸を荒げながらそんな二人をぼんやりと観察した。

「ほっとけなんて誰も言ってないさ。ただ、病院はダメだ」

「せやから、その理由説明してみいて！」

「平次兄ちゃん……」

立ちあがりかけて今にも新一に掴みかかりそうな平次の手首を、弱々しい掠れ声と共に布団から伸びたコナンの小さな手が掴む。思った以上の体温差に若干驚かされながらも、中腰のまま振り向いた平次にコナンは小さく首を振った。一瞬何か言いたげに口を開きかけた平次だが、ふう、と吐息を一つ零すとその場に座りなおした。

コナンはふう、と息をつき、そっと平次の手首を解放した。そして、その手で口を抑え、ケホケホと三度程軽い咳をしてから、新一の方に視線を移す。

「……どうして？」

「ん？」

「病院に、何があるの？」

吐息混じりの小さな掠れ声だが、コナンはゆっくりと強い意志を語尾に絡ませながら尋ねた。僅かにピントの合わない視界に、ぼやけた彼の姿を映しながら、コナンはじっとその表情を伺った。

彼は、眉間を寄せて、ずっと目を細めた。そしてふっと詰めていた息を吐き出すと、コナンの元まで歩み寄り、そして平次の隣で腰を下ろした。

コナンの額に置かれたタオルを一旦外すと、彼はそれを氷水に二、三度浸して絞った。そして、コナンの額よりも大きな新一の手が、無言のままコナンの額を覆った。

「やっぱりまだ下がらねーか。確かに、この熱じゃ辛いよな」

「……はぐらかすなよ」

言いながらも、コナンは瞼が重くなるのを感じた。どうにも、彼の手に触られていると、妙な安心感で頭がぼーっとしだして、目もトロンとしてしまうらしい。ふわふわする頭と視界を必死で保たせて、コナンは彼をぼんやり見つめた。

「そのつもりはねーよ。とにかく、病院には行かせられねーんだ。オメーの為にはな」

「お、オレ……の？」

「そう。オレは、オメーにも蘭にも、ずっと平和で居て欲しい。あんな所に関わっちゃ駄目だ。今は確かに辛いだろうけど……大丈夫だから」

もうすっかり薄れた意識のせいで、上手く言葉を認識出来なくなっているらしい。が、重い瞼を開けたその霞んだ視界に映る彼の顔は、優しく悲しげな微笑みを浮かべた。そして、額を抑えていた手は今度はコナンの頭を撫で始めた。

「そんな不安そうな顔すんな。怖い事なんかなんもねーから」
「……？」

上手く返事を返せずに、ゆっくりと目を開けたコナンに、彼は頭を撫でながら変わらず優しい声で囁いた。

「オメーにも蘭にも、オレがついてる。オメーらの事は絶対に、オレが守ってやるから」

その言葉に、コナンは一瞬目を見開いた。けれどすぐに瞼の重さに耐えられずに、不安定な視界は一層狭まった。首筋や額を、汗が這っているのを感じながら、コナンは落ちかけた意識の最後に、口を動かした。ろれつの回らない声で、新一に手を伸ばしかけながら。

「し……新一、にいちや……」

はつきりしない声でそこまで呟いてから、コナンは意識を完全に手放した。

新一の手がそっと頭から離れ、代わりにコナンの額には冷たくなった濡れタオルが戻される。

黙ってそのやり取りを見ていた平次は、意識を失った直後のコナンに心配そうに視線を送り、そして眉間にしわを寄せながら、鋭い視線を新一に向けた。新一もまた、コナンへの優しい視線から若干困惑気味に変わった表情を平次に向ける。

「んな怖い顔すんなって」

「……さっきはこいつに止められたからなんも言わへんかったけど、アンタホンマになんなんや？」

疑惑をたっぷりこめた威圧的な口調で、平次は彼に問いかけた。彼は口をつぐみ、平次をじっと見つめる。

「聞いたったんやろ、オレらの会話。なんで何もツツコんでこんなったんや？」

「……ツツコミ入りたい所には入れさせてもらったさ。それに、オレは工藤新一。それ以外の何者でもねーよ」

そう答えた彼は、蘭の机にある写真を指さして、自分の顔を軽くつねった。そして「な？」と微笑する。平次はむっつりしたまま、新一を睨みつけた。

「ほんなら、はつきりせえや。何で病院がアカンねん。工藤は具合悪うてちゃんと追及出来へんかったみたいやけど、オレは誤魔化されへんぞ！」

「……工藤？」

平次の言葉に、向かい合う新一は、ぴくりと反応した。その反応に、平次の額から一筋の汗が零れた。

23、その手と温み（後書き）

今回もお読み下さってありがとうございますーすVこんばんはー☆
当初から、新一がコニヤを病院に行かせたがらない感をじわーり滲
ませてたつもりですが、気付かれた方居ましたでしょうか（へへ）？
深夜に江戸川が急に苦しみ出した時も、病院に行かずに様子を見よ
うと言ったり、病院に行った時の微妙な態度だったり。

いやさ、専門家でも何でもないけどさ。突然あんな酷い発作みたい
なの起きたら、様子見とか言っていないで一刻も早く救急車呼ぶのが
賢明な判断だと思うよ、私はwwww
皆さんも多分、様子見って言うのには「は？」って思った事でしょ
うw

そんなこんなで今回のお話。ささやかに重要なシーンを織り交ぜた
形になりました。気付かれた方も、そうでない方も、お楽しみいた
だけたのであればそれだけで幸いですV

では、また次話もヨロシクお願いしますー☆

24、二錠の薬

「あ、ちゃうで。」工藤”やのうて……って、何反応してんねん今更。聞こえてたんやろ、オレらの会話。気にすんなや、オレが勝手にボウズの事工藤てあだ名で呼んどるだけやから」

首を傾げた彼に、いつものギャグまがいな訂正をしようとして、やめた。先程の会話を聞かれていたとしたら、不自然な訂正はかえって疑惑を呼ぶだろう。彼は暫し逡巡してからふっと笑うと、コナンをじっと見つめる。

「工藤、か。本当の兄弟になれた気分だな」

「ホンマの兄弟？」

怪訝な顔で尋ねた平次に、彼は儚げにも見える優しい笑顔を見せた。

「こいつの事はなんか、すげー大切な存在に思えるんだよ。守ってやりてーんだ。何があっても、絶対な……」

言いながら、彼は再びコナンの頭を優しく撫でた。それを見て、平次は若干むっとする。

「お前、そいつに気安くベタベタ触りよるけどなあ、病気だから大人しくしとるだけで、そいつが元気になったら痛い目みるで？ それに、そいつはお前が思っとなるような守ってもらわなアカンような奴とちゃうねん」

口調にも若干とげが混じる。少し汗ばんでいる髪を手に絡ませな

がら、新一はきよとんとした顔で平次に視線を送る。そして、コナンと平次を見比べ、数秒考え込んだ後、ぱっとその表情は明るくなり、直後何とも言えない苦みを帯びた笑みを作った。

「ああ、オメー……あれだ。シヨタって奴だろ？」

「なんやて？」

唐突な言葉に、平次は鳩が豆鉄砲をくらったような表情を浮かべる。

「いや、オレはこいつの事弟みたいに思ってるけど、オメーはなんか今オレにやきもち……」

「ちゃうわ！ 何言うてんねん、ドアホ！」

「お、おい！ しーっ！」

とんでもない疑惑に思わず全力で怒鳴った平次に、新一は慌てて口の前に人差し指をたてた。はっとして、平次も自分の口を抑え、コナンと蘭の様子を伺った。二人とも少し表情が動いたが、起きる様子はない。

「気をつけろよ」

「……せ、せやなあ。にしてもこの姉ちゃん、ホンマにしぶとく寝とる……吃驚や」

「蘭はな、一度寝ると中々起きねーんだよ」

ふっと表情を緩めた彼は、愛しそうに蘭の寝顔を眺めた。

「殆ど寝ないで看病してたんだ。起こさないでやってくれよ？」

「ホンマ、随分親身になりよるな。姉ちゃんとそのボウズに」

「当たり前だろ？ さっきも言った通り、大切なんだって。何から

でも守って見せるさ……例えその相手が、親や、命の恩人とかだつたとしてもな」

そこまで呟き、彼は言葉を止めた。そして、口元に手を当てて、難しい顔で数秒考え込む。そんな彼をじっと眺め、平次は目を細めた。一度コナンに視線を向けると、コナンは眉間にしわを寄せて、うなされている様子で左右に首を動かした。相変わらず、苦しげな吐息が口から漏れている。顔の赤さも大量の汗も、変わらず熱が高い事を物語っている。

「……いい加減おかしいやろ？ もっかい診てもらわんと、ホンマに風邪かわからへんやんけ」

「オレだって、そりゃ心配だよ。けど今は病院に行くより、家で看病してやった方がいい。もし本当にヤバイ状態になっちゃった時は……いや、それまでにきつとオレが何とかしてやる。だから今は、詳しい説明出来ないのは悪いけど、大切だろ？ こいつのことが」

真剣な双眸と必死な声に、平次は眉を寄せた。そして暫く逡巡した後、ため息を零す。

「当たり前やんけ。まあええわ。そこまで言うんやったら、もう少しだけアンタの事信じたる。こいつを心配しとる気持ちに、嘘はなさそうやしな」

「悪いな、服部。――それからもう一つ、お前知り合いに信頼出来る薬関係の仕事してる奴いねーか？ 病院勤務していない奴限定で。研究者や薬剤師の卵とかでも構わねーけど……とにかく薬品関係の知識に精通した奴」

声をひそめながら尋ねられたセリフは、平次の中で鮮明に一人の少女を思い浮かべた。さほど何度も話をしたわけではないが、恐

らく誰よりも信頼出来て、薬の知識ならそこの研究者に負ける筈のない哀の事を。

ただ、暫く黙っていた平次は微かに視線を左下に逸らし、ぼそりと呟いた。

「……居ったら、なんやねん？」

すると、彼はゆっくりと、ポケットから平次の前に種類の違う薬を二錠差し出した。一つはカプセル——ごく小さな瓶に入れられた、赤と白の、見覚えのないものだ。もう一つは錠剤。こちらは普通に処方されたままに見える、最近どこかで見覚えのある気がする白い錠剤だ。

「この薬を、調べてもらいたいんだ。出来るだけ早く、詳しく。んな事頼める知り合いいねーか？」

「あんたに会わせる必要はないんやな？」

「ああ、百パーセント信頼出来る奴ならそれでいい。オメーから頼んでくれ」

「ほな、薬貸してみ。引き受けてもらえるかわからへんけど、心当たりあたってみるわ」

薬を受け取った平次は、それを自身のポケットに入れた。

一応時計を見るが、まだ電話をするにも家に押し掛けるにも時間が早すぎるようだ。空も未だにうす暗い。

「起きとる時間になったら、連絡したる」

「ああ、頼む」

真面目な顔で答えた彼に、平次は軽く頷いて布団の中のコナンへと視線を移した。相変わらず、眠っているというのに、赤い顔色も

苦しげな表情も、相当乱れた呼吸も、和らぐ様子はない。時折呻いては、苦悶の表情を強めている。

顎から首につたう汗を、伸びてきた新一の指がそっと拭い取るのを一瞥し、平次はすっと目を細めた。何もできない自分に、齒痒さを感じながら。

24、二錠の薬（後書き）

こんばんは！ 茶会に夢中になってたらすっかり時間忘れててごめんなさいwそして今もまだ絶賛お茶会中。

遅くなっちゃいましたが、24話アップです！ 今回もお読み下さってありがとうございますーvvv
彼の動きも次第にじわじわお見せ出来るようになって来ましたv
次話も是非ヨロシクお願いしますーv

25、彼の居ない小学校

寝込んでいるコナンをよそに、帝丹小学校は今日もまた普段通りの朝を迎えた。

ランドセルを背負った児童達が、『廊下をはしるな!』と書かれた張り紙の前を、楽しそうに騒ぎながら走って通り過ぎてゆく。そんな中、茶髪でクールな年相応とは程遠い雰囲気少女は、マイペースに下駄箱から上履きを取り出して、そこに足を入れた。ちらりと視線を移した先には、”江戸川コナン”と書かれた下駄箱が寂しく存在していた。

「あーいちゃん!」

突然、明るく可愛い声と共に、背中を小さな両手に叩かれて、哀ははっとして振り向いた。そこにいたのは、馴染みのカチューシャの少女だ。その少女――歩美は振り向いた哀に人懐っこい笑顔を向けながら、両手を後ろに組んだ。そして、元気な声でもう一度口を開ける。

「おはよう、哀ちゃん!」

「あら、おはよう。小嶋君と円谷君は一緒じゃないのね」

「うん、歩美ちょっとお家に忘れ物しちゃって。……コナン君、今日は来てる?」

尋ねる歩美の顔が、若干曇った。昨日も余程心配そうにしていたが、今日もまた休みである事を薄々勘付いていたのだろう。眉を寄せて首を振ると、向かい合う彼女は張りつめた顔で俯いた。

「そっかあ……コナン君、風邪酷いのかなあ」

「心配いらないわ。ちゃんと病院にも行ったみたいだし……数日後には元気な顔の彼に会えるわよ」

そう答えて、落ち込む歩美の背中にそっと手を添えた。彼女は俯いたまま、しょんぼりと下駄箱から上履きと靴を出し入れしている。上履きに履き替えた彼女と教室までの廊下を歩きながら、哀は博士から聞いた、病院に行った日のコナンの様子を脳裏に浮かべていた。聞いた話だと、土曜の夜に阿笠邸で別れて家に帰った直後倒れたらしい。確かに、あの日の彼は様子がおかしかった。顔色も悪く、考えがまとまらない様子でぼーっとだるそうにしていた。だが、それ以前もここ数日顔色が冴えない気だるげな彼を見ていたせいかな、疲れのせいだと信じてしまっていたのだ。車内でも、聞いた限りでは相当熱が高いらしく、終始ぐったりしていたという話だ。

1-Bと書かれた教室の開いた戸から二人で中に入ると、既にそこで談笑していたらしい元太と光彦が駆け寄ってきた。

「灰原さーん、歩美ちゃん、おはようございます!」

「あ、ええ、おはよう」

「おはよー」

光彦の挨拶に、歩美と哀はどこか元気のない返事を返した。すると、光彦の隣で元太が怪訝な顔で二人を見下ろす。

「二人とも何暗い顔してんだ?」

「コナン君の事……ですか? 今日も休みみたいですね」

「うん、最近ずっとコナン君元気なかったし、昨日も休んじゃってるし」

元太と光彦の問いに、歩美は俯いたまま答えた。元太と光彦の雰囲気も暗くなったが、少し黙りこんだ後、光彦は明るい声で言った。

「そうだ！今日の帰り、皆でコナン君のうちに小見舞いに行きましようよ」

「いいなそれ、オレらで元気づけてやろうぜ！小遣い出し合って、上手いような重買ってよ！」

「元太君じゃないんだから。持ってくなら、果物とかにしようよ！歩美が風邪ひいた時、よくお母さんがビタミン摂るといいからって、食べさせてくれるよ！」

光彦の提案に、少し元氣を取り戻した様子で賛成した子供達を見ながら、哀は厳しい顔で目を細めた。

「悪いけど、私は行けないわ。それに、あなた達が行けば彼も氣を遣うでしょ。こんな大勢で乗り込んで、逆に体調悪化させちゃうかも知れないし。あなた達も風邪うつされるかも知れないのよ？」

「で、でも……」

しゅんとした子供たちと共に、場には数秒間気まずい空氣が流れた。そんな沈黙を破ったのは、哀の携帯だった。哀はポケットからそれを取り出し、画面を見て首を傾げる。

「ごめん……ちょっと待っててくれる？」

そう言って探偵団の輪の中から離脱した哀は、その電話を取った。

「もしもし？」

少し戸惑いがちに、眉を顰めて携帯に声をかける。すると、電話をかけてきた相手は、やたらボリュームの大きな抑揚のある声で答えた。

『おー、繋がりがよったな！　まだ時間平気やろ？　ん、何で黙っ
んねん。まさか忘れてへんよな、オレやオレ！』

「……………オレオレ詐欺と間違えて欲しいのかしら」

若干、うんざりしながらも、呆れ果てた声で返す。

『あーっ、ちょー待ち！　冗談きついで、姉ちゃん。オレや！　西
の高校生名探偵で工藤と大親友の、服部平次や！』

「……………判ってるわよ。何なの突然。あなたから電話が来る理由が見
つからないんだけど。大した用じゃなかったら、実験用マウスの代
わりになってもらうわよ？」

あくまでも鋭く温度差のある受け答えをしようと、電話の向こ
うから大仰なため息が聞こえてきた。そして、今度は先程よりも控
えめな声が返る。

『大した用やないのに、電話する程の仲とちゃうやろ。姉ちゃんに
頼みたい事があって電話してん』

「……………頼みたい事？」

『せや。調べて欲しい薬があんねん。出来るだけ早く、周りには…
…内緒でな』

25、彼の居ない小学校（後書き）

こんばんはー☆

今回も、お読み下さってありがとうございますーV

前回、いつもより一時間以上遅刻しちゃったせいか、いつもより若干アクセスが伸びずだったりして、もしかして楽しみにしてもらってる方に、「今週は更新ないんだな」と思われちゃったのかなーと密かに申し訳ない気持ちになっておりましたwwww

さて、前回ようやく動いた彼のおかげで、今回は哀ちゃん本格参戦に話を動かしました（へー）ー☆

三話目以来でしたかね。”新一”と”コナン”の関係をしっかりさせる為に、哀ちゃんずつと出ずっぱりになっちゃって。でも、最初から哀ちゃんにはいっぱい頑張ってもらおうつもりで居ましたので、これからもしっかり出番を作って行く予定です♪

さて、それでは今回はこの辺で。

次回もまた是非ヨロシクお願いいたしますーV

26、電話越しに

先程のリラックスして緩みきった顔とは一転、哀はクールで鋭い科学者の顔を見せた。そのまま少し押し黙った後、張りつめた声で答える。

「まさかそれ、組織に関係のあるものなの？」

『オレにもよーわからへんのや。せやけど、アイツには少なくとも関係ある事みたいやで』

「アイツって……」

『工藤や。工藤！』

平次の言葉に、哀は大きく目を見開いた。そして、大きく息を吐く。

「判ったわ。彼に関わる事なら、どんな薬でも調べてあげるわよ……それで？　どんな薬の、何をどう調べればいいのかしら？」

『それについては、直接会った時に詳細伝えたるで』

戻って来た科白にぎょっとさせられた。眉を寄せて更に携帯を耳に押し上げながら、哀は若干声を荒げる。

「直接って。あなたまさか東京まで来るつもり？　けど今は――」

『あー。オレ、実は昨日の朝から上京しとったんや。今工藤の面倒交代で見とるし、よーわからん工藤そっくりな兄ちゃんも居てるし、少しの間こちに滞在する事になりそうやで』

「彼と会ったのね。……工藤君の具合はどうなの？」

『……せやなあ』

そう呟いたきり、電話の相手からは十数秒、長めの沈黙が返ってくる。少し不安になって催促するように彼の名前を呼ぶと、彼はようやく重い口を開いた。

『いい状態とは言えへんな。一日中布団でぐったりしとる。熱もめっちゃ高いし、苦しそうやし……ホンマに風邪なんかもわからへん』
「……そんなに悪いの？」

返す言葉が、自然と震えた。平次からは、短い肯定が返ってくる。何より、そこまで弱っている彼の姿というのを想像できない。博士から彼が倒れたと聞いた時は、幾度も見舞いに行こうと思ったが、例の彼がずっと居るらしいと聞いて、行くに行けなかったのだ。

『せや。姉ちゃん、薬作つとる科学者なんやったら、医学的な分野も判るんとちゃうか？』

「ええ、幼少期にそっちも勉強させられたし、多少なら……」
『ほんなら、診てやってくれへんか？ もしでっかい工藤の事が嫌やったら、今日は夜まで居らへんから安心しい』

平次の提案に、哀は少しの間逡巡した。

「あなた、今一体どこで電話してるの？」

『ん、工藤が寝とる部屋やで。オレとおっちゃんが居てるからって説得して、姉ちゃんとあのでっかい工藤には高校に行ってもろてんねん……その後、でっかい工藤の方は何や行く所があるらしくてな、夜まで帰れへんて言うてたで。姉ちゃんも、工藤の看病の為のもんとか、食事の買い物とかしてくる言うてたから、帰りもそない早くないやろな』

聞き終えて、哀は小さく息をついた。きよんとした顔でこちら

を見つめる三人の視線に作り笑いで対応しながら、ふっと上を見る。壁にかかっている時計は、朝の会が始まる二分前を指している。恐らく、もうすぐに先生が教室へ来るだろう。

哀は子供たちに聞かれないうちに、声を潜めて伝える。

「判ったわよ。今日学校終わってからでいいかしら？」

『ああ、それでええで。ほな……あ、ちよー待ち』

「え？」

聞き返すと、電話の向こうで咳込む声が聞こえてきた。よく耳を澄ますと、聞きなれた声より大分弱く掠れた声が、微かに受話器から届いた。

「――ああ、それでええで。ほな」

声が聞こえてきて、薄っすらと目を開けた。相変わらずはつきりしない視界の中で、電話をかけている平次の姿を見つけた。

「……はっ、とり」

声をかけると、彼は目を丸くして電話口に告げた。

「あ、ちよー待ち」

慌てた声の後、彼は電話を一旦床に置き、身を乗り出してきた。

「……電話、いいのか？」

「ああ。待っててもろてるからな。目え覚めたんやな」

「……ん。……それより、電話……待っててもらってるって、相手だれ？ げほっ！ げほごほっ！」

咳込んでから、息を吐く。一瞬心配そうな顔で手を伸ばしかけてきた平次は、治まったのを見るなり安堵した表情を浮かべた。彼はいったん床に置いた電話を手にとると、言った。

「……お前の事、めっちゃ心配しとるみたいやで。声聞かしたり」

そう言いながら、耳に携帯電話を押し当てられた。誰だか分からず、とりあえず呼吸を整えながら「もしもし」と声をかけてみる。すると、一瞬驚いた様子で息をのんだ電話相手は、聞きなれた控えめの声を出した。

『く、工藤君』

「は、灰原か……？」

尋ねると、いつも通りのクールな返事が、少し上ずった声で返ってきた。

『それよりあなた、具合どうなの？ 相当酷いみたいだって聞いたけど』

「……。お、大げさだな。なんでも、ねーよ……。こん位」

はっきりしない意識を奮い起こしながら、途切れ途切れに答え、咳込んだ。

『ちょっと！ 酷い咳じゃない。大丈夫？』

「ああ。わ、悪い……」

『声も苦しそうね。あ、小林先生が来たから切るわよ。学校終わったら診てあげるから大人しくしてなさい』

「……ああ」

彼女の言葉をよく理解出来ないまま返事をする、程なくして電話が切れた。視線を平次に移すと、何も言わずとも理解してくれたらしく、携帯電話は耳から離された。

「どや？ ちゃんと話せたか？」

「……ああ。けど、余計心配かけた気がするよ……頭がふらふらして、最後の方、何言ってるのか、よ、よく判んなかったし……」

「大丈夫やて。会った時に少しでも元気な姿見せたったらええねん」

そう答えながら、彼は携帯をポケットにしまい、熱を測るように額に掌を当ててきた。若干ひやりとして気持ちよく感じた体温は、すぐに額から離れた。代わりに、先程より冷えたタオルが額に戻された。次第にまばたきは緩慢な動きに変わり、コナンは再び眠りに落ちた。

26、電話越しに（後書き）

こんばんはー！　今回もありがとうございますV V

コニヤと哀ちゃんの電話で締めくくらせていただきましたー（＾|

ー）ー☆

さて。次話はちよっぴり番外というか、幕間というか、ブレイクタイム的なお話を突っ込みます。つつても、本編と離れた話ではなく、展開の都合上出番が弱いおっちゃん和園子、それから”工藤新一”の、哀がコナンの元へ来るまでの空白の時間を。

ちなみに、おっちゃんに関しては、純粋にコニヤを心配するおっちゃんを書きたかっただけですw w w

その次から、新章に突入するような形で、話が大きく動き始めます。薬、工藤さんの正体、夢の少年と、組織なんかの出番が多くなる事でしょう。

是非是非、お楽しみ頂ければと思いますV

それでは、また次話もヨロシクお願いしますー（＊＾＾）V

27、ブレイクタイムⅡその時の面々Ⅱ

◇毛利小五郎の紳士な半日

うおっほん！ 皆さんどうもこんにちは。私は泣く子も黙る名探偵の、毛利小五郎です。

コナンの奴が倒れたのは土曜の夜の事だったか。コナンがベッドではあはあしてるのに皆がつられてる間、オレは必死で働いていた。まあ、今日は蘭と新一の奴が学校に行くからってんで、オレは大阪の探偵ボウズと二人、仕事はそこそこに、コナンの面倒を見なきゃならねーんだけどな。

そんなオレは今、コナンの様子を見に部屋の前までやって来た所だ。戸を開けると、寝込むコナンに寄りそうように座ってじっと眺めていた大阪の探偵ボウズの色黒で濃い顔が、オレの方を向いた。オレは、若干ざわつく気持ちを抑えながら、布団に眠るコナンの顔を覗き込んで尋ねた。

「よお、コナンの具合はどうだ？」

すると、奴はうんざりした顔を浮かべやがって、呆れた目でオレを見やった。

「おっさん、さっきから何度目やそれ。心配なんはわかるけど、そない気になるんやったら、ずっとここに居ればええやんけ」

「ばっ……。オレはなあ、そんなガキでも一応面倒を頼まれてるガキなんだから、責任があるんだよ」

奴の呆れた科白に、つい荒ぶった声で返しちまう。はっとして、コナンの顔を見たオレは、起こさなかったらしい事に心底ほっとしてため息が零れた。

コナンの呼吸音が、部屋の入り口に立ってるオレの耳にまで届いてやがる。――ったく、苦しそうにしゃがって。もう四日目になるのか。いや、それ以前から顔色が悪いのには気になっていたが。こいつが高熱で倒れたって聞いた時は、風邪だと思ってたんだがな……そろそろやべーんじゃないか？

「薬、ちゃんと飲ませてやってんのか？」

「当たり前やんけ」

「飯は？　ちゃんと食ってるか？　そいつ」

「……めっちゃ軟いお粥やけどな。一応少しは食わせんとアカンし、スプーンで何口かは食わせとるで」

困った表情で、静かな関西弁がオレの問いに答えた。長い息を吐きながら、オレはコナンに歩み寄り、大阪のボウズの横にしゃがんで、コナンをじっと眺めた。眠ってるつつーのに、眉間を寄せて口を開けたままぜえはあ言ってるやがる。これじゃ、寝ててもリラックス出来てねえじゃねーか。

コナンの額に乗ったタオルに触れると、どうも生ぬるく感じた。目を細めて、タオルを額から外し、手を乗せて熱を測ってる。

「……まだ随分熱いじゃねえか」

「せや、全然熱が下がらへんねん。解熱剤も効かへんし」

張りつめた関西弁が耳元で呟いた。オレはちらりとそっちを見てから、またコナンに視線を戻した。さっき氷水に浸してやったタオルを、絞って再び額に乗せてやる。若干、コナンの顔が和らいだよ

うに見えた。

「オレはこれでも、男手一つで、蘭をガキの頃から育ててきたわけだが、こんな酷い症状見た事ねーぞ？ やっぱりこいつ、どっかヤバイ病気なんじゃねーか？ ちゃんとでっかい病院で調べてもらった方がいいと思うんだがな……」

蘭もオレも付き添える時に、多少遠くても、いい小児科の先生探して連れてってやるか。生意気で手のかかる悪戯ボウズって位が、こいつには一番だ。このボウズがチョロチョロしてねえと、オレも少し調子狂うからな。ったく、こんな時ぐらい、少しは弱音吐きやあいいのによ。

「早く元気にならねーと、本当に承知しねえぞ？」

くしゃ、と撫でた頭は、いつもより大分熱く汗ばんでいた。

◇園子の工藤新一観察記録

ん、あれ？ 今度は私がツナギ役？ 全く、少しは本編に出してくれたらどうなのよ。しょーがないわねえ……皆さーん、こんにちは。私は巷ではちょーつとばかし有名な女子高生名探偵、鈴木園子様よ！

今は、そう。帝丹校の私達の教室の中。椅子に座ってる蘭の机を

囲うように、私と新一君が立っているわ。

彼と一緒に学校に来てからずっと、蘭は浮かない顔をしてた。蘭って、昔からあんまり辛い事は表に出さないから、ぱっと見ではにこやかにしてるように見えるのよね。でも、長い付き合いだから私には判るのよ。誰とも話して居ない時に、蘭がふっと浮かべる曇った表情も、どこか元氣のない声も。――原因も判ってる。昨日学校を休んだ原因が、あのガキンチョが熱出してるせいって聞けば、それっきゃないでしょ。私はずっと小さな深呼吸をして、蘭の前に数枚のコピー用紙を出した。

「らーん、昨日の授業のノート、蘭の分もコピーとってきたよ！」

「あ。ありがとう……新一にも見せてあげていい？」

「そう言うと思ったから、ほら、新一君の分もちゃーんとあるわよ」

ケラケラ笑いながらもうひと束の紙を見せると、蘭の顔がほころんだ。少し安心して新一君に視線を移したら、それまで無表情だったくせに、私に気づいてから慌てて笑顔を見せた。

「あ、ああ、ありがとな！ 園子」

上ずった声でとってつけたようなお礼言われてもね。全く、昔っから蘭と推理とサッカーの事以外には無関心なんだから。

「感謝しなさいよ、わざわざあんたの為にコピーとってきてやるなんて、最初で最後だからね？」

「わあってるよ。もう滅多に休んだりしねーって」

呆れ眼で、軽い口調で答えた彼に、少しだけいらっとする。

「新一君、私あんたが蘭をずっと泣かせてきた事、許してるわけじ

やないから。約束しなさいよ？ 絶対に二度と蘭の前から居なくなったりしないって」

「園子……。それはもういいよ。一応帰って来てくれたんだし」

目を丸くして顔を上げた蘭が、申し訳なさそうに苦笑いしながら言った。確かに、ちよつときつい言い方しちゃったかもね。でも、蘭の事悲しませて散々待たせた長い期間を、そんな軽い言葉で済ませていいの？ はっきり言って、冗談じゃないわよ。

新一君は暫く黙って、真剣なまなざしで見つめてきた。そして、小さく口を開いたわ。

「ああ、約束するよ。オレは絶対に、蘭を一人にはしねえってな」

「し、新一……」

「判ってるなら、まあいいけどさ」

小さく開いた口から出た言葉は、低く重みのある真剣な声で私の耳に響いたわ。蘭も、彼の顔をじっと見上げてる。まあ、私に横やり入れる隙間はないってわけね。

「で、コナン君の具合はどう？」

聞いたら、また蘭の顔が悲しそうに曇った。

「熱がすごい高くて……もう四日経つのに、全然下がらないの。服部君とお父さんに看病頼んできたんだけど、のんきに学校なんか来てよかったのかな？」

「蘭……でもホラ、おじさまがつきつきりで看病してくれてるんでしょ？ 大丈夫よ！」

「う、うん……そうなんだけど」

元気づけるように明るく高めのトーンで励ましても、納得してない様子の返事が返ってくる。ガキンチョの事も心配でつい聞いちゃったけど、やっぱりこの話題まづかったかな。困っていると、新一君が唐突に前に出て、蘭の肩を両手で包んだ。

「大丈夫だって。アイツ、オメーの事が好きみてーだから、自分のせいでオメーが暗い顔したり、いつまでも学校休んでたらそれこそ気に病んで治るもんも治らなくなっちまうよ」

「で、でも……」

お、新一君……たまにはいい事言うじゃない。私は思わず、新一君のセリフに心の中でグーサインを送った。

「そうだよ蘭。あんたがそんな顔してたら、コナン君も元氣になれないって。明るい蘭の顔見るの、あのガキンチョも望んでると思うよ！」

「う、うん……新一も園子もありがとう。そうだよね、私が不安な顔してたら、コナン君まで不安になっちゃう。家でずっと寝たきりのコナン君の分も楽しい一日にして、お土産話聞かせてあげないかね」

ふっきれたらしい蘭の笑顔と明るい声色に、心底ほっとした。新一君も同じように、さっきより表情がほころんで見える。新一君だって、多分蘭とコナン君の事心配してたって事だよな。

その日一日、蘭は何度か家に電話しながらも、楽しそうに過ごしてたわ。新一君と二人、見てるこっちが妬けるぐらいの仲良しっぷりでね。なーんか、前より新一君の性格が人懐っこくて、けど落ちついてる優等生っぽくなった気がするけど、あやつも少しは成長してたって事かな。

学校が終わる頃。当然新一君と蘭が一緒に帰るだろうと思ってた

私は、蘭に「帰ろう」って誘われて、少し驚いた。なんか新一君が、この後どっかに行く用事があるらしいからって。また事件の捜査にでも行ったのか、蘭もどんな用事かは聞いてないみたいだけど。

「全く、あやつ……すぐ戻るとか言いながら帰って来なかった前科が何度もあるんだから、どっか用事があるなら、蘭に何しに行くのか位伝えておきなさいっての！」

帰りのHR終了と同時に、さっさと荷物をまとめて私らに別れを告げた新一君が教室から出ていく後姿を見送ったのが、つい数分前の事。隣で少し寂しそうな顔をしていた蘭を見て、私はかばんに荷物を詰め込みながら吐き捨てた。蘭は苦笑いしながら、私を宥めるように言う。

「いいよ園子。必ず今日中に帰って来てくれるって、ちゃんと約束したから。教えてくれたら確かに安心出来るけど、幼馴染だからって、そんな事まで縛れないよ」

「でもさ、あやつなんかおかしくない？」

少しだけ声を潜めて、蘭に顔を近付けながら尋ねてみた。なんか、あんまりクラスの皆に聞かれちゃいけない話題な気がしたから。蘭は一瞬だけ眉を寄せて黙りこんでから、にっこりほほ笑んだ。

「……何も、おかしくないよ。昔と一緒に、気障でクールでかっこつけのまま。あ、昔ほどホームズホームズ言わなくなっただけだね」「まあ、あんたがそう言うならそうかもしれないけどさ」

どこか釈然としない気分だったのは、心のどこかで、蘭の笑顔に違和感を感じていたからかもしれない。けど、私はこの時、その違和感に気づく事が出来なかった。

「で？ 新一君とは結局どこまでいってんの？」

「ど、どこまでって！」

「折角帰ってきたんだからさ、キスしたーとかあってもいいんじゃないかと思ってさ」

「そ、そんな事してないわよ！ もー、園子のバカ！」

真っ赤な顔で反論してくる蘭が可愛くて、ついからかいたくなっちゃう。こんなやり取りが、いつまでも変わらないって信じてた。私はまだ、蘭の前で新一君の話が出来なくなる未来がすぐ先に待ち受けているなんて、想像もつかなかったから。

27、ブレイクタイムⅡその時の面々Ⅱ（後書き）

こんばんはー☆

今回もありがとうございます!!

今回はね、後に続く伏線とかをせこせこ盛り込みながらも、ブレイクタイムとして、お楽しみいただけましたでしょうか（^^）

今までののんびりペースは、主に絆の形成がメインだったのですが。次話以降、葉が絡んだり、またあの例の少年について確信的な部分があったり、彼が動きだしたり、黒が動いたり、事件が起きたりと、バタバタ話が動き出しますw
どうかお楽しみ頂ければと思いますーv

つかの間の休息。

園子の部分は若干伏線を滲ませて。

おっちゃんは書きたかっただけですごめんなさいw w w w w w 江戸川を心配するおっちゃんと具合悪い江戸川的な疑似親子好きなのに、今回本筋におっちゃん盛り込むと話がややこしい事になるから入れられなくて。やっとこんな形で書けたなアと^^;

さて。話を動かす以上は、ストックにも余裕持たせておかないと精神的に追い詰められて浮かばなくなるので、この一週間少し頑張ろうと思ってます♪

応援、ヨロシクお願いしますーv

では、次話もまた是非見に来てやって下さいねーv

28、その、葉。

学校も終った帰り道。探偵団達と別れて、哀は探偵事務所へと向かった。歩きながら、彼女は取り出した携帯の着歴から、先程話したばかりの彼に電話をかけた。コールは二回ほどで、あの少しうるさくも感じるトーンの関西弁が耳に響く。

『おー、待ってたで！ もう学校終わったんか？』

「……ええ。今から行こうと思うけど、大丈夫かしら？」

『構へんで。あの工藤みたいな兄ちゃんもおらへんし、おっちゃんもたまに様子見に来るだけで、殆ど事務所の方で仕事しとるから』

あまり周りに聞かれたくはない会話をしているとは思えない声のトーンが、そこに彼しかいない事を暗示する。これから哀が彼らに会いに行くのは、何やら得体の知れない葉を極秘に調べて欲しいという内容だ。そのついでに、コナンの容体も少し診る事にはなるのだが。

「彼、どうなの？」

尋ねると、電話の向こうで一瞬押し黙った彼は、言いにくそうに言葉を長く溜めた。

『あんまり今思わしくないねん。オレが言うより、来たら判るやろ』
「そう。わかった、すぐ行くわ」

電話を切って、よぎる不安に少し歩を早めた。探偵事務所の階段を小走りに昇り、三階のドアノブに手を伸ばす。

あらかじめ、寝ている彼に余計な音を立てないようにと、鍵を開

けておいてもらう約束はしてあった。哀は小さく断ってから、靴を脱いで家に入る。顔を出した平次が手招きするのを、彼女はクールに眺めながらその部屋に歩を進め、そして部屋の中に足を踏み入れた。

真っ先に目に入った布団の中には、赤い顔を汗まみれにして、ぐったりと半開きの口を動かしながら弱い息を吐きだしているコナンの姿がある。

「寝てるみたいね、工藤君。聞いてた通り、熱も高そうだな」

「一時間位前に一旦起きたんやけど……ようやく寝かしつけてん」
「そう。起きてた時に来れたらよかったわね」

答えながら、コナンの枕元に座った哀はそっと額に触れる。手から伝わる彼の体温に思わず眉を寄せながらも、冷やし直した濡れタオルで汗を拭き、額を覆い直す。

じっと哀の手際を眺めていた平次は、頬をかきながら腰をおろし、息を吐く。

「さっきは、まともな会話は出来へんかったと思うで。次に目え覚めても、話せるかわからんし」

「……どうして？」

哀は怪訝な顔で尋ね返す。すると、平次は眠るコナンに視線を向け、じっと眺めながら答えた。

「いや、さっきはな、会話が全然成り立たへんかってん。話しかけて来よっても全然意味分からん事口走っとるし……高熱で朦朧としただけやろうけど、そんな時から熱下がってへんから……」

説明しながら、平次は毛布から出ていたコナンの手首を掴み、布団の中に戻した。そんな様子を眺めながら、哀はコナンの首筋にそっと触れた。熱い皮膚にじっとり纏う汗が、指に触れる。

「そうね。それは熱のせいでしょうけど……食事は摂れてるの？」

数日会わなかっただけに、なんか痩せたみたい」

「それや。こいつめっちゃ食欲ないねん。脱水症状起こさんように、水だけはしっかり摂らせとるけど」

「そう……」

話を聞きながらも、哀は真剣にコナンを診た。当然医者ではないから出来る事に限りはあるが、問診、触診、出来る範囲での診察を施す。――次第に、表情を険しくしながらも。

「……とりあえず、早めに病院で診てもらう事ね。風邪って事はない筈だから」

「もう一人の工藤に、病院は行くなて言われとるからなあ……」

ぼそりと呟いた彼は、心底困った顔で頬をかく。その姿に哀は苛立った。

「じゃああなた、そんなどこの馬の骨かもわからない人の言う事真に受けて、容体が悪化する一方の工藤君をこのままにしておくって言うの？」

自然を口調は荒いだ。彼は尚更困惑した表情を浮かべ、少し勢いに押された様子でのけぞり、答えた。

「せやけど、アイツ言うてたんや。工藤を守るためやて。守りたいんやて。どうしても、あれが嘘には聞こえへんかったから」

「守る？ 工藤君を？ 病院に何があるか知らないけど……その前に死んでしまったら元も子もないじゃない」

「姉ちゃんの言うてる事はオレもその通りやと思うんやけど。工藤も妙にアイツの事信じとるんや。偽物やて一番判つとる筈やのにな」

重たく告げてきた彼の言葉に、哀は若干動揺しながらも眠るコナンを見た。いつだって、哀には計り知れない所に彼の考えがあった。独断で逆らって、よかった事は一度もなかったのだ。

「工藤君が、そう言うなら……でも、このままちゃんとした治療も何もしなければ、必ず限界が来るわ。工藤君の容体がこれ以上変化するようだったら、私に連絡して。その時は、彼がなんて言ってもちゃんとした病院に連れて行って」

哀がすぐるように必死な声で頼むと、平次は静かにうなずいた。そして、彼は哀の前にゆるく握った右手をつきだすと、ゆっくり手のひらを開いた。そこには、二錠の薬がある。

哀は、そのうちの一粒を見て表情を凍らせた。

「これが、姉ちゃんに頼むつもりやった薬や……」

静かな科白に、息をのむ。強い動悸が、哀を襲った。眼を見開いて、口を引きつらせながら、強張った表情でそれを凝視した。そして、そこに伸ばした手は自然と震えていた。

「これを、どこで……？ どう、やって？」

「偽者の工藤が渡してきたんや。調べてくれっちゅうてな」

震える声で尋ねた言葉に、彼からは少し軽めな答えが返ってくる。哀はじっとそのカプセルを見つめた後、眉を寄せながら、恐る恐る

平次を見上げた。そして、彼女はゆっくりと口を開き、呟く。

「やっぱり、私は彼を信じられないわ……」

「何やて？」

聞き返されて、哀は今度は科学者としての凜とした目つきと声で答えた。

「もう一つの方はまだよく判らないけど、小ビンに入ったその薬。それは、私が作った、私と工藤君の身体を小さくした毒薬。組織にしか存在しない筈の幻の薬。――APT X4869よ」

静かだがはっきりと告げた言葉に、向き合う平次は息をのみ、目を見開いた。

28、その、薬。(後書き)

こんばんはーV今回もまたありがとうございますーVV
さて、前回のワンクツションを通りまして。今回からいよいよ伏線回収も混ぜ込んだお話になってきますV
言うなれば、第二部的な感じですよV

気合い入れて書きすすめて行きますので、どうぞ今後も変わらず、応援ヨロシクお願いしますー♪
次話もまた是非ヨロシクですよ！

PS. アニメ苗子ちゃん可愛かったですねー！

29、悲願

「な、何やと！」

彼の口から思わず漏れた短い驚愕の叫びを、哀はクールな表情のまま受け止めた。そして、平次から受け取った薬を目の前にかざしながらまじまじと眺めた。

哀は小ビンの中どころどころ動く薬を、ビンごと胸元で包み込むように抱きしめた。そして、高揚する想いと動悸を深呼吸で無理やり抑えこむ。

「間違えるわけじゃないわ、私が作った薬だもの。何故コレをあなたに渡したのかは分からないけど、少なくとも彼が組織と無関係な人間の可能性は、なくなったわね」

「ほんなら、アイツなんで信頼出来る奴に調べて欲しいなんて言うたんや？ 組織の人間なんやったら、そないな真似せえへんやろ」

「何故かは知らないわ。もしかしたら、本当に薬の研究に行き詰っているのかもしれないし……もしくは私をおびき寄せる罠って可能性だってなくはないもの」

言いながら、哀はもう一方の薬を見て首を傾げた。こちらはまるで見覚えがない。組織が新たに作り出した毒薬なのか、はたまたそれとは関係ない薬なのか。数秒考え込んで、哀は難しい顔をした平次を見上げた。そして、小さく吐息を零す。

「人を信じて好意を抱いた挙句、裏切られて、それが原因で命まで落とす事だってあるのよ。工藤君やあなたが、彼に対して何を思っているかは、私にはわからないけど」

「いや、オレも工藤が何考えとるかまでは判らへんけどな……。ずっと工藤の看病一緒にしてたオレには、工藤への悪意は持ってへんようにしか見えなかったで」

平次の言葉に、哀は表情を若干険しくした。そして、目を伏せて布団に横たわるコナンに視線を移す。最後に博士の家で会話をした時、コナンも平次と同じような煮え切らない事を言っていた。その時はつい危機感がない、と怒鳴ってしまったけれど。

「探偵が二人揃って、甘いのね。ちゃんと判ってる？　どんなにいい人に見えたとしてもそれはただの主観。あまり信じすぎない事よ。はつきりしてる事実は、彼が工藤君に成り済まして近づいてきた事と、組織にしかない筈の薬を持っていた事。それから、工藤君がこんな状態の今、あなたがしつかりしないといけないって事だけなんだから」

「ああ、判つとる。姉ちゃんも油断せんようにな。普段なるべく誰かと一緒に行動するようにした方がええやろ。あと、不自然な変装は逆効果やけど、オシャレの範囲で帽子被ったり、結んだりカチューシャつけたりするだけで変わるんちゃうか？　顔、組織の連中に知られとるんやろ？」

「ええ。そうね、子供の頃はかわいいファッションなんかさせてもらえなかったから、そう言うのも多少は興味あるわ。私の好みとは離れそうだけど、吉田さんに今度コーディネート任せてみようかしら」

冗談めかして小さく笑いながら言った科白だが、平次からは苦笑いが返ってくる。多少むっとした顔でそんな彼を睨んだ哀だったが、肩をすくめるとまた薬を眺めた。

「とにかく、私は言われた通りこの薬を調べるわ。経緯はどうあれ

彼には感謝しなきゃいけないわね。まさかこんな形で、ずっと追求めていた薬が手に入るなんて。解毒剤の試作品のデータも参考に、きつとこれで完全な解毒剤が作れる筈よ」

「せやな」

返事を聞きながら早やる気持ちを落ちつけるように深呼吸をして、哀はコナンへ視線を落とす。ハアハアと苦しそうに口を開けて呼吸する様子を眺めて、哀は目を細めた。

「待ってて、工藤君。もうすぐあなたの悲願を叶えてあげるから。この薬で、必ず……だから、あなたは早く身体を治しなさい。そんな弱ってる身体じゃ、折角解毒剤が完成しても服用させるわけにいかないもの」

眉間にしわを寄せてぐったりと横たわる彼を見つめながら、哀はゆっくりとした口調で囁いた。額に乗せているタオルとは別に用意されている濡れタオルを冷水にたっぷり浸し、きつめに絞った。そして、普段よりかなり赤らんだ顔にじっとりつたう汗を、そっと拭う。

「ん……」

冷えたタオルに若干彼の表情が和らぎ、口から小さな声が漏れた。同時に、彼は何かを探すような仕草で手を宙に彷徨わせる。それが偶然身を乗り出していた平次の腕に触れるなり、コナンは豹変した。

「……う、ぐあ……」

「くど……どうしてんっ!」

平次が顔をしかめる程の力でその腕をきつく握った彼は、呻きな

がら先程よりも呼吸を荒げた。

「ちょっと、どうしたの！ 工藤君？」

歯を軋むほど噛みしめながら、きつく瞑った目頭にしわを寄せる。平次の腕は掴んだまま、空いている左手で胸元をぎゅっと握り、背中を丸めて横たわったまま身体をちぢ込めた。

「げほっ……！ がはっ！ あ……う、あああああーっ！」

のどが裂けるではないかと心配になる程の叫びが、部屋に響く。それと同時に、彼の額から、滝のような汗がどっと噴き出し、頬と顎を伝って布団にしみ込んだ。

「工藤君！ ……工藤君っ？」

「おい、工藤！」

哀や平次が呼びかけても、彼はその言葉に答える事なく、苦しげな呼吸を続けた。そして、口を開いた彼は、絞り出すような声で呟いた。

「……せ、ない……。だ、誰か……。た、すけ……。だ、れか……」

哀と平次は、途切れ途切れの言葉を上手く聞き取れずに、困惑した顔でコナンを見つめた。

「なんて言ったの？ ”誰か、助けて”？」

「工藤らしくない科白やけど、それ以外ないやろな……それやったらその前のはなんて言うたんや？」

二人共に腑に落ちない様子で次の言葉を待ったが、それっきり、コナンの口からはうめき声以外の言葉が発せられる事はなかった。その為、二人は単純に、熱に浮かされて助けを求めたのであろうと、頭の中で片付けたのだ。その本当の意味には、気付く事もなく――ただ必死で、コナンの看病に勤しんだ。

29、悲願（後書き）

こんばんはーV今回もありがとうございますー！

ちょっと今時間がないので、急いで後書きうちこんでますWWW
携帯で投稿出来たらしいけど、慣れない事やると失敗しそうで^^；

苦しむ江戸川と哀ちゃん……そして、見守る平次と、更に彼。
はてさて次回は…♪どうぞお楽しみ下さいませーV

30、見舞われる少年

また、夢を見た。いつもの、睡眠を妨げてくる謎の夢だ。相変わらず、毎回のように夢に出てくるあの少年の顔は見えない。誰なのか、という検討すらもつかないのだが、ただ一つ判る事は、自分が彼を知っているという事実だ。

そして、この夢を見る度確信させられる。自分にとってこれが、凄く大切なものであるという事。判るのは、後味の悪さと、すがりたくなる程心地よい温もり。毎回、少しずつだが鮮明になっていく映像と裏腹に、喪失感に苛まれた。

そこがどこなのか、何をしている所なのか、自分とその少年がなぜそこに居るのか、そしてこれからどうなるのか。考えれば考える程判らなくなってくる。警告してくるように、頭は真っ白になり、頭痛と共に強烈なめまいと吐き気に襲われて、酷い動悸と共に呼吸も思うように出来なくなる。少し前までは頭痛と軽いめまい程度で終わっていたが、熱を出して倒れてからの四日間は何に酷くなった。

「工藤君、大分うなされてたようだけど……ようやく落ち着いたかしら」

「せやな。いつもこんな感じやで。酷い時はこれよりめっちゃうなされとるみたいやし」

「そう……彼、倒れる前もずっと眠だるそうにしてたから。顔色もよくなかったし、もう少しちゃんと気付くべきだったわ」

話し声が聞こえてきて、次第に意識は浮上する。一人は聞きなれた関西弁で、もう一人の方もまた聞きなれたクールな子供の声。

緩慢な動作で瞼を持ち上げる。視界に広がるやたらばやけた世界に、自分が未だ高熱に冒された病人なのだと思い知らされる。もう大分、この鮮明とは程遠い視界にも慣れてきた頃だけれど。

「お。工藤、気がついたみたいやな」

記憶にある関西弁より、少しこわばった声をかけられて、視界を彷徨わせた。

布団のすぐ横、色黒らしい大人の身体と、柔らかそうな茶髪の、小さな子供が座っていた。枕にほど近い場所に座っていた茶髪の影が、ゆらりと揺れた。一瞬驚いたが、その後彼女の小さな手が、撫でるように額に触れた。

「意識が戻っても、熱はまだかなり高いわね」

「服部……と、灰原だよな？」

尋ねると、若干安堵した様子で息を吐きながらも、二人は心配そうに身を乗り出した。

「だよな」って、もしかして見えてないの？」

「いや、目が霞んで……ぼんやり、色とか姿形とかは見えるけど、顔は判別出来ねえみてーだな」

少し緊張した彼女の声にそう答え、コナンは目を閉じた。こんな不鮮明な揺れた視界をいつまでも見ている、酔って気分が悪くなるだけだ。

「音はちゃんと拾えてるみたいね」

「耳鳴りはするけどな……。吃驚したよ、灰原がまさか来ると思わなかったから」

呼吸を整えながら呟き返す。すると、若干不満げな視線で見下ろされた。

「何、意外かしら？」

「ん、だって……大丈夫なのか？ あいつは」

「大丈夫よ、彼今居ないから」

きっぱりそう答えられて、再びコナンはゆっくり目を開けた。視界は回復しないらしい。

「居ないって？」

「何や知らんけど、用事あるんやて。遅くまで帰らへんみたいやで」
「ら、蘭は？」

「ああ、姉ちゃんはそのうち帰って来るやろ。色々買い物してくるらしいで」

帰ってくる関西弁を聞きながら、視線を平次に向けた。そして、また眉を寄せた。目は半分ほどしか開かず、狭い視野の中に居る平次の顔が、きつくぼやけて原型をとどめていない。

「……気持ちわりい」

「何や、大丈夫か？」

「工藤君！」

ぼそっと呟いただけのセリフだが、平次も哀も敏感に反応して身体を乗り出してきた。とりあえず掠れた声で大丈夫だと答えてから、目を瞑った。暫く無言で呼吸を整えていると、遠慮がちに抑えた声が耳に届く。

「工藤君、寝たの？」

「いや……、目開けてると吐き気がやばくて……」

「トイレ連れてったるか？」

「大丈夫。そこまでは……」

「ホンマか？　ほんなら、アカンようになったらすぐ言うんやぞ」
「ああ、悪いな服部……」

答えながら、次第に熱く感じだしたタオルに手を当て、裏返した。だが、間髪いれずに、哀の手にそれを奪い取られた。届く水音にうつすら開けた横目で見た時には、絞ったタオルから桶に水が大量に注がれていた。緩めに絞ったタオルのひやりとした触感が、額を覆う。気持ちがよくて、コナンは長く熱い息を吐きながら、再度ゆくりと目を閉じた。

「冷たくなかったならそう言いなさい。変えてあげるから」

「ん、サンキュ……」

「あら、随分素直じゃない」

「……うっせー」

くすくす笑いながらの彼女の言葉に、コナンは苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべながら、掠れ声で返した。そのからかうような軽い口ぶりが、彼女なりの気遣いである事は理解していた。

「心配かけて、悪いな……」

ぽつりと呟くと、呆れたような溜息が耳に届いた。

「そう思うなら、さっさと身体治すことね。吉田さん達もあなたの事を凄く心配しているわ」

「……明日、会ったら、心配すんなって伝えといてくれねーか？

……だ、大丈夫そうだって」

「とてもそうは見えないけど、判ったわよ。その代わり、それちゃんと本当の話にしてくれる？　復帰するのは一日も早く元気な姿で。」

あの子たちが一発で安心出来る位にね」

薄く眼を開けて、彼女の真剣な表情をのぞき見た。コナンは口元に笑みを作り、小さく首を縦に動かした。

「ああ、約束だ……」

そう囁いた後で、薄らぐ意識に耐えきれず、コナンはまたも目を閉じた。今度はトロンと重い瞼を閉じるように。リズムの崩れた弱い呼吸が口から漏れる。意識はすっかり、闇に落ちた。

そしてまた、暗く落ちた意識の先で、コナンはいつもの少年に出会った。彼はいつもとは少し違う風景の中、少し離れた場所に佇み、悲しげな雰囲気を漂わせていた。

30、見舞われる少年（後書き）

と、言うわけで。この話もついに30話……。

一話辺りの文字数少なくしてるのもあるけど、この段階で30話って言うのは今まで初ですね。

応援して下さいのおかげで、ペースをかえる事なく順調に進められていますV皆さんありがとうございますー！！

前回の話で、初めましてして下さった方が結構いらっちゃって嬉しかったですVよく来て下さる方も、出会ったばかりの方も、もしかしたらこれから話しかけて下さる方も、本当に大感謝です！

あ、メッセ近日中にお返ししますのでー！（微私信w）

勘のいい人は色々と読めて……いるわけないかwまだその時じゃないネwww

でも、次話でまた重要に核心に触れる例の少年が登場するので、次回とその次辺りで、何か勘のいい方は色々な物語の背景とかが見える……かもしれない（^^）

今書いてる所はね、本当に中々難しいながらも書き応えがあるシーンでして。

ずっと宙にぶら下げといった伏線の中にいる人物に登場していただいてる所ですw

いやー、難しい難しい（^ー^；

うん、でも頑張ります！ これからも応援ヨロシクですV

では、次話もまたヨロシクお願いしますー☆

31、叶わなかった想い

まどろみの中には、いつもと違う景色が映った。見覚えならある。よく見ていた、自分の家の天井のようだ。再び目を閉じると、遠くからパタパタと聞こえてきた足音が、次第に近く大きくなり、部屋の戸が開く音が聞こえた。

「倒れたってホント？　また、熱だしちゃったのか？」

優しくかけられた声に、うつすら目を開けた。どうやら自分は今、ベッドの上で寝ているらしい。窓際からの光を背に、顔を覗き込んでくる少年が一人、そこに佇んでいた。逆光のせいか、声をかけてきた彼の顔は見えない。ただ判るのは、彼が幼い少年である——という事実だけ。

彼はそっと、額に手を当ててきた。そして、顔をしかめてため息を零す。

「いつもムチャばかりするよね。からだが強いわけでもないのに、ずっと起きてたり、水に落ちてぬれてずーっとほっぽってたり。だからこんな熱だして倒れちゃうんだよ」

聞き覚えのある声だった。半ば呆れた様子で話しかけてくる彼に、言いたい事は沢山あるのに、吐息に邪魔されて、言葉が紡げない。

「どうした？　早くねないと、熱あがっちゃうよ？」

言いながら、彼はベッドの右隣に膝をつき、その小さな手で胸元の布団を優しくぽんぽんと叩きながら聞き覚えのある子守唄を口ずさんだ。上手い、とも言いが、子供の歌声はまあこんなものだ

ろう。彼の右手に優しく頭をなでられながら、次第に視界は暗くな
った。

次に気がついたら、そこはもうベッドの上ではなかった。前を歩
く自分と同じ位の少年に手を引かれながら、ぼんやりと壁の灯りに
照らされた廊下を、息を殺して歩いている。

ぎゅっと、包み込むように右手を握り締めている彼の手は、少し
震えて汗ばんでいた。それでも、彼は後ろを歩く自分を庇い励ます
ように、ちらちら後ろを気にしては、立ち止まり口元に小さく笑み
を浮かべて、人差し指を立てる。

「こわい？　だいじょうぶだよ。だって、ぼくたち一人じゃないも
ん」

彼は口パクでそう告げて、また小首を傾げながらにこりと笑った。
そして、繋がれた手をそっと持ち上げる。

「二人だから、いっしょだから、なんでもできるよ。こわくないよ」

励ますようにそう口を動かした彼は、繋いだ手に先程よりも力を
込めた。

「がんばろ。きつともうすぐ、帰れるさ」

先程までと違って、最後のセリフだけ、彼はとても小さな声で囁
くように言った。そうだ、思えば彼はずっと、“大丈夫”　怖くな
い”　絶対に守ってあげる”と何度も励ましの言葉を伝えてきた。
自分の手も小さく震えているのに、怖そうなそぶりを全く見せずに。

その背中、まだずっと小さいというのに。

彼はずっと、必死で、自分を守ってくれようとしているのだ。何があっても、守ろうとしているのだ。

その手を、きゅっと握り返す。すると、驚いた様子で振り向いた彼は、顔ははつきり見えないまでも、穏やかに微笑したように見えた。

また、世界は暗く変わった。そして次に目に映ったのは、赤だった。一面緋色に染まった世界。何が起きたのか全く理解できずに、ただただ胸は締め付けられ、頭の中はぐちゃぐちゃにかき乱された。汚れてすすけた手には、黒ずんだ小さな欠片が握られていた。判るのは、それが自分の所有物ではない、と言う事。

「……れか！」

不意に、口から声が出た。先程まで、出そうとしても出せなかった声が。頭の中が真っ白で、何を叫べばいいのか、何を口走っているのかすらわからない。けれど、よろよろと立ちあがり、必死で闇雲に走った。

「だれか！ ……誰か！」

叫ぶ度、喉が裂けそうになった。それでも、歯を食いしばり、血を滲ませながら必死で叫んだ。走る脚はよろけて、転げて、それでも。

「誰か！ 助けて！ 頼むから……誰かあ！」

何から助けて欲しいのか、誰から助けて欲しいのかすらわからない。けれど、理解していない自分とは裏腹に、声だけは自然と出た。

胸を圧迫するのは、恐怖だろうか。今更手遅れなのだと、胸のどこかで思う。何が手遅れなのかも判らないが、ただ、それを納得する事はどうしても出来なかった。

「どうして、どうして……っ！　なんでだよっ！」

再度地面に倒れ込むと、その勢いのまま拳を地面にうちつけた。悔しくて悔しくて仕方がなかった。自分が今そこに居る事も、彼が今ここに居ない事も。

何度も何度も地面に拳をうちつけていると、再び視界は暗くなった。

そして――。

今度は、景色のない白い世界だった。そこに佇み切なく微笑する少年の姿を見つけて、何を考えるより前に少年の元へ駆け寄ろうと身体は動いた。少年に向けて手を伸ばす。だが、彼は片手で距離を取って牽制し、静かに首を振った。

「――！」

彼に思い切り叫びかけようとして口を動かしたが、また声が出せなくなっている事に気づく。なんとか声を出そうと、喉元をおさえ無理やり絞り出そうとするが、どうしてもそれは声にならない。もどかしさに、コナンは下唇を噛みしめた。

31、叶わなかった想い（後書き）

はい、こんばんはー！

30話突破したわけですが、変わらずお読みいただきありがとうございますーV

コメントとか頂いた喜びっただらないですV Vお気に入りとか一人増える時の喜びも！>▽< いつもありがとうございますV

今回は、宙ぶらりんにしてた謎のひとつ、あの夢の中の少年に、もっと詳しく深くスポットライトを当てたお話になりました。

少年が何者なのか、コナンとどういう関係があるのか……そして、この話とどういう関係があるのか。あの工藤新一とは何か関係があるのか。

今回と次回で判る人がいるかも知れませんね。既に薄々推理されてたりしてねW

またお楽しみいただけたら嬉しいな。

次話もどうかヨロシクお願いいたしますーV

32、白い世界の少年

この白い世界に彼が現れたのは、初めてだ。だからやっと会えた彼と会話がしたいのに、けれどそれはどうしても叶わないらしい。悔しがっていると、彼はまた緩やかに微笑んだ。

「ごめん」

唐突に謝られて、わけも分からず彼を見る。彼は一瞬笑みを曇らせ、目を伏せた。

彼は、静かに告げた。

「ぼくは……ずっと、君の心の奥に、ずっと深い所に、隠れてるつもりだったのに」

謝る事なんてない、と伝えたくて、必死で首を振った。少年は距離を保ったままずっと目を細めた。

「だいぶ、沢山思いましたみたいだよな。じゃあ、ぼくが誰なのかも思いました？」

その問いに、困惑しながら首を振る。彼は判っていた事のようにふっと笑った。

「そうだよ。君にぼくの顔が見えてないのは、ここが君の夢の中で、君がまだぼくを思い出せていない証拠。話が出るようになったのも、君が、ぼくの声を思い出したからなんだ。でも……でもね、ぼくは君の、悪夢になんかなりたくなかったよ」

意味が上手く掴めずに首を傾げるが、彼はあくまで具体的な事を告げようとせず、また言葉が続けた。

「悪夢なんて、長くは続かないけど。だから、もうすぐお別れだ。あとどの位会えるか判らないけど……その時が来たら、今度こそ永遠にさよならだよ。でも、君はとても強いから、大丈夫。心配なんてしてないさ」

彼がコナンへと伸ばしかけた手は、途中で躊躇い、止まる。そして、彼はその手を降ろし、また口を開いた。

「ぼくはもうすぐ消えるけど、一つだけ忘れないで。君には、君を想ってくれる人が沢山いることを。悲しませたらダメだよ。その人達の事を」

そこまで告げた彼は、また柔らかい頬笑みを見せた。そして、次第に濃くなっていく霧のような白の中に飲み込まれ、彼の姿は薄らいでゆく。

「なあ……、約束だ。病気なんかは、悪い奴らなんかは、絶対負けないよ」

先程までと違う口調、違う声色。突然変わった彼の雰囲気に驚いている間に、彼は見えなくなった。

コナンの周りは穏やかな白一色に包まれ、彼の居た方に伸ばした手は、何も掴めずに空を切った。その手をぼんやりと数秒見つめたコナンは、次第に頭がぼーとしびれてくるのを感じていた。

コナンは、ゆっくりと目を開けた。ぼんやりとする中で、視界に映る部屋のリアルな天井が、現実に戻って来たのだと自覚させる。驚いたのは、夢を見た後に決まって訪れる後味の悪さが全く無く、今胸がやけにすっきりしている事、だろうか。

首をゆっくり動かして、室内に誰も居ない事を確認し、コナンはゆっくりと身体を起こした。額にあった若干生ぬるい濡れタオルが、パサッと小さな音を立てて布団に落ちる。起き上がった瞬間に、案の定だが頭がぐらつき、目が回るのを感じた。

「あー……やべ。気持ちわりい」

自分の声じゃないような掠れ声に、余計気分が悪くなる。コナンは、汗でじっとりとした前髪をかき上げながら、額に手を当てて俯いた。手のひらも、額も、まだ随分熱を持っているのが判る。だが、酷かった吐き気も大分緩和され、呼吸も少し前と比べるとさほど苦しくもなく、ここ数日と比べるとかなり体調が良くなったように感じた。

額から流れた雫のような汗が、ぽたぽたと顎を這い落ちる。額に手を当てたままそれをぼんやり眺めているうちに、めまいも少し治まった。

「……初めて声が聞けたから、かな」

夢の中の彼に言われた言葉と、彼の柔らかい微笑に、凄く心が楽になった気がした。あの少年は恐らく、ただの夢ではない。彼も、あの途切れ途切れの出来事も、実際に存在した事なのだ。

ふーっと長く息を吐いてから、コナンは重い身体で、ゆっくりと立ちあがった。

「……つと、とと！」

刹那、思ったよりも力の入らなかった足が布団の上でよろける。同時にめまいも起きて、平衡感覚を失った身体は壁際に倒れ込んだ。額を抑えながら倒れ込んだコナンは、咄嗟に空いていた手を壁について身体を支え、俯いたままめまいをやり過ごした。

とりあえず、倒れた先に壁があった事に安堵して、息を吐く。

「やべー……またぶっ倒れる所だったぜ」

呼吸を整えてから、今度こそそつと身体を起こし、手を壁から離す。そして、今度はふらつく足元に意識を集中させながら、注意深く床を踏みしめ、歩いた。部屋から出て、少し覚束ない足取りで廊下を歩き、キッチンで包丁の音を立てる蘭の後姿を見つけて足を止めた。

「蘭……ねえちゃん」

あまり出ない声で話しかけると、彼女は驚いた顔で振り向いた。

「コナン君！ 起きて大丈夫なの？」

蘭は慌てた様子で包丁を置いて、コナンに駆け寄った。しゃがみこみながらコナンの肩に左手を置き、右手でコナンの額を覆った。先程まで料理をしていた彼女の手は、ひんやりと冷たく感じた。

「まだ熱高いじゃない。服部君は？」

「うん……平次兄ちゃん、部屋に居なかったよ。トイレじゃない？」

ハアハアと乱れる呼吸のせいで、彼女の質問に上手くろれつの回らない、はつきりしない発音で返す羽目になった。その場で数回むせ込む。熱がある額から、じわりじわり汗がにじみ出てくるのを感じた。

「わ、酷い汗。ちょっと待ってて」

彼女はポケットから取り出したハンカチで、コナンの顔を拭いた。彼女は心配そうな視線で、コナンをじっと眺めていた。

32、白い世界の少年（後書き）

皆様またもこんばんはー！

今回もご覧いただきまして、ありがとうございます！ 32話は前回に引き続き、謎の少年にスポットライトを当てさせていただきました。

今回で、そろそろ、なんとなーく見当ついてる方もいる……のかなあ？ W W W

それっぽく仕掛けたフェイクにはご用心☆

さて。コ蘭シーンはまた久々でしたね！

次話もまたコ蘭が入り、服部も入り…… W楽しんでいただけたら幸いですー V

やっぱり病気シーン書いてる間が一番生き生きしてる朧月です W W W

では、また次話もヨロシクお願いいたしますー☆

感想なんぞもいつでもお待ちしてまーす V↑

ではまた次話お会いしましょうー！

33、お粥と彼女

「咳もまだ酷いし、あんまり無理しちゃだめよ。具合どうなの？」

「大丈夫。熱のせいでくらくらするけど、気分は大分いいんだ」

「本当に？」

眉を寄せ、今にも泣きそうな表情で確認してくる彼女に、コナンはまた小さく頷いた。蘭の頬に触れ、目を丸くした彼女に柔らかく微笑しながら、もう一度言った。

「うん。心配かけてごめんね？　ボク、なんかお腹空いちゃって…

…」

「え？」

聞き返してきた蘭の目が大きく見開かれて、そこにじわじわ涙が溜まるのをぼーっと眺めた。

「ら、蘭…姉ちゃん？」

困惑しながら問いかけると、彼女は慌てて涙をぬぐった。

「ご、ごめんね。そんな科白聞いたの凄く久しぶりだから嬉しくて。今お粥用意してたの。すぐ仕上げるから待っててね！」

「うん、ありがとう……」

急いでキッチンに戻る彼女の背中を眺めながら、コナンは緩やかに微笑した。そして、フラフラしながらも、テーブル前に腰かける。そして、まだだるい身体を誤魔化すように、額を抑えながらテーブルに肘をつき、頭を支えた。

「なんや工藤、ここに居ったんか」

声をかけられて、顔を上げた。振り向くと、真横でポケットに手を突っ込んだまま、身体をかがめて覗いて来る色黒の彼が居る。目が合うと、彼は半目を作った。

「間の悪い奴やなあ。人がトイレでほんの少し席はずしとる間に、目え覚まして勝手に動き回っとるやなんて」

「……ああ。悪いな」

短く答えてから、コナンは気だるげにテーブルの上に突っ伏した。そして、自分の腕を枕代わりに、首だけ平次の方へ向ける。そんな仕草を見せた為か、見下ろす彼は目を細めて膝を下ろしてきた。

「工藤、大丈夫か？」

「あ、ああ。少しだるいだけだから気にすんな」

言い終えると、ケホケホと咳がもれた。そして、長い息を吐き出す。

「しんどそうやな。——まだ熱高いやろ。何で起きてきてん？」

「別に……目覚めたら大分気分よかったし、腹減ったけど誰も居なかったから」

すると、平次もまた目を丸くして、驚いた表情を見せた。

「腹減ったて、お前食えるんか？」

「口に入れるまでわからねーけど、多分……今蘭が、仕上げて来てくれるって……」

ちょうど言い終えたタイミングで、食器棚が開く音と、器やれんげが出されたであろう音が耳に届いた。コナンはゆっくりと身体を起こす。程なく、蘭がお粥の入った土鍋とれんげ、小さな器と、水の注がれたコップを角盆に乗せて、台所から顔を見せた。

「出来たよ、コナン君！　どれだけ食べれるか分からないから、少しずつ器にとって食べてね」

「う、うん……ありがとう」

掠れた声で返事をする、彼女はテーブルにつき、湯気の立つ土鍋から控えめに柔らかめのお粥を器に盛った。そして、れんげでそれを軽く混ぜ、一掬いして、そこに優しく息を吹きかける。真剣な様子でお粥を冷まそうとする彼女の姿に、熱が少し上がったかもしれない。ぼーとしながら眺めていると、口元にれんげが差し出された。

「はい！　コナン君口あけて。一応冷ましたけど、ゆっくり気をつけて食べてね」

優しくそう言われて、コナンは小さく頷いた。開口して身を寄せると、れんげの中の適温になったお粥を、緩慢な動きで口に含んだ。普段よりも多く、慎重に咀嚼した。そして、ゆっくりと飲み込む。

平次や蘭の、反応を覗くように緊張した視線を一点に受けながら、余程心配をかけていたようだとな得した。コナンが小さく息をつくと、二人は顔を覗き込むように近づいて、恐る恐る声をかけてきた。

「ど、どや？　ボウズ」

「気持ち悪くない？　もう少し食べれそう？」

尋ねてくる彼らの言葉に、コナンはふっと緩やかに口角を上げた。そして、小さな器を蘭に差し出しながら、明るめの声で答えた。

「大丈夫。おいしかったよ、蘭姉ちゃん。おかわり、ちょうだい」

二人は心底ほっとした様子で息を吐き、表情を緩めた。器を受け取った蘭は、そこに半分ほどお粥を盛って、そしてもう一度れんげでそれを掬おうとしたが、耳まで赤面したコナンはその腕をとらえて、目を逸らす。

「じ、自分で食べれるから……」

一瞬きよとした表情でコナンを見つめた蘭だが、数回の瞬きの後に、れんげを器に置いた。そして、それをそっとコナンに手渡す。

「火傷しないように気をつけてね」

「う、うん」

受け取って、れんげでお粥を掬ったコナンに、隣からやけにニヤけた視線が見下ろした。視線の主はコナンの肩を軽く小突く。

「せーっかく大好きな姉ちゃんにフーフーあーんしてもらってるのに、断ってしてもええんかー？　顔真っ赤にしよって。照れ屋さんやなあ、コナン君？」

「う、うっせーな……！　顔が赤いのは熱のせいだよ！」

「おー、もっと赤くなりよった。熱上がってしもたんとちゃうか？」

「は、服部……！　てめえいい加減……に……ゲホガホゴホッ！」

興奮して声を荒げたせい、少し激しくせき込んだ。向かいに座

る蘭は驚いて身を乗り出し、横に居た平次の手がコナンの背中をさすった。

「だ、大丈夫か？　ボウズ」

「もう！　コナン君病人なんだからあんまりからかわないで、服部君！」

「ス、スマンスマン」

心底申し訳なそうに声をかけてきた平次に、蘭は少し強めに説教をした。苦笑いしながら謝る声を聞きながら息を整えていると、蘭は先程よりも少し抑えた口調で言った。

「コナン君も。年上のお兄さん相手に、”服部”とか”うっせー”とか”てめえ”とか、具合悪くても言葉遣いは気をつけないとダメよ」

「ど、ごめんなさ……ゲホッ」

謝りながらも、コナンは平次を不満げに睨んだ。実際、とんだとばっちりだ。睨まれた平次は、苦笑しながらも再度「スマン」と小さく謝った。

33、お粥と彼女（後書き）

こんばんはー！　今回もまたありがとうございます！！

サブタイトル、今のにしようか、嵐の前の静けさにしようか、つかの間の平穏にしようか迷って悩んだりもした……って位なお話ですW
結局、ここではまだ何も起きていないので、このサブタイトルになりましたがW

上でも言った通り……次話、正式には次の次辺りから、姿を見せないままだった彼がでてきます。

彼が動く時は話が動く時——です。うん、伏線張ったり回収したり、頑張ります！　ええ。

では、また次回もどうかヨロシクお願いいたしますー（＊＾|＾＊）

34、帰らぬ彼と、響く音色と

随分のんびり食べていた。暫く経つと、先程までお粥が入っていた茶碗は、空になってテーブルの上に置かれていた。れんげも役目を置いてその茶碗に入れられ、蘭は用済みの土鍋をキッチンへ持つていった。少し弱った声でごちそうさまと告げた後、コナンは息を吐き出しながらテーブルに上半身を預けた。頬も赤く、目をトロントさせたコナンの顔を、隣に居た平次は困惑した様子で覗きこむ。

「工藤、大丈夫なんか？」

視線を平次に向けたコナンは、小さく頷いた。だが、頷いた勢いのまま、テーブルの上に置いた腕に、ぐったりと顔をうずめた。そして、丸めた背中を上下させながら、ケホケホとせき込んだ。

「お、おい工藤！ また気持ち悪くなってしもたんか？」

平次は若干慌てながらも、コナンの背中に手を添えて、視線を合わせるようにしゃがみこんだ。キッチンから戻って来た蘭も、今度に残った茶碗類を片づけながら、心配そうにコナンを眺めた。

「大丈夫？ コナン君」

蘭の声にも、コナンは小さく頷いた。そして、再びキッチンへ向かう蘭の足音が小さくなるのを確認してから、コナンは首を横にして隣の平次を一瞥し、答える。

「……吐き気はねーよ。ただ、久しぶりに起きて少し疲れたただけだ……頭がくらくらして……」

「また熱上がってきたんとちゃうか？　布団に戻った方がええやろ」

平次の言葉に、コナンはけだるげに身体を起こした。朦朧としたまま、自分の額に手を当てる。そして、眉間にしわを寄せながら再度息を吐いた。

「それでもねえよ……最初から、こんなもんだっただろ。……それより、アイツは？」

「ん？」

「偽者」

聞き返した平次に短く答えてやると、平次は「ああ、」と逡巡してから、部屋の時計を見やった。時計の針は、十一時十五分と言った所だろうか。これほど深夜になるなら、連絡の一つも入れていいのではないかと思う。

「確かに、遅いみたいやな」

平次がぼつりと呟くと、キッチンから再び戻って来た蘭は足を止め、首を傾げた。

「新一の話？」

「せや、姉ちゃんにはなんか連絡あったんか？」

立ちあがりながら応えた平次に、蘭はゆっくり首を振って、若干不安げな表情を見せた。

「新一、事件か何かにでも巻き込まれてるのかな……」

言いながら、ポケットの携帯電話を取り出した蘭を見て、コナン

はびくりと肩を震わせた。

「ら、蘭姉ちゃん、どこに電話する気？」

慌てているせいか、若干呼吸が上ずった。だが、蘭はきょとんとした顔でコナンを見やると、携帯電話を操作しながら答えた。

「新一の携帯よ。あ、そう言えば新しい番号に電話かけるのは初めてかも」

「あ、新しい番号……？」

「うん、携帯変わったみたいだから。携帯変えた時点で教えなさいよねえ、もう」

蘭のアドレス帳が既にすり替わっているらしい事に微かな苛立ちを覚えながら、文句を言いながら携帯電話を耳に当てる蘭を眺めた。それから、数秒、十数秒、数十秒と、蘭は無言のまま携帯を耳に当てていた。

「繋がらないなあ……」

ため息まじりに呟いた蘭は、時計を見つめて携帯を閉じ、それをじっと見つめた。そんな蘭を一瞥した平次は、さばさばした笑顔を浮かべ、軽い口調で言った。

「まあ、そない心配すんなて。工藤は姉ちゃんの所に必ず帰ってくるから。せやろ？ コナン君」

「え、……あ、ああ」

話を振られてとりあえず頷いた。見下ろしてくる平次が軽くウィンクしたのを見ながら、セリフの本当の意味に気づく。

蘭は複雑そうな笑みを見せながらも頷き、携帯電話をポケットにしまい直した。

「なんかで手が離せないのかも。電源切ってはいないみたいだし、出るだけ出てくれてもいいのね。もうちょつと経ったらまた電話してみるね」

「う、うん……」

曖昧な返事をした後、コナンは再びテーブルに頭を乗せた。蘭が声をかけようとした刹那、突然ドアが開かれた。全員玄関を見やったが、そこから顔を出したのは小五郎だった。きょとんとした顔を浮かべながら歩み寄ってくる小五郎に、脱力感に包まれた残念な空気が流れた。

「お、おかえりなさい、お父さん」

「おう」

「おっちゃん、随分遅かったけど、依頼でも入ったんか？」

「ああ……ただの猫探しの依頼だがな。それよりコナンはどうした？」

うっとうしそうに答えた小五郎は、背中を丸めながらテーブルに突っ伏したコナンと目が合うなり、目を丸くした。

「お、起きてんじゃねーか。どうした、熱下がったのか？」

「あ、うん。久しぶりだね、おじさん……」

吐息を乱しながら小五郎に話しかけた。思えば倒れてから数日、殆ど寝込んでいる時間が多いせいで、久しぶりに顔を見た気がした。コナンの前まで来た小五郎は、膝を折ってしゃがみこむ。

「見た感じまだありそうだがな」

言いながら、小五郎の手はコナンの額を覆った。骨ばっている手だが、その抱擁感に一瞬意識が緩む。数秒、小五郎は次第に眉を寄せて険しい顔を浮かべた。

「まだスゲー熱いじゃねえか！」

「平気だよ、大分気分良くなったから」

「そうそう、コナン君さっき久しぶりにお粥いっぱい食べてくれたの」

コナンが答えると、蘭が間髪いれずに重ねた。小五郎は口をとがらせながらジト目でコナンに顔を近づけた。まじまじ眺めてくる視線に若干たじろいだところで、小五郎は再度口を開く。

「で？　気分悪くなってねーのか？」

「うん、大丈夫……」

答えると、再度様子を窺うように顔を近づけてまじまじと見つめてきた小五郎は、ふっと息を吐き、気の抜けた表情を浮かべる。

「よかったな。んじゃあ病人はさっさと寝ろ！　もっと熱あがっちゃうぞ」

ぐい、と腕を持ち上げられて、多少乱暴に立たされた。ふらついて歩けそうにないコナンは、平次に託されて半ば強引に部屋へ帰された。

その後、再度額をタオルで冷やされながら眠りに落ちたコナンは、知る由もなかった。

それから何回かけても新一と電話が繋がる事がなく、結局その日、彼が家に帰る事がなかった、という事などは――。

T R R R R …… T R R R R ……

深夜の暗闇で、携帯電話の着信音が、むなしく静寂をぶち壊していた。その音は、人通りのない裏路地で、何度も何度も、冷たく寂しく鳴り響いた――。

34、帰らぬ彼と、響く音色と（後書き）

えー、今回もまたご覧いただきましてありがとうございますーV

サブタイちよつと変えた関係で、パソコン前でちよつぱり悩んじやいましたW

実はね、本当は明日から軽井沢にキャンプに行く予定でね。きゃーんぷきゃんぷ♪ってルンルンしてたのですが、全くもって空気読めないおバカな台風のせいで中止になってしまったりして。

もしキャンプだったら寝る時間もあるから投稿どうなるかなーと思っただけど、いつもとなんら変わらない時間に投稿させていただけました！

ここ一週間程、ちよつぱりPCの機嫌が悪くて、ストックはまだまだ余裕があるものの少し不安だったりします（へーへ；
他の連載で長期停止するきっかけになったのが、PCクラッシュが一番大きな引き金だったので……なんとかなってくれるように皆様の祈りパワーをお願いします＞＜

さて、というわけで今回の話。あの幕間からずーっと姿を見せなかった工藤新一君が、やっとここで話題にのぼったというわけで。

彼の正体に悩まされたり、彼を気に入ってくれてる方々お待たせしましたーW

次回から少しの間だけ、たっぷりと彼の情報をお見せできるかと思っていますので、お楽しみください♪

では、また次話でもヨロシクお願いいたしますー！！

35、ギムレット

――深夜。

狭いアスファルトの道を、一人の男が歩いていた。全身ぐっしりと濡れた身体から、雫を滴らせながら。

壁伝いに、引きずっている片足をたまに休ませ、彼は左腕上腕部を抑えながら、安定しない足取りで一步一步と進む。左腕を抑えた手の下から、赤黒い液体が流れるようにその制服の色を変えていく。それは誰が見ても、一発で血液だと判るだろう。

明るめな青紫の制服には所々掠れたように破けた後があり、彼の身体の怪我也また、一つではないらしい。更にワイシャツも、ネクタイも、無事な右肩に背負っているかばんもボロボロに乱れていて、普通なら道行く人に心配されて声の一つもかけられるような景色である。だが、彼に声をかけようとする人は一人もいなかった。

歩を進める彼の表情は、とても近寄りがたいものだった。眉間にしわを寄せ、俯いた髪の毛が作った影の下から前方をきつく睨む目は、鬼気迫るものだ。きつく噛みしめた口元もまた、迫力を感じさせる。それはさしずめ”けが人”ではなく”手負いの獣”という言葉葉が、何より相応しい。

引きずっていた脚がもう片方の脚ともつれて、彼は大きくよろめいた。咄嗟に壁に当たった手でバランスを保った彼は、小さく舌打ちをして背中越しに壁に凭れた。

「……く、そ！」

悔しげな科白は、僅かに掠れて口から漏れた。彼は再び奥歯を噛みしめ、右手で作った拳で後ろの壁を強く叩いた。ドン、という音が彼の耳元に響く。彼はそのまま目をきつく瞑り、暫しそこで、先

程までの出来ごとに思いを馳せていた。

数時間前まで、彼は確かに日常の中に居た。

学校で、幼馴染の蘭と園子に別れを告げ、顔を合わせたクラスメイト達にも「またな」と告げて学校を出た。そして、目当ての場所へ向かったのだ。

出来る事ならもう少し、と何度思った事か。あのまま、彼女がいる場所で、弟のような彼がいる場所で、居られたら幸せだった事だろう。だが、のんびりしているわけにはいかなかった。守りたい少年の病状は深刻で、これ以上長く医者に行けない状況が続けるわけにいなかった。

あの薬を託した以上、じきに別れは訪れるだろう。けど、それでもはじめをつけなければならなかった。自分の事と、彼らの事に。そして、今度こそ守りきって別れる。彼は、固く決意していた。

向かった場所で何があってもいいようにと懷に拳銃を忍ばせながら、手には白い手袋をはめる。

「必ず助けてやる。だから……待ってろよ、コナン」

さびれたとある研究室の中に、彼は足を踏み入れた。そして、音を立てないようにゆっくりと歩く。息を殺し、注意深く辺りを覗いながら、彼は三階まで階段を昇り、一つの戸の前に立ち止まる。彼はそっとドアノブに手をかけ、静かにドアを開く。身体を隠しながら、彼はドア越しに中を覗いた。部屋の中には、誰も居ないらしい。彼は詰めていた息を小さく吐き出し、ゆっくりと部屋に入って、ド

アを閉めた。

大きさとして四畳半程の、決して広くはない室内だ。床はタイルで、小さな換気窓がポツンとある以外は、古ぼけて少し黒ずんだ白い壁に覆われている殺風景な一室だった。奥側には、ぎっしり難しいタイトルの本が置かれた大きめの本棚があり、中央の壁に密接した机と、タイヤ付の使いこまれた椅子がある。机の本棚には数冊のファイルと、医学的な専門書がたてられていた。彼はまず、その机に歩み寄った。

机の本棚よりも先に、その机に置かれたままの黒いファイルに手を伸ばす。外の音に気を使いながら、彼はファイルを手に取ると、ページをめくった。そして、真剣な眼差しには怒りが宿り、閉じていた口を横に開いた彼は、きつく歯を噛みしめた。

「カルテ……と、資料。やっぱりか」

小さく呟いて舌打ちしたが、ページをめくる手が途中で止まると、彼は瞳を揺らして息を飲んだ。

ファイルに閉じられた十数枚にも渡る資料には、コナンの事が細かく記されていた。動揺せずにはいられない内容も全て。

とにかく今は急がなければ、と震える手を抑えながら、唇を噛みしめてなんとか正気を保つ。持っていたバッグにその資料をしまいこみ、隣に置かれたノートパソコンに手を伸ばした。電源を入れて、明るい光を浴びながら、起動する画面をじっと眺めた。画面中央で、ユーザー名とパスワード入力の手指示がなされる。

「パスワードか……」

小さく呟くと、彼は顎に手を当てて俯いた。数秒考えた後で、思い浮かぶ文字を入力した。Enterキーを押すと、パスワードは

無事認証されたらしい。タッチパッドにそっと触れた彼は、左上に小さくあるフォルダにカーソルを合わせ、指を二度叩く。出てきた画面に目を細めながらも、彼はポケットの中からUSBメモリを取り出した。メモリをパソコンに差し込むと、フォルダ内のデータをそこに移す。データのコピーが進む間も、くまなく辺りを探った。机の上に置かれた数々のファイル、そして、奥の本棚。

本棚に並んだ本のタイトルを追ううちに、彼は不意に手を止める。そして、ドアの方を見やり、慌ててパソコンの前へと戻った。

先程までなかった人の気配と足音が、近付いて来るのが分かる。

画面に映し出される数字が”99%”、そして”100%”に切り替わると同時に、彼はメモリを引きぬいてパソコンを閉じた。そして、左手にそれを隠したまま、ドアが開く音と共に、そちらを振り向いた。

そこに立っていた白衣の男は、静かに、不気味に口角を持ち上げた。そして、男は左手の中指で、その黒ぶちの眼鏡を持ち上げた。不敵な笑みを浮かべながらも、彼は口を開き低い声でゆっくりと囁く。

「やあ。久しぶりの再会だというのに、どうしてそんな顔をしているんだい？」 工藤、新一”君」

新一の額から、一筋の汗が流れた。眉間にしわを寄せて一歩後ずさりながら、動悸が激しくなるのを無理やり抑え込むように、小さく深呼吸をして口元に笑みを作る。

「久しぶりだな、先生……いや、ギムレット」

答えた言葉に、男は一層笑みを深くした。

35、ギムレット（後書き）

皆様こんばんはーV

今回もおよみいただきありがとうございますーVVV

そして、今日は9月10日。ハッピー910！WWW

自サイトでも工藤の日祭りしてますので、もしよければ遊びにいらして下さいV

祭りつつつてもイラスト一枚……べびーちびノーマルな工藤三人ですが^^

そんな中、ちょうど話が工藤新一君主体に移り変わった一話というわけで。なんてタイミング！偶然って素晴らしいWWW

もちろん、コニヤにもまだまだ沢山活躍していただきますよーV江戸川命な方は、ほんの少しだけお待ち下さいませVすぐひよっこり出てきますW

今回からの展開。

書いててテンションはあがるものの難しいですねWWW
空間認識力に乏しいせいか、どうも立体的な建物や景色のイメージがうまく作り出せなくて。こんなシーン書いてる時は、毎回判るように表現出来るかどうか不安で仕方ないのですがWWW
でもさっき言った通り、テンションは上がるのでW頑張ってお見せしますねV

では、次回もまたヨロシクお願いしますー♪

36、残酷な銃口

ギムレット、と呼ばれた白衣の男は、静かな威圧感を漂わせながら新一に一步踏み寄った。

新一は下唇を噛みしめ、一步後ずさりながら胸元に右手を押し当てた。忍ばせた拳銃のごつごつした触感を感じながら、左手のメモリをきつく握り直す。

ギムレットは、無言のまま再び眼鏡を中指で持ち上げる。そして、その流れのまま、すっと新一の前に手の平を差し出した。

「君が今持ち出そうとしているその資料は、大切なものなんだ。返してくれるかな？」

「……資料？ んなもんは知らねーよ」

とりあえずとぼけてみるが、この状況でそれが通じるわけがなかった。ギムレットはすうと目を細め、小さく嘲笑した。

「聡明な君らしくないな。大体何の真似だ？ それを盗み出して、君に何か利点でもあるのか？」

淡々とした口調で告げる男に、新一もまた目を細めた。そしてバッグを守るように左手で抑えながら、口を開く。

「オレには、知る権利があるだろ？ 自分のやってる事の意味を。説明してみろよ。あそこに書かれてた江戸川コナンってボウズ……こいつは何者なんだ！」

「私が一度診た事がある患者、だが？」

返ってきた答えに、新一は眉を寄せた。そしてギムレットを睨み、

歯を軋ませながら、鞆の中から黒いファイルを引き出す。

「とぼけんなよ！」

少々乱暴に言いながら、新一はファイルのページを開いた。中の資料を男の前に広げて、それを思い切り叩く。

「ここに！　ここに、書いてある事は何なんだ。江戸川コナンと工藤新一が同一人物だと？」

怒鳴りつける新一に、ギムレットは冷たく怪しい笑みを浮かべる。

「ああ、既に読んだか」

「答えるよ。なあ、ギムレット！」

そのはっきりしない態度に苛立ちを隠せず追及する。しばし黙り込んだギムレットは、喉の奥からクククツと嘲笑うように声を漏らした。そして次第にその嘲笑は高笑いに変わる。その態度に、更に新一の表情は険しく変わる。眉間にしわを寄せたまま、ギムレットを強く睨んだ。

高笑いがぴたりとやみ、一瞬だけ室内に静寂が訪れた。

「そうさ」

低い声が告げた言葉に意味は、最初よく理解出来なかった。もう一度聞き返すと、ギムレットは更にはっきりとした声で答えた。

「事実だと言ったんだ。そこに書いてある事に全て相違ない」

「……コナンは子供だ。工藤新一は十七歳だろう、アイツのわけがない！」

「A P T X 4 8 6 9 ……」

ぽつりと呟かれた言葉に、新一は息をのんだ。薬の名前は知っている。何しろ、自分が盗み出してきて、平次に託したばかりの薬だ。そんな新一の様子を一瞥しながら、ギムレットは言葉を続けた。

「あの薬には、稀に服用した者の細胞を幼児化させる奇怪な副作用が確認されていてね。まあ、本当に極々稀なケースではあるが、実際私もこの目で確認しているから間違いない。そして、江戸川コナンこそがその成功体。工藤新一が幼児化した姿そのもののさ」

話を聞きながら、新一は動揺を隠しきれずに唇を震わせ、俯いた。そして、降ろした拳をきつく握る。

「うそだ……嘘だ！　だって、あいつは――！」

否定しかけて、はっと口をつぐんだ。出会ってから、今に至るまでの彼とのやり取りを思い返す。

確かにコナンは、どういうわけか唯一最後まで、工藤新一である事を疑ってきた。蘭ですら、疑う余地もなく信じてくれて居たというのに。そして、子供とは思えない言動の数々……。病気で弱っていたから、倒れてからは殆ど朦朧とした応対しかなかったが、思い起こせば全て、彼自身が工藤新一だとすれば納得がいく。だが、そうだとするならば――。

「じゃあ、じゃあオレは……オレは……っ！」

張りつめた表情を隠しきれないまま、ぱっと顔を上げた。目の前の男は、腰に手を当てながら、冷静な様子で薄っすらと笑みを浮かべている。

「当然ながら、同じ人間は二人もこの世に存在するわけではない。そうだろうか？」

「どうして……」

「余計な事実に気づかなければ、我々に牙をむこうとさえしなれば、君も苦しむ事はなかっただろうがな」

言いながら、ギムレットはいつの間に手にしていた拳銃を、新一へと向けた。動揺した心を落ちつける事も出来ないまま、新一は目を見開いて、呆然とその銃口を見つめた。

「なん、の、真似……だよ？」

震える声で尋ねる。ギムレットは口角を持ち上げながら、新一と対峙した。そして、顎を若干突き上げて、見下すような視線で言った。

「誤解しないでくれよ、君は私にとっては大事な息子も同然。愛しているさ……」

「……へえ、息子ね。息子に銃を向けるのか、あんたは」

対応しようにも、混乱して真っ白な頭では、即座に対応策が思い浮かばない。とりあえずの時間稼ぎにもならない返答をすると、ギムレットの顔は妖しく歪む。

「仕方がないだろう？ 君に裏切られては困るんだ。だから君は、私達の手から離れる前に、私の手で葬ってやろう」

撃鉄がゆっくり下ろされるのを、じっと眺めた。そして、新一はゆっくりと目を瞑り、息を吐き出す。そして、静かに開眼した。

「どうした、覚悟を決めたか？」

尋ねられた言葉に、新一はふっと微笑する。

「殺すなら、教えてくれてもいいよな？」

「何をだ？ と聞かなくても君の知りたい事なら判るがね……いいだろう、聞いてみる」

新一は下唇を噛みしめて、ゆっくり数秒の間を置いて口を開いた。

「あいつが工藤新一だって言うのなら、オレは一体、誰なんだ？」

言葉が、部屋に溶けて消えるのを感じながらも、新一はじつと銃口の向こう側のギムレットの目を見つめていた。
聞かされる真実を、逃す事がないように。

36、残酷な銃口（後書き）

えー、皆さんこんにちはV

今回もご覧いただき、ありがとうございました！

36話、残酷な銃口のお届けです。

あー……楽しいねえ。こう、こういう展開書くのホント大好きだよ。今回やつと工藤新一君のこのセリフを出せました、とW

鋭い脳みそをフル回転させてる方も、純粹に深く考えずに楽しんで下さってる方も、ギムレットとのやり取りになると、工藤新一君の核心に触れる部分になりますので、楽しんでいただけるかなーそう
だといいなーと^^

でね、前回すっかり忘れてたんだけど、新OPのMisty Mystery。あの歌がねー、ホント図々しいのですが、偶然にも歌詞とか一部の画像とか、この小説にぴったりでかなりテンションあがってますvvv

もし、BGMかけて小説読むのが好きな方が居たら、Misty Mysteryはぴったりでおススメですよwww

まあ、うん。そんな感じでW

では、次回もどうかヨロシクお願いいたしますー（*^|^*）

37、もちかけられた条件

最初は、なんの疑いもなく懐いて、父親のように慕っていた。自分の中では、彼以外に頼る人もいなかったし、その閉鎖された世界が全てで、そこが自分の常識だった。

彼は、なんでも教えてくれた。学校で学ぶような勉学の全てを。彼は、なんでも与えてくれた。難しい蔵書、栄養管理された完璧な食事、身近なものの使い方も全て。

知識欲はどういうわけか人並み外れていて、頭の回転も相当いい方だったらしい。普通なら十六年をかけて積み込むような知識量を、ほんのひと月足らずで習得した。

運動神経も、元からよかったらしい。興味を持ったスポーツには何でも取り組ませてくれたものだが、一番のめり込む事になるサッカーに出会ってから、特に他のものに取り組む事はなかった。

不自由した事も、退屈した事もなかった。たった一つ、どうしても教えようとはしてくれなかった事を除けば。

白いベッドに腰かけたまま、ふう、と息をついて読んでいた本をたたんだ。茶色く、小さな文庫本だ。背表紙には、”四つの署名”と書かれている。

「やっぱりいいな、何度読んでもホームズは！」

にっと笑ってそう呟き、本棚をちらりと見やる。そして、次に何を讀もうか逡巡しながら、人差し指で右から左に背表紙をなぞった。既にこの本棚にあるものは読み終えてしまった。狭い部屋だが、い

らない本はいったん別場所に保管してもらって、そろそろ新しい本との出会いを探そう。そんな事を考えながら、とある本でぴたりと手を止めた。

「……そーいや、新刊がもうすぐ出るんだったよな。闇の男爵シリズ」

新刊の内容を妄想して、こらえきれずに歯を出して笑う。楽しみが尽きる事などない。その生活には、とても満足していた。

不意に時計を見ると、その示された時間に顔をしかめた。もうじき分厚く肩がこるような難しい内容の授業を受ける羽目になる。最初のうちはそんなものでも目を輝かせたものだが、近頃では少し面倒な時間になってしまった。

「……時間まで、身体でも動かしてリフレッシュすつか!」

呟き、サッカーボールを持ち出して、靴を履いてから部屋を出る。廊下を歩いてすぐの場所にある、何もない広い部屋へ入り、そこでボールを壁に思い切り蹴飛ばした。足に返ってくるボールを何度も蹴り返しながら、気持ちは自然と高揚した。表情もまた、自然と明るく変わってくる。

突然、戸が開く音が後ろから聞こえて、はっとして振り向く。そこには白衣を着た馴染みの男が立っていた。その姿に、思わず人懐こい笑みが顔に浮かんだ。

「あ、先生! おかえり!」

「ああ、ただいま。君は本当にサッカーが気に入っているんだな」
「まあな。なんか、運命みてーなもん感じるんだ。ボール蹴ってる、落ちつくっつーか……自分だけの世界に浸れるっつーかさ!」

心底楽しく明るい声で答える自分とは対照的に、白衣の男は冷静なまま眼鏡を直す。

「そうか。だが、時間を守れないのは関心しないな」

言いながら、男は腕時計をトントンと指でたたく。その様子に、慌てて答えた。

「え、やべっ！　もうそんな時間か！　わあったよ、すぐ行くからさ」

そう答えて着ていたTシャツで顔の汗を拭うと、急いでボールを手を持ち、部屋へと走った。そしてそこでまた、難易度の高い授業が始まる。唯一の救いは、それを教えてくれるのが、信賴していた先生だったという事だろうか。

記憶にある自分の日常というのは、そんなものだった。

当時そこまで慕っていた筈の男が、今自分に銃口を向けている。そして自分もまた、彼を裏切って、ここに立っている。不敵に笑う彼は、引き金を引く事になんのためらいも感じてはいない。

「なあ、ギムレット。オレと過ごした時間……そのほんの僅かにで

も真実があったなら、教えろよ。オレは一体誰なんだ？」

目前で、ギムレットは心底滑稽なものを見るように、笑う。喉の奥から、こらえきれないという様子で。

「心配するな。君は工藤新一だよ。誰がどう見ても、な」
「そんな事を聞いているんじゃない！」

怒鳴り声をあげた新一は、その反動で息を切らした。欲しいのは外見とは違う真実だ。だが、ギムレットは冷静なまま、再び一步足を踏み出してくる。

「君次第で、チャンスをやらない事もないんだ」

ぼつり、呟かれた言葉に、新一は表情を張り詰めた。

「ショックだろう。信じていた大きなものを覆された気分というのは。だが断言しよう。お前も工藤新一である事には変わりはない」
「何？」

「それでも、世の中は同じ人間が二人いる事実など認めてはくれないがな。つまり、江戸川コナンさえ居なくなれば、君が工藤新一である事実はゆるぎなくなる。その資料を返して、彼を組織に連れて来い。そうすれば君は自由だ。彼の事は、組織が責任もって全くの別人に変えてやろう」

話を聞きながら、新一は眉を寄せ、下唇を噛みしめた。持っている鞆を、ぎゅっと自分の方へ引き寄せる。額に浮かんだ汗が、つーっと頬を伝うのを感じた。黒い銃口と、冷静で残酷なギムレットの顔と、苦勞して手に入れた資料を見比べながら、早まる動悸を抑えこみ、また息をのむ。

「まあ、いい。愛しい愛しい息子同然な君への手向けだ。十秒だけ待ってあげよう」

そう囁いた彼は、銃口を逸らす事なく威圧的な声で、カウントを始めた。

「十……九……八……七……」

新一は半歩後ずさりながら、右手を胸に当てる。

「四……三……二……一……」

ギムレットは、ゆっくりと口角を持ち上げた。そして、引き金に添えた人差し指にぐっと力がこもる。

「時間切れ。残念だが、お別れだ……」

冷酷な呟きの後、室内に銃声が響いた。

37、もちかけられた条件（後書き）

はい、皆様こんにちはこんばんはーそしておはようございまーす☆
今回もご覧頂いてありがとうございます！

今回も、色々ピースを詰めた回になりました^^

それを踏まえて、彼が今後どうなるのか……楽しんでもらえますようにv

次話もまたがんばりまーすvvv

次回もヨロシクお願いしますー♪

38、逃げ道

その一瞬。ほんの刹那だけ、時が止まったように思えた。

新一は、噛みしめた口を限界まで横に開いた。そして上半身を低くしながら、上目遣いでギムレットを睨みつけた。静かに見下ろしてくる彼の腕から鮮血が噴いて、白衣を染めている。新一の手に握られた拳銃からは、静かにふわりと煙が舞う。

落ちた地面を回転しながら這う拳銃は、数秒前まではギムレットの手にあったものだ。

十秒間の猶予に感謝しなければならないだろう。あの瞬間で、懷から取り出した銃の引き金をギムレットよりも一拍早く引けたのは、反撃の手がないと高をくくったギムレットが、カウントダウンに氣を取られてくれていたおかげだった。

頬に一筋出来た傷から血が流れる前に、新一は鞆を握り締め、重心を落としたまま足に力を込める。そして、傷ついている手を、素早く落ちた銃に伸ばしたギムレット目がけて、渾身の力で体当たりを決めた。

後ろに数歩よろけたギムレットが大勢をたてなおす前に、新一は銃を部屋の奥へ蹴飛ばしてから、そのままの勢いで部屋の外へ抜け出した。そして、そのまま出口目がけて走る。

「待て！」

後ろから呼び止められる声に惑わされる事もなく、来る時昇った階段を駆け下りた。全速力で走った。あと半分で出口がある一階まで辿りつくという階段の折り返しの瞬間、下から発砲を受けるまで

は。

「くっ！」

左腕の上腕部から、血が噴いた。咄嗟に顔をしかめて、銃を持っ
たままの腕で傷口を抑え、足を止める。その一瞬も逃さない勢いで、
もう二発、左足の太もと、左脇腹にも弾を食らった。咄嗟に身体
を隠れるように右にずらしたため、脇腹の傷はさほど深くもないが、
問題はそこではない。

階下に向けて発砲してから、改めて下を覗き込む。すると、漆黒
の服に包まれた長身と、なびいた銀の長い髪が視界に映った。せせ
ら笑うように歯をむき出して、その冷たい目を黒い帽子の下からの
ぞかせ、銃を手にした彼は一步一步と階段を昇って来た。

「……ジン！」

歯をくいしばりながらも小さくその名を口にして、新一は踵を返
した。撃たれた足を引きずりながら、手すり伝いに階段を昇る。上
からも足音が段々近づいてくる。必死で昇りながら、新一は下から
顔を出したジンにもう二発発砲して、なんとか二階まで上がった。
今度は上から、追いかけてきたギムレットに発砲される。新一は
ギムレット目がけてまたもう一度引き金を引き、よろけながら一番
近い部屋に入り、戸を閉め鍵をかける。

「くそ、あのまま逃げられると思ったけどな……」

息を乱しながら呟き、走る痛みにも再び顔を歪めた。部屋に入る前
にも、右肩と左足首に弾が掠れたらしい。だが、左腕の怪我が一番
酷いようだ。新一は、顔を上げて視線の先にある窓を見た。戸の外
にすぐ迫る気配を感じながら、足を引きずって部屋の奥まで進み、

窓から身を乗り出して下を見た。ギリギリ身体は通るらしい。

日も落ち、外は大分暗くなっている。飛び下りて隠れながら逃げれば勝機はあるかもしれない。問題は、二階とはいえ、少し高さがある事だろうか。今の痛めた足で飛び下りるのは危険だが、考えている暇もない。下は、都合よく土で雑草も生えているらしい。多少はクッションになってくれるだろう。

カッン、と部屋の前に靴音が聞こえた。新一はそれと同時に、意を決して地面に飛び降りた。まだ逃げなければならぬ足を庇って、どの道使い物にならない左肩から着地した。激痛に顔をしかめながらも立ち上がり、足を引きずりながら走った。間髪いれずに窓から伸びたジンの黒い腕が、新一目がけて発砲する。弾は右足のふくらはぎ外側を挟み、新一は一瞬倒れかけながらも、傍にあった大きな木を掴んで身体を支え、再び痛みに耐えてよろよろと走る。

続けて数発の銃弾を受けたが、どういうわけか、いずれも地面に当たるか、致命傷を避けてかすり傷を作るかのもので、新一の足を止めるものではなかった。身を低くかがめながら、木陰で身体を支え直して進んだ。そこはそのまま、森に繋がっているらしい。必死で木から木へ、息を整え、新一は歩いた。

どういうわけか追手の気配は感じなかったが、思うように動かない足取りで隠れながら歩き、次第に辺りは闇に包まれ、森を抜ける頃にはすっかり暗くなっていた。森は公園と繋がっていたらしい。さほど大きくもない公園だ。ふと、腕につけた時計を見れば、もうじき十一時にもなる。

「……ひ、人の気配は、なさそう、だな……」

途切れ途切れになりながら呟いた新一は、呼吸を荒げながら、水

飲み場に視線を移した。そして、数回ゲホゴホと激しく咳込んでから、左右と周りを見回した。やはり人の気配は感じない。よたよたとした覚束ない足取りで、新一はゆっくりと水飲み場へ向かった。重心を全て預けて、ペダルに足をかけた。ちよろちよると上向きに出る水に、口をつける。新一はぐいぐいと喉を潤してから、水を止め、長い息を吐き出した。

「ふーっ……どうやら、や、奴らはもう追って来そうにねえけど、これからどうすっかな……」

小さく呟きながら、顔をしかめて傷に触れる。身体中随分と傷だらけにされたものだ。制服も、ところどころ破けて血が滲んでいる。

「け、けどまあ、こんぐれーで済んで、よかったってとこかな……」

ジンが出てきた時には、流石に死を意識した。実際、今無事に研究室から逃げ出せている事が不思議で仕方がない位だ。虫の音を聞きながら、新一は眉を寄せた。最後の窓からの射撃――あれは、ジンの腕ならば、当てようと思えば簡単に当てられたのではないだろうか。それなのに何故、今自分はこうして無事なのか。追手が誰一人来ない状況もまた、不自然だ。

それに――。

新一は、深呼吸を一つした。変わらず周りの気配に神経を張りながらも、公園のベンチに歩き、腰かける。ポケットに入れたUSBメモリは、なんとか無事だったようだ。それを握り締め、数秒考えてから鞆を開けて、その資料に手をかけた。

最後にギムレットと交わした会話が耳に残る。

「あいつが、工藤新一なんだとしたら……オレは……どうすればいいんだ……？」

絞り出すように呟き、ゆっくりと資料のページをめくる。公園の消えかかった灯りを頼りに、その内容を読んだ。次第に表情を暗く強張らせながら、周りへの警戒心を解く事なく、奪った資料の全てに目を通した。

38、逃げ道（後書き）

こういう話は不器用で困るネ！

こんばんはーv今回もごらんいただきましてありがとうございますー
す！

今日は10月1日って事で、奇しくも手負いの日に手負い話をうp
する事になりました！手負いの日については、活動報告にて話しま
したが、よければ[http://teoiconan.babyblue.jp/illustration/0102.html](http://teoiconan.babyblue.jp/illustration/illustration/0102.html)にて詳細をのつけてありまーすv是非賛同いただける方は広
げて下さーいv

どーも空間認識ってか空間把握ってか、そんなのが苦手でね。こう
いう一つの建物で動きまわったりを立体的に描いたりって言うのが
凄く難しい私です^^;

まあでも、暫くはこの難しさもないw

というわけで、次話では久々に江戸川の出番でーすvちよろつとだ
けどwお楽しみにネv

39、やまない着信

息が、あがってきた。放置している傷口は、次第に痛みを増してくる。

新一は、身体をズルズルと背もたれに倒した。だが、傷の痛み等どうでもいい位の問題が、彼の胸を締め付けていた。どうにもできない焦燥感と苛立ちに襲われながら、彼は歯を軋ませた。

虫の声が、静かな公園に響いている。風流のあるそれすらも、耳障りなものでしかない。読み終えた資料を鞆にしまいこみ、彼は再度、ポケットから出したUSBメモリを、眉を寄せて眺めた。コピーさせる直前、僅かにだけ見た研究データの内容が、全ての答えだとしたら――。

「くそ……」

掠れ声で小さく呻き、俯いた顔を手で覆う。新一は、メモリをぐつときつく握り締めた。

「くそ、くそっ……!」

拳を思い切り振り上げて投げつけようとして、手を止める。命がけで手に入れた、たったひとつの手掛かりだ。それを投げ捨てると言う事は、永遠に真実が曖昧なままになってしまうという事だ。

歯ぎしりして、拳を震わせながら、新一は数秒その姿勢のまま固まった。静寂を破ったのは、ポケットの中の携帯電話だった。鳴り響く音に、びくりと身体を震わせた。大きくもない音だが、忍びこむ際、マナーモードにする事すら忘れていた事に自嘲する。

「何やってんだ、オレは……!」

ポケットから取り出した携帯電話を開く。そして、彼はすっと目を細めた。

「蘭……」

眩きながら、携帯画面に映る毛利蘭の文字をぼんやりと眺める。震える親指が、受話ボタンに触れた。だが、その指に力を込める前に、新一は唇を噛み、携帯を握りしめた。

電話に出たところで、何を話せというのだろうか。彼女の声を聞いたところで、今の混沌とした気持ちが更に描き乱されるだけだ。そして、もしも帰って、コナンに出会ったとして、冷静でいられる自信などない。

「あいつがオレの存在を脅かす者だとしても……それでも、オレは、あいつを……」

言いながら、立ち上がった。いつまでも公園でじっとしているわけにはいかない。動かなければ。

ふらふらと歩きだした彼を嘲笑うかのように、危うかった雲は不吉な音を鳴らし、大量の雨が降り注いだ。雨水にしみる傷口に険しい表情を浮かべながらも、左の上腕部を抑え、片足を引きずるように、彼は公園を出た。

途中何度かポケットの中で着信が鳴り響いたが、画面だけ覗いて携帯を閉じる作業を繰り返した。その都度ポケットを確認するのが面倒になり、降ろした左手に携帯を持って歩いた。知らず知らず、握力のなくなった腕から、水に濡れた携帯電話は滑り落ちる。それに構う事なく、彼は濡れた身体を引きずりながら、宛のない夜の道を歩いた。

白衣の男は、納得の行かない顔で椅子に腰かけた。そして、しらっと壁に寄りかかりながら口に挟んだ煙草を手に取り、白煙を吐き出すジンを睨む。

「私には全く君の行動が理解出来ないよ、ジン」

苛立ちを含むそのセリフに、ジンは冷徹な視線を向けた。

「ふん、そもそも貴様がやらかしたヘマだろう」

「何故逃がした？ 奴が貴重な資料を持って逃げた事を判っているのか？」

鼻で笑って返され、更に言葉遣いは荒くなる。銃創を負わされた手に綺麗に巻かれた包帯を抑えながら、彼はつま先で小刻みに地面をたたいた。それを見下ろしながら、ジンは腕を組んで不敵に笑う。

「奴を始末するのは、後でいくらでもできると判断したからだ。それよりも重要な事は、本当の工藤新一を確実に手に入れる事だ。奴はその後、本当の工藤新一として暫く生きていてもらわなきゃならねえからな」

「彼にはもうばれているんだぞ、江戸川コナンという子供が、工藤新一である」と

「だからこそどうするか、泳がせる価値はあるだろう。自分が何者なのか見失った奴が、どうするか。心配しねえでも、我々が奴に

よって脅かされるような事があれば、その前に奴には例の薬を使うさ」

話しながら、ジンは再びふーっと白濁した煙を吐き出した。椅子に腰かけたままのギムレットは、ぴたりと動かしていた足を止める。

「例の、薬……」

「貴様が研究を重ねるうち、偶然生みだした産物だ。そもそも奴は本来、そのために生きているのだからな」

その言葉に、ギムレットは小さく舌打ちした。

「そもそも、彼は本来私の大事な研究そのものだった筈だがね。君たちがそれを利用しようと考えなければ、彼は今でも私のものだったよ。これでは何のために、あの時彼を助けて工藤新一の観察をしてきたか判らないじゃないか」

ぶつぶつと愚痴ると、ジンの鋭い眼光がギムレットを射抜いた。ギムレットは神経質そうに眉を寄せ、眼鏡を上げ直す。ジンは懷から取り出した銃を、彼に向けた。

「調子に乗るなよ、ギムレット。あの方の考えに逆らうなら、この場で貴様をあの世に送ってやってもいいんだぜ？」

「……誰もそうは言っていないさ。組織がバックになれば私の研究も捗らない事は一応判っているからね」

言いながら、まだ納得の行かない顔でため息をついたギムレットは、億劫そうに立ち上がると、部屋を出た。そして、自身の研究室に戻ると、傷を負っていない手で拳を作り、横にある壁を強く叩いた。

「いつまでも、利用されていると思うなよ……ジン」

低く呟いた彼は、パソコンの前に座り、その電源を入れた。

「う……っ」

うめき声を口から零しながら、コナンは胸を抑えて身体を起こした。ぜえぜえと肩で息をしながら、俯いた額から数滴の汗が掛け布団を湿らせた。

「おい、工藤？ 急にどないしてん。大丈夫か？」

平次が声をかけると、ゆっくりと顔を上げたコナンは、不安定に瞳を揺らしながら平次の方へ顔を向けた。苦しそうに呼吸をしながら、焦点のあわない視線が、数秒の間、平次をぼんやり眺めた。

39、やまない着信（後書き）

はい、こんばんはーV

今回もお読みいただきましてありがとうございます♪

久々江戸川ちよつとだけよーWな回。

次回は江戸川たっぷりの提供でお送りしますーすW W W
この話をストックとして書いたのは結構前（多分一か月位？と少し前）ですが、具合悪いまっただ中な江戸川書くのがかなり楽しかった覚えがありますW W W

ギムレットとジンのやりとりを意識した今回ですが……うん、ギムレットにも色々あるんですわWおいおい解ってもらえるといいなーW

そして、工藤さん。

伏線を回収して謎を紐解きながらも、またそれに絡めた新たな謎や伏線を上乗せしていく……。そんな作業が最高に好きです♪

そして、書いてて楽しいこのお話が皆さんにとっても楽しいものがありますようにV頑張りますね！

では、次話でもよろしくお願いしますー♪

40、脳裏によぎるもの

コナンは、小さな手を震わせながら平次の服の胸元を掴んだ。そして、瞳をゆらゆらさせて、平次を見上げる。

「お、おい、工藤？」

「あ、アイツ……は？」

「……工藤の偽者の事か？ それやったらまだ連絡つかへんみたいやけど……」

戸惑いながら答えると、コナンは呆然と手を放し、俯いた。

「嫌な予感がする……。助けねーと……。こ、今度こそ、アイツを……」

「く、工藤？」

額を抑えながらぶつぶつと呟くコナンを、心配になって覗きこむ。血の気の失せた顔から滴る大量の汗と、どこを見ているのか判らない揺れる眼に困惑させられた。

「おい」

「は、早く……。助けにいかねーと……」

呟きながら、コナンは突然布団に手をつき立ちあがった。前のめりなまま、ドアに向けてふらふらと数歩足を踏み出したコナンに、平次は慌てて手を伸ばした。だが、ドアまで辿りつく前に、コナンの身体は一瞬大きく揺れて、横に流れるようによろけた。

「あ……。や、やべ……」

はつきりしない掠れ声を発したかと思えば、そのまま身体は前に傾いて、コナンは落ちるように、床に倒れ込んだ。

「おい、工藤！　おい！」

すかさず倒れたコナンの肩に手をかけて、自分の元に引き寄せながら抱き起したが、意識がないようで、されるがままぐったりと、平次の手首と身体が預けられた。シャワーでも浴びたかのような顔で、微かに開いたままの口からは弱々しい吐息が漏れる。

「おい、しっかりせえ工藤！　工藤！」

呼びかけても肩を叩いても反応がなく、首から異常な体温が伝わって来た。おでこにぐっしりと張り付いた前髪を避けて手のひらを当ててみれば、汗ばんだ額は最後に触れた時より随分と熱かった。

「アカン。また熱上がつとるやんけ」

呟いて、ひとまず布団に寝かし直した。そして、氷枕がぬるくなっているのに気づいて、冷えたタオルだけ額に乗せて、枕を替えに蘭のいるキッチンへと向かった。

「あ、服部君……コナン君の具合はどう？」

尋ねられて、平次は少し逡巡した。倒れた事を言うべきか、否か。そして、少しの間を置いて答える。

「……相変わらず、やな。すまんけど、氷枕替えてくれへんか？　冷えなくなってもてん」

「うん、わかった。じゃあ部屋に持っていくから待ってて。もう後片付けも終わった所だし」

せわしなく氷枕を受け取った蘭をキッチンに残して、平次は再度部屋に戻った。程なくして、蘭も部屋に戻る。彼女はコナンの隣に腰を下ろして、氷枕を替え、額を撫でながら、心配そうに見つめた。

どれくらい歩いたろう。空は次第に闇からうす暗く変わっていた。とりあえず人の通らない場所にある廃ビルを見つけて、中に入り込んだ。よろめきながら、新一は壁にもたれて座り込む。

今のナリでは、ホテル等の宿泊施設に泊まる事はできない。野宿も、病院に行く事も危険すぎる。探偵事務所には、帰れない。行くあてのない新一に残された手段は、身を隠すこの場所で暫くじっとしている事だけだ。

一応持ち運んでいたノートパソコンを開いてみる。恐る恐る起動させると、無事電源は入ったようだ。それは、闇に慣れた目には少し眩しく、新一は顔に四角い光を浴びながら目を細めた。そして、先程のメモリを差し込んだ。左腕が痛んで、顔をしかめる。先に応急処置が先決だと判断し、パソコンをそのままに、脱いだワイシャツを破いたりネクタイを使って傷の止血を図った。

「……つくし！」

唐突に出たくしゃみと共に、身震いしながら鼻をすする。濡れた服と身体で夜を過ごせる程、今は暖かい季節ではない。

「寒みいな……。このままじゃ、朝にはコナンみてーに熱出してぶっ倒れそうだ」

自嘲気味に呟いて、新一ははっとして前髪をかきあげた。自分にとって、彼がどれだけ大きな存在なのだろう。こんな何気ない場面でもつい思い浮かべてしまう程の。

新一はもう一度震えて身体をちぢ込めた。

「やべ。ここで風邪ひいて熱なんか出したら、それこそ死ぬな、オレ」

苦笑いしながら、鞆のポケットをまさぐった。新一も風邪ひかないでね、と蘭から渡されたホッカイロが一つ、そこにある。手のひらサイズだが、何もないよりは十分マシだ。

「蘭……使うぞ」

渡してくれた彼女に感謝しながら、封を開けて数回擦った。次第に暖かくなるそれを胸元に抱いて、新一は安心してため息を零した。

「これなら、濡れたまま一夜過ごしてもなんとか……」

”——だからこんな熱だして倒れちゃうんだよ”

脳裏を何かが掠めた気がして、新一は言葉を止めた。何かのデジヤビュだろうかと記憶を探ったが、特に何も考えつかなかった。も

しかしたら、大切な記憶の一部だったのかも知れないけれど。

そう言えば、コナンがまだ倒れる前、二人きりになった時に何者なのかと尋ねられたりもした。猜疑心たっぷり目で、化けの皮を剥こうとしているように。

「オレが何者か——そんなもの、オレ自身が一番知りてえ事だつ——のによ」

呟いた新一は、頭を抑えながら俯き、自嘲的な笑みを零す。あの時の自分にとって、工藤新一という名前は真実だった。嘘についているつもりなんて、なかったのだ。

どこまでが本場で、どこからが嘘だったのかが分からない。けれどわかったのは、騙されていたらしいという事だ。

あの時——気がついた時には、病院のベッドの上に居た。身体は既に十七歳のもので、腕には点滴が繋がれていた。周りを見回しても、最初は誰も居なかった。とりあえず不快だった腕の点滴を外し、身体を起こす。特にどこも痛い所や怪我はなかったが、頭には靄がかかったようだった。程なくして病室に入って来たのは、眼鏡をかけた、比較的がっしりした体型の白衣の男だった。

それが、自分の中にある、始まりの——一番最初のはっきりした記憶だった。

時折、先程の言葉のように、形もなくふっと脳裏をよぎる物もある。だがそれは、形になる前に消えてしまう儚いもので、自分の記憶なのか他のものなのかすら判らない。そんな不確かなものよりも、目の前で自分を救ってくれたらしい恩人の言う事を信じようと、あの時は、思っていたのだ。

40、脳裏によぎるもの（後書き）

今回もありがとうございますー！

二十九話では、お初さんから沢山コメントいただけてりして、凄いい言葉もいただけてりして、本当にうれしかったです！ 執筆のパワーをありがとうございます！ お初さんも常連さんも、いつでもいらして下さいませーV大歓迎なのですよ♪

江戸川さん壊れ中W W W W W

ごめん楽しくて仕方ないW W W 誤解しないでくれたまえよ。これは全て愛なんだ！ 歪んでるけど愛なんだW W W W W

んでもって、工藤新一君……結構核心に迫ってるところですねW
次話もまた、お楽しみ頂けたら幸いですー（＃＾・＾＃）

41、全ての発端と、一つの終わり

ある日唐突に、世界が一八〇度変わった。

軟禁状態であった自分になんの疑問もなく、教えられる事を教えられるがままに吸収していた。そのままの毎日がずっと続くものと思っていたある日、先生はどこか不満げな顔で病室に現れ、次いで見知らぬ黒服の男が顔を見せた。

「紹介しよう。ジンだ」

「ジン……」

初対面だというのに、威圧感のある冷たい瞳で見下ろされ、少し困惑した。見下ろしてくる彼は、ゆっくりと口元に歪んだ笑みを作る。

「なるほど。これが例のガキか」

「へ？」

意味のよくわからないセリフに、思わず尋ね返した。すると、彼はベッドの上に、乱暴にそれを放った。眉を寄せながらもそれに視線を移すと、それは数か月前の――まだ意識があるよりも前の日付の新聞紙だった。

「読め。そこに、貴様の事が書いてある」

首を捻りながら、ベッドの上の新聞を手を取った。そして、開いてすぐに彼の言葉の意味を理解する。

「工藤、新一……高校生探偵……」

記事の一面には、誇らしげに写真に写る男子高校生の姿があった。文を読めば、余程の難事件を名推理で解決したらしい事が書いてある。褒め称えられたその文面も、彼の解決した事件がとても難解なものである事を伝えている。だが、問題は写真の彼が、自分の顔と瓜二つだったという事だ。傍らには、ガールフレンドなのか事件関係者なのか分からないが、偶然撮られてしまったらしい小さく写る可愛い彼女の姿も見える。

記憶もなく、自分が何者かもまるで知らされていなかった。だが、その記事を見た時、凄く懐かしさを感じたのだ。

「これが、オレなのか――？」

高鳴る鼓動を抑え込み、呟いた。その時初めて、自分自身を知る事に興味を持ったのだ。そして、思えばその頃から、少しずつ自分と先生との間に溝が生まれてきたのだ。

興味を持ってしまったら、もう真実を知らなければいけない。工藤新一について、自分でも調べたし、先生には内密でジンと連絡を取り合ったりもするようになった。

調べれば調べる程興味が沸いた。そして、工藤新一について深く知ると、時折懐かしさが胸によぎったり、何か幼い頃のような記憶がフラッシュバックするようになった。彼が解いたらしい事件を、再考察してみる。まるで渴いた土が水を吸収するように、工藤新一を自分の中に吸収した。

自分が完全な工藤新一になるのに、さほど時間はかからなかった。記憶が戻らないまでも、自分の全てが記憶を失う前に戻れたのだと思った。記事に載っていたままの、工藤新一になれたのだ、と。

工藤新一に関わってきた人達の事も全てジンから教えられた。そして、聞かされる程に彼らの事を考える時間が多くなった。両親や、同級生の皆、そして博士や、蘭。自分が居ない間、どれほど心配をかけているだろう。

会って、安心させてやりたい。否、それ以前に自分が心から彼らに会いたかった。知るほどに、懐かしさや愛おしさが心を支配した。そんな彼らに、会って一緒に話して、一緒の時間を過ごしたいと強く思うようになった。

声が聞きたい。触れ合いたい。話しかけたい。話しかけて欲しい。元あった場所に、帰りたい。

胸の奥から溢れてくる想いは、日に日に強くなった。そして、あの日が訪れた。先生を――ギムレットを裏切る事になった決定的な事件が。

深夜の事だった。先生の目を盗んで、部屋からそっと抜け出した。本当は帰ってくるつもりで居たが、そして、起きていないか確認するために、彼の研究室に足を運んだ。声が聞こえてきて、戸の前に立ち止まったまま身体を硬直させたが、その声は自分が知っている”先生”の穏やかなものではなかった。

「奴はまだ手に入らないのか！」

怒鳴るような興奮した声が響く。”先生”が発してるとは思えないその言葉に、何の話だろうと、思わず聞き耳を立ててしまった。

「見つけ出せ！ 早く。写真のガキだ。何、見つけたのに隙がなくて手が出せないだ？ ガキ一人に何を言っているんだ。ジンまで関わって来てる。余計な事をアイツにふきこんだんだ。このままで

は私の大切な研究材料が奪われかねないんだぞ！」

その言葉を聞いた時、なんとなく直感した。言葉の中の”アイツ”というのが自分の事であると。ならば、彼はよく思っていない事になる。自分が、工藤新一の時の事を思い出そうとしている事を。

「とにかく、知り合いの医者には全てこの写真を見せてある。APT X4869を投与された彼には、遅かれ早かれその時が来るだろう。だがその前に、少しでも早く手に入れたいんだよ」

APT X4869——その薬の名前は、少しだけ耳に挟んだ事があった。どんなものかはよく判っていなかったが、彼やジンの居る組織が新しく開発したというらしい薬だ。だが、一体それを誰が投与されたと言うのだろうか。そして、一体誰をどんな目的で探しているのだろうか。

そもそも、先生を——ギムレットを、このまま信用していいのだろうか。

疑念が生まれたまま、その日はとりあえず部屋に戻った。そしてまた別の機会に、こっそり彼の研究室へと忍びこんだ。

そこで見つけた写真には、一人の子供が写っていた。年齢はおよそ幼稚園児〜小学校低学年程度。初めて見た筈なのに、やけに見覚えがあるような顔つきの子供だった。後々、その子供が眼鏡を外した江戸川コナンそのものであると気付かされるわけなのだが、この時はまだなんの写真だかよく判らなかった。

この幼い子供に、どんな薬を投与したというのだろうか。

なんとかして薬を手に入れたが、自分ではそれをどうする事も出来なかった。だから、何も知らない風を装ってジンに取り入り、ギ

ムレットを強引に納得させ、軟禁状態から解放された。

そして、自分の手で見つけ出した蘭に、あの日声をかけたのだ。

ピチョン……。

突然、頬を濡らした冷たい感触に、新一は身じろいだ。半分覚醒しかけた意識は、全身に寒さを自覚させた。新一は長めの息を吐き出して、ゆっくり目を開く。そして、建物に差し込んだ日差しの眩しさに、開けた目をすぼめた。

「……朝、か。いつの間に寝ちまったのか……なんとかまだ、生きてるみてーだな」

呟いた新一は、まだしつとりぬれた前髪をかきあげる。

「やっぱり、少し熱っぽくなってきやがったか。そりゃそうだよな……」

ここでこのまま死ぬのだろうか。自分が何者なのかも結局判らないまま。何者にもなれないまま、こんな誰も居ない場所で無惨に死んでゆくのだろうか。命がけで手に入れたこの資料さえも、無駄にして。

ならば、あの時そのまま殺されていればよかった。わざわざ逃げたのは、生きたかったから。知リたかったから。そして、守りたかったからだ。

「これから、どうすっかなー……」

途方もなく思える眩きを小声で零して、新一は天井を仰ぎながら、ふっと切なげに微笑した。

41、全ての発端と、一つの終わり（後書き）

皆様こんばんはですーVV

今回もありがとうございます!!

江戸川見たくて仕方ない方は、江戸川登場しないこんな回はやきもきしてるんじゃないかなーと思いつつWWWWWW

大丈夫、次は江戸川オンステージだから♪↑

なんかねー、もうねー、この工藤新一君が書いててかわいそうでならないですわ。彼の正体も過去も未来も全部知ってるからこそって言うのもあり…ね。

まあ、自分で生み出したキャラだから、当然特別な感情も入るんですけどね。こういう自分で生み出したキャラは、書いてる時はホント、手のかかる息子のように思って、作品が終わるまで精一杯の愛情を注いで書いてますwだから、皆さんにまさかの心配してもらえたりとか、まさかの気にかけてもらえたりすると凄く嬉しかったりしてVVVホントありがとうございます!

というわけで、今回は工藤新一君自身が知っている自分の情報を明るみに出してみました。これまで、そんな風な事をおわせながらも、はつきりとは語らせませんでした…そう、彼は嘘偽りなく本当に、自分が工藤新一本人であると思っていますのです。

そして、彼が知らない本当の彼。それから、研究所で彼が知ってしまったコナンの正体。そして、尚も悪化するコニヤの病状……。そこから転がってゆく話の顛末を、どうぞ次話以降からもまたお楽しみ下さいませ☆

42、願いと誓い

探偵事務所には、戻れない。組織にも研究施設にも戻れない。こんな怪我だが、病院にも行くわけにはいかない。それでも生きたいと願うならば、頼れる場所は、一か所しかなかった。

「行くか……」

壁を使って無理やり立ち上がり、バッグを肩にかけ直す。比較的軽傷な右肩だが、重みが加われば痛みが走り、顔が歪んだ。それでも歯を噛みしめて痛みをこらえ、壁伝いに彼はフラフラと進んだ。せめて命がけで持ち出したデータだけは、なんとか無駄にしたいはなかったのだ。通行人の困惑した視線を集めながら、彼はアスファルトを歩いた。必死で、自分自身に活をいれながら。

仰向けに寝かされていたコナンは、荒い呼吸のまま、薄っすら目を開けた。滲む汗が布団を湿らせている。目に映った影に、ゆっくりと手を伸ばす。すると、大きな骨ばった手が包むように自分の小さな手を捉えた。

「……はっ、とり？」

「せや。姉ちゃんも居るで」

「コナン君」

平次の関西弁の後に、蘭の柔らかい呼びかけが耳に届いた。細くて柔らかい心地よい指が、コナンの額を撫でる。

「蘭姉ちゃん……」

「具合、どう？」

「ん、ありがとう。大丈夫だよ。心配かけてごめんね……」

平次とは向かい側の蘭を少し探すように視線を彷徨わせ、影を認識するなり、コナンはそこに精一杯の微笑を送った。そして、小さく深呼吸をしてから口を開く。

「蘭姉ちゃん、ボク、平次兄ちゃんにね、話があるんだ……男同士の相談事。だから、少しだけ二人きりにしておいてくれる？」

平次と蘭は二人きよとした顔を浮かべてコナンを見つめた。

「判った……服部君、コナン君の事お願いしてもいい？」

「あ、ああ、ええで」

「じゃあコナン君、あんまり無理して長話しないようにね？」

「うん」

それだけ言い残して、ゆっくりと立ち上がった蘭は、部屋を後にした。完全に扉が閉まり、足音が遠ざかったのを確認してから、平次が息をついた。

「ほんで、どないしてん。また倒れた前みたいないないな事言い出すんとちゃうやろな？」

「……タオル、替えてもらってもいいか？ 熱い」

平次の言葉に答えずに、掠れた声でコナンは呟いた。平次は目を細め、言うとおりのタオルを冷やし直してコナンの額を覆った。

「どや？」

「ああ。……サンキュ」

小さく礼を囁いてから、コナンは目を瞑り呼吸を整えた。そして再び薄っすら目を開けて、どこか遠くを見るような様子で天井を眺めた。

「ガキの頃から、自分の体力忘れて、無茶な事したりしてさ。だから、今回みたいに、熱出したり体調崩して倒れたりとか、よくあったんだ」

「は？ 突然なんの話や？」

ポツリポツリと話し始めると、当然、怪訝な顔で聞き返される。ただ、体調の悪さから、返される問いに一つ一つ答えられるだけの余裕がなく、コナンは構わず進めた。

「オレがまだコナンよりもガキの頃。当時から父さんの小説は各国でかなり評価を受けてて、国単位で遠出する事も多かったんだ。母さんも、つきあいだな。可能な限りあちこち連れてってもらったりもしたけど、どうしてもって日もあってな。たまに、親戚やら知り合いやらの家に預けられたり、日帰りなら家で一人で待ったりもしてた」

不明瞭な発音でぐだぐだ語る。自分でも、朦朧とした意識の中で話しているせいで、たまに話の趣旨を失いそうになった。それでも、呼吸を乱しながら、コナンは語った。

「その時が、いつの事だったかは……覚えてねーけど。両親が居ない部屋で、こうやって、熱を出して倒れてた時に、今のお前がしてるみてーに、横で看病してくれてた奴が居たんだ」

「……ああ」

暫く黙っていた平次の口から漏れた相槌に、コナンは数度緩慢な瞬きをした。薄っすらと開いた熱っぽい視線を平次に向けると、平次は無言のままじっと続きを待っている様子だった。どうやら、質問をしても無駄だと察してくれたらしい。二、三度呼吸を整えてから、平次を潤んだ視界にいれながら、コナンは微笑した。

「そいつは、オレを励まして、元気づけようとしてた。一生懸命にな。年は、多分オレと同じ年かもしれないが少し上の少年だった。そいつがそこに居てくれるだけで、凄く安心してたし、気分も落ちついたよ」

「ほんで？」

「誰だったかまでは、まだ思い出せねーんだ。大切な存在だった筈なのに、最近まで存在も忘れてた。けど、それが急に夢に出てくるようになって、色々思い出したんだ。夢の中でも、励まして、守ってもらってくれた。……なのに、それなのに……お、オレは……」

話す唇が震えた。胸が、締め付けられるように苦しく、痛みを訴える。耳鳴りと共に、目に映る景色が色を失くす。胸を抑え、頭を抱えるように身体を丸めて、口からうめき声を漏らす。

心配になったのだろうか、気遣うような平次の手が、そっと肩に触れてきた。

「おい、工藤……?」

「あ……うぐっ……ハァハァッ」

答えようとしたが、息が乱れて上手く喋れない。呼吸困難になりそうになって、無理やり息をのみ込んだ。瞬間的に身体を起こす程激しくむせかえったが、平次の手が背中をさするうち次第に落ちついて、数回の深呼吸で何とか息を整えた。そして、咳が治まりかけると、再び布団に寝かされた。

「わ、悪い……げほっ。マジで、何なんだろうな、これ……げほがほっ」

「無理せんでええで。一度休んだ方がええんとちゃうか？」

「だ、大丈夫……」

氣遣うセリフに、これ以上心配かけまいと答えた。だが、朦朧とした脳内では、先程までの記憶が曖昧になっていようだ。蘭を部屋から追い出した後の、今まで会話していた記憶が上手く思い出せない。

「今……どこ、まで話したっけ？」

「そいつが励まして守ってくれとったんに……。って所までや」

「ああ、そう。そうだな……うん……」

言い淀み、目を閉じた。頭に浮かぶのは、夢で見た最後の光景。細かいところまでは覚えていないけれど、でもあの絶望感は判る。深呼吸をして、再度ゆっくり瞼を持ち上げた。天井をぼやけた視界に移しながら、眉を寄せた。そして、顔を手で覆う。

「オレは、助けられなかった。……守れなかったんだ。あの時、まだ無力なガキだったから」

「工藤……」

平次が息をのむ様子が伝わる。コナンはゆっくりと、顔を包んで

いた手を持ち上げた。

「オレの記憶は”あの日”以降どこも欠けていない筈なのに、”あの日”以降の記憶に、アイツは存在してねーんだ」

「あの日っちゅうんが、その助けられへんかった日なんか？」

「……ああ。だから、今度こそ！ 今度こそ、助けてやらねーといけねーんだよ……この身体が、どうなろうとな」

自然と、語尾に無駄な力がかかる。ぎつと歯を軋ませた口から、鈍い血の味が広がった。病気で弱まっていた唇や歯ぐきが、軋ませた力に耐えきれず出血したのだ。それだけ自分にとって、悔しい出来事だったと言う事だ。

だからこそ、次こそはきつと。曖昧な記憶に残っている少年にどこか重なるあの彼を、なんとしても助けたいのだ。

助けないと、いけないのだ。

42、願いと誓い（後書き）

こんばんはーV今回もお読みいただきましてありがとうございます
朧月です！

お約束通り江戸川ぐったりオンステージの提供でお送りします今回W
次話は、一部の方にはお待たせしました久々あの二人十一人の出番
です！誰だかは、ネタばれしないので是非次回もお楽しみ下さいま
せー♪

毎回、金曜は小説更新の事があるせいで、脳内で具合悪い感じ
な江戸川がはあはあぜえぜえしてて困りますWWWW幸せだが仕
事に集中できない朧さんでしたWWWW

ではでは、今回も楽しくご覧いただけましたでしょうか？（＊＾＾＊）
＊）

また次話もヨロシクお願いしますー☆

43、行き着いた先

――阿笠邸。

徹夜明けの哀は、パソコンの光を顔に浴びながら、静かに欠伸をした。視線を横に移して見れば、もう八時を過ぎている。どれほど集中していたのだろうか。そろそろ一休みしようと、データを保存して立ち上がり、少し凝った首をほぐした。そして、モーニングコーヒーでも飲もうと、地下室をでて階段を昇った。

「哀君、寝ておらんのか？」

「ええ」

階段を昇ったところで博士に尋ねられ、哀は欠伸まじりに答えた。

「元々私が作り出した薬だけあって、解析の進みもいいわ。解毒剤の試作品とのデータも合わせれば、思ってるよりずっと早くなんとかなるかも」

ぐっと胸の前で手を握り締めると、向かい合う博士は眉をひそめた。

「じゃが、無理は禁物じゃよ、哀君。ここでもし哀君が倒れたりしたら元も子もないじゃろ」

「ダメよ。時間がないの。学校も今日は休むつもりよ。江戸川君を助けなきゃ……手遅れになる前に」

「哀君」

案じるように呟く博士に、再度告げた。

「今はとにかく、解毒剤の作成よりも先に、工藤君の身体にあう解熱と症状緩和の作用がある薬を作ってあげないと。身体に残ってるアポトキシンやその解毒剤の作用も、利用できる方法がありそうなの」

言いながら、哀は玄関に足を向けた。新聞を取りに行くつもりだった。スリッパを履いて、なんの気なしにドアに手をかける。そして、開けた戸の先を見て、哀は目を丸くし絶句した。

数秒の間、そこに立ちつくした哀は、はっとして、やっと震える言葉を絞り出す。

「く、工藤、君……」

門の前に、彼は倒れていた。ボロボロのしめった制服に血を滲ませて、眉間にしわを寄せてうつ伏せに、目は固く閉じて。大事そうに、守るようにかばんを握り締め、苦しげに息を乱している。

「あ……」

困惑がちに彼に歩み寄り、手を伸ばしかけた。だが、その手が彼に触れる前に止める。冷静になれば、これは自分の知る本物の彼ではない。彼がこんな場所で、傷だらけで倒れているわけがないのだから。

この彼は、ずっと避けてきたあの偽者なのだ。けれど。

哀は、唇をきゅっと噛みしめて、一度ぐっと握りしめた右手を彼に差し伸べた。

「……大丈夫？　しっかりして」

声をかけて、彼の隣にしゃがみこみ、哀は彼の両肩に手をかけた。湿った制服越しでも、首筋から伝わった体温は熱い。傷のせいで発熱しているのだろうか。ぐっと力を込めて上半身を起こそうとしたが、哀の力ではどうしようもない。

「ちょっと待ってて。博士を呼んできてあげるわ」

立ち上がると、哀は一瞬だけ躊躇いの視線を彼に向け、きゅっと下唇を噛みしめてから玄関へ戻った。そして、部屋でくつろいでいた博士の後姿に呼びかける。

「博士、悪いけど外に来てくれる？」

「ん、どうしたんじゃ？ 哀君」

のたのたと歩いて来る博士を眺めながら、哀は玄関先で開いた戸から、門の先に倒れた彼を指さした。

「し、新一！ 大変じゃ！」

博士は驚愕し、こけそうになるような勢いで、わたわたと玄関を出て、新一の真横に膝をついた。

「新一。新一！ 酷い怪我じゃぞ……一体何があったんじゃ」

必死で呼び掛けながら、博士は新一の肩や腰、腕等に触れて傷を確認した。そして、彼を仰向けに起こす。そんな博士に、哀は後ろからクールな声をかける。

「博士、彼は工藤君じゃないわ。例の偽者よ。工藤君は探偵事務所

で寝込んでる。こんな所に元の身体で傷だらけで倒れてるわけないもの」

哀の言葉で、博士もそれに気付いたらしい。ハッとした様子で一瞬彼の顔を覗き込む。

「……それもそうじゃな。近くで見ても新一にしか見えんが」

眩きながら、博士は辛そうにしわの寄った新一の眉間を包むように、彼の額に掌を乗せた。

「熱もあるようじゃ。怪我の手当ても早くしてやらんとな。哀君、ベッドに運ぶから玄関を開けてくれんかのお」

「……ええ、判ったわ」

ぐったりする新一の若干しめった身体を、博士はそっと抱き上げた。そして、重そうに立ちあがり、彼を家の中に運び込む。哀は新一の傍にあったバッグを拾うと、そんな博士の後を追う形で扉を閉め、靴を脱ぎながら静かに微笑した。

ベッドに入れる前に、彼の濡れた服は博士が脱がせた。そして、代わりに博士の少しだっぼりとしたTシャツとゆったり系のズボンを着せた。そして、寝かせたベッドの上で、頭を冷やしながら怪我の手当てをする。一生懸命になる博士を後ろから眺めて、哀は再び、柔らかに微笑する。

胸によみがえるのは、あの雨の日。白衣を着て倒れている怪しい子供を、彼は拾って解放してくれた。目が覚めてからも強引に素性を聞き出そうとはせず、普通なら到底信じがたい話に耳を傾けてくれた。

だから、どんなに警戒していても放ってはおけなかった。家の前

で倒れていた彼の姿が、あの日の自分と重なってしまったから。

「変わらないのね、博士」

「ん、なんじゃ？」

「なんでもないわ」

ぽつりと、ほんの小さな言葉で呟いた。

たった一人の姉を失い、行く場所もなくしていた自分にとって、どれほど心強かっただろう。目が覚めた時の温かいベッドと、暖かく励ますような笑顔と、差し出されたホットミルク。そして、事情を話したら嫌な顔一つせずに、家に置いてくれた。危険な組織の裏切り者で、あやしい薬を作っていた自分の事を。

「ありがとう、博士」

「ん？ どうしたんじゃ哀君。さっきから」

聞こえるか聞こえないかの声で呟いたが、しっかり聞かれていたらしい。哀は再び「なんでもないわ」と返して、包帯を手を取った。

「とりあえず傷の手当ては出来る範囲でやるしかないわね。病院は少しまずいだろうから」

「そうじゃのー。これで、なんとか回復してくれるといいんじゃが」

心配そうに彼の様子をじっと覗く博士の隣で、哀は持ち出した体温計を新一の腕に挟んだ。

「大丈夫よ、彼工藤君と同じでしぶとそうだから」

柔らかくそう答ると、哀は博士に彼を託し、寝室から出た。彼が博士に何か危害を加える可能性はないと、信じていいだろう。それ

よりも自分は、今出来る事をやる。

手遅れになってしまいうよりも前に、大切な人を助けるために。

43、行き着いた先（後書き）

こんばんはーV今回もお読みいただきましてありがとうございます！

前回あとがきで話した2人。哀ちゃんと博士でしたーV

いや、博士はともかく、哀ちゃんファンって結構多いからさ。

お年賀シーズンに突入しまして。毎回手描きで一枚一枚描いたり、少し前からはリクエスト取って一枚一枚描いたりだったのですが、年々増えて行って40超すかもしれない今回の干支はまさかの辰年
><

ドラゴンむずいってwww

んで、そんなこんなで奮闘してると、どうにもこっちの執筆がはばからなくてですね（^ー^；

今はまだ多少余裕はあるけど、ストックギリギリ年賀状もギリギリになっていよいよ執筆に回す余裕が本気でなくなってきたら、年末は更新お休みいただく日も少し出てきちゃうかも知れないです。スミマセン><今のうちに言っとくね。年明けたらまた元通りに。

と、そんな私事情を話した所で、また次話もヨロシクお願いします

ー（*^ー^*）

44、灰原哀と工藤新一

「ぼーやはよいこーだーねんねーしーなあー」

それは、いつの記憶だったのだろう。彼が横になっている布団をポンポンと静かに叩きながら、慣れない歌を歌ってやった。眠りかけた彼は、薄っすら目を開けて此方を睨む。

「……うるさい」

その口から漏れた不満そうな声に、少しむっとした。

「なんだよ、せっかく歌ってあげてんのに」

「んな、オンチな歌……いつまでも歌ってなくていいよ」

ケホケホ咳込みながら、彼は赤い顔で言った。そのあんまりな言葉に、更に口を膨らます。

「オンチなのはお互い様だろ？」

「でもねむれな……ゲホッ……ケホケホッ」

咳込む姿は大分具合が悪そうで、少し心配になった。額に触ると、大分熱が高いようだった。

「ちゃんとねてないからだよ。今冷やすの持ってくるから」
「うん……」

何度か頭を撫でてやってるうちに、いつの間に落ちついて眠ってしまっていたらしい。目の前でくーくー寝息を立てられたら、看病

してる方も眠くなって、いつの間にベッドに寄りかかったまま夢に落ちていた。

それは、いつの記憶だっただろうか。こんなに幼い頃の記憶を見るなんて、今まで一度もなかった。

静かな部屋で、ゆっくりと目を開けた。腕の痛みに、思わず顔をしかめる。暖かくて柔らかい布団の感触が気持ちいい。どうやら、生きているらしい。

「気がついたようね」

声をかけられて、横を見た。そこには、七歳程に見える幼い少女が、年齢に似合わないクールな表情で立っていた。額に触れると、冷えた濡れタオルが置かれている。

「これは……君が、オレを？」

「誤解しないで。私は今ここに来たばかり。あなたを助けたのは博士よ。買うものがあって出掛けたけどね」

「そうか、博士が」

呟いて、息をつく。そう言えば朦朧としながらもなんとか家の前まで来た時、景色が歪んで地面に落ちた事は薄っすら覚えている。どうであれ、無事生きてここに居るのだ。

新一は、再度薄く開けた目を首を倒しながら横に向けた。哀は半歩分後ずさる。

「……君は、確かあの時小学校に居たよな？　コナンと一緒に」

尋ねると、彼女は視線を逸らして下唇を小さく噛みながら、逡巡してる様子を見せた。そして、未だ緊張して強張った表情で口を開く。

「ええ、居たわ」

「やっぱり。綺麗で大人びたクールな顔も、その赤みがかった茶髪のウェーブヘアも、印象的だったからな」

小さく笑いながら言っても、彼女の顔は変わらず硬い。やはり大人びて見えても、知らない大人の男とでは居心地が悪いと言う事だろうか。

「君の名前は？」

「……灰原、哀よ」

「じゃあ、哀ちゃん。ありがとな」

ぶっきらぼうに名乗ってそっぽを向いた彼女に、手を伸ばした。ギリギリ彼女の左耳辺りまで届いた手で、そのまま彼女を撫でながらそう伝える。びくりと肩を震わせ、彼女は身体を硬直させた。

「あなた、さっきの話聞いてた？　私は、何もしてないって言うてるでしょ？」

「けど、目が覚めて最初に声をかけてくれたのは君だったからさ」

微かに赤らむ頬は、先程より少しだけ気を許してくれた事を物語

る。少し迷った様子を見せた彼女は、ポケットから何か小さなものを取り出した。彼女はそれを拳に隠したまま、じっと見下ろしてくる。

「あなたに、聞きたい事があるの」

「ん？」

短く答えると、彼女は小さく深呼吸をして、言葉が続けた。

「あなた一体、何者なの――？」

そう呟いた彼女は、そっと手を開いた。その手のひらに、小さな一粒の葉が転がった。見覚えのある、何度も眺めた葉だ。驚きを隠せずに、目を丸くして息をのむ。

「何故、君が？」

「……大阪の彼から、渡されたのよ。私に、この葉の解析を頼むって。解析するまでもなくわかったわ。この葉は、A P T X 4 8 6 9。決して公になる事のない、組織の中でもほんの一部の人しか持つては居ない筈の葉よ」

その少女の口から出ているとは思えない、淡々とした言葉に、ただ茫然と耳を傾けるしかなかった。

「お、オメーは、一体……」

「私はこの葉の製作に、深く関わった者よ」

「じ、じゃあまさか……オメーも身体を小さくされて？」

動揺しながら聞き返した言葉に、彼女は眉をひそめて顔色を変えた。

「オメー”も”？」

「あ……いや。悪いけどオレもよく知らねーんだ。その葉は、ギムレットから盗んできたものだったから」

「盗んで？」

訝しげな表情を浮かべた彼女に、頷いた。

「ああ。あの人が本当はどういう人なのか知りたくてな。結果は酷いもんだぜ？ オレの身体見りゃわかるだろ」

「……その銃創が、ギムレットって言う人にやられたものだって言うの？」

「ああ。ギムレットと、もう一人。ジンって奴にな。組織の事はよくわからねえけど、もうあそこにオレの居場所はねえって事だよ……それに、オレが何者かって問いも、悪いけど答えられねえ。オレが一番知りたい事だからな。もしかしたら、オレはまっとうに生まれてきた人間じゃねーのかも知れねえし」

自嘲的に言うと、彼女は当然「どういう事？」と返してきた。そんな彼女に、先ほど自分が見てきた事を話す。

「ギムレットは、どうやらクローンの研究をしていたらしいんだ。奴の研究室に入った時、その関係の資料やデータをいくつも見つけた。だから、気が付けばあの人の所に居て、工藤新一に全て瓜二つだったオレも、工藤新一のクローンなのかも知れねえって事さ」

「そんな、馬鹿げてるわ！ 大体あなた、工藤君と同じ歳程度にしか見えないけど、もしあなたがクローンだって言うなら、少なくとも工藤君が赤ん坊の頃にはもう貴方も生まれる準備をしていなくてはならなかったのよ？」

「ああ。馬鹿げてると思っていたいさ。けど、それを否定できる根拠は

オレにはない。オレのこの、工藤新一そっくりな顔を説明出来る理由もな」

そして、更に語った。彼女を安心させる為に、知っている限りの自分を。話終えて自嘲的に笑ってみせたが、彼女は静かにじっと見下ろしてきた。目を薄く開いた、真面目な表情で。

「――どうして？」

「へ？」

「どうして、私にそんな話を話したの？ あなたがその組織の裏切り者だとして、さっきの会話からは、私が組織の人間である可能性も充分考えられた筈よ。あなたの身体は満身創痍で思うように動けない筈。私がもし拳銃でも隠し持って居たらどうするつもり？」

険しい表情で問いただしてくる彼女から目を逸らさないように、新一は応えた。

「裏切り者とかも実感はねえけど、殺されるなら、殺されるで構わねえよ。けど、オメーはずっと怯えてた。オレが目覚ましてからずっと。銃を隠して機会を狙ってる奴じゃない事位判るさ。昔何があったかは知らねえけど、今この部屋に居るのは灰原哀って名前の女の子だろ？ それ以上でも以下でもねえよ」

見下ろしてくる哀は、困惑した様子で瞳を揺らす。

新一は理解していた。自分に事情があるように、恐らく彼女にも何かしらの深い事情があるのだろう。先程、哀が薬を出した手は、微かだが震えていた。怯えながらも尋ねてきた彼女が、今ある唯一の真実なのだ。

「薬の事、頼まれてくれてありがとな。小さな科学者さん」

「バカね。あなたの為じゃないわよ」

クールでどこか冷めた口調が返される。

「判ってるよ。オレじゃなくて、コナンと自分自身の為……なんだろう？」

すると、彼女は緩やかに微笑した。そして、薬をポケットにしまい直す。

「判ったわ。全部じゃないけど、とりあえずは信じてあげるわ。あと、もう一つの薬の方も、後回しになるけど必ず何とかしてあげる。工藤君の、為にね」

「ああ……ありがとう」

礼を言うと、彼女はどこか哀しげな笑みを浮かべて小さく頷いた。

44、灰原哀と工藤新一（後書き）

皆さんこんばんはーV

今回は、ちょっとバタバタしてたらすっかり時間忘れてましたごめんねWWW思い出せてよかったぜWWW

で、いつもうpる前に前話のレスは返すようにしてるんだけど、今回間に合わなかったので、今日寝る前か、余力がなければ明日あたりにお返事しようかなとV

いつも本当に温かい言葉の数々感謝感激です！！

というわけで、今回はこの二人。

哀ちゃんと彼の初二人きりシーンでお送りしましたー♪

てか、ストック貯めホント頑張らないとな。やる気はある、ネタはある、それなのに純粋に取り掛かれる時間がないWでも、前より一話分は進んだのよV

今回もまたお楽しみいただけただけなら幸いですV

さて次回……どうなる、コナン！＼（＾Ｏ＾）／↑

妙な予言を残しながらではー♪

45、アルバム

パソコンを打つ指が、不意に止まる。哀の頭では、先程の彼との会話が延々流れていた。それと同時に、姉の顔が頭をよぎる。

「お姉ちゃん……」

小さく、震える声で呟いた彼女は、キーボードの上にかせたままの手でぎゅっと拳を握った。実際に話せばよくわかった。彼がコナンにどういう感情を持っているのか。だから、信じたわけではないと言いながらも、助けたいと思ってしまった。得体の知れない筈の彼と、何よりも大切だった姉の姿がだぶってしまったのだ。

彼の中に、かつての姉と同じものを感じてしまった。

自分の全てを賭けて、誰かを守ろうとしている強い意志を。

コナンもまた、同じ感覚に陥ったのだろうか。だから彼の言葉を信じているのだろうか。

「大丈夫よ、工藤君。……あなたが例え動けなくても、彼をお姉ちゃんと同じ目には遭わせないわ。絶対に」

一つ深呼吸をして、哀は再びキーボードをたたき始めた。

薄っすらと目を開ける。そして、頭と体全体を襲う異常な重だるさに、コナンは小さくため息をついた。どうやら、体調は更に悪化しているらしい。昨夜には大分気分がよくなったように思えたのが、幻だったようにすら思える。視界に移る天井は、ぼやけたままぐるぐると回転している。

「……に、しても。酷い眩暈だな」

コナンは再度深く息を吐き出すと、額を抑えながらゆっくり身体を起こす。それだけの事で息が上がる程、高い熱があるらしい。話の途中で記憶がぷつぷつ途切れているのは、恐らく途中で気絶でもしてしまったのだろうか。時計を見ても、憶えている時間からまださほど経っていない。

ふと真横を見れば、胡坐をかいて腕組みをしたまま寝息を立てている平次の姿があった。

「……服部」

呟きながら手を伸ばしかけて、やめた。

何時に目が覚めた時も、彼は起きて傍に居た。いつ眠っているのか知らないが、恐らく相当睡眠不足であろう事は間違いない。このラフな寝方からして、大方様子を見ている最中に寝落ちてしまったという所だろう。

「……悪いな、服部。オメー、すげえ怒るんだろうな、本当の事言っちゃったら……。オメーに位は相談してもいいけど。もう少しだけ待ってろよ……。もう少し、だけ」

少し呼吸を乱しながらも呟き、感情を抑え込むように下唇をぐっ

と噛んだ。そして布団に手を着くと、コナンはよろめきながら立ち上がる。胸に手をあてて呼吸を整えると、おぼつかない足取りで部屋を出た。

廊下から、蘭のいる居間へと壁伝いに歩いた。明りの眩しさに目をすばめながら、コナンはひょこりと中を覗き込んだ。椅子に座って俯いている蘭の後ろ姿が、そこにある。

どうやら蘭は、何かを読んでいるらしい。大きく分厚い本――その一ページを開いたまま、呆然とそこを見つめていた。

「らん……ねえちゃん」

その後姿に声をかけると、蘭ははっとして振り向いた。動揺しているらしく、瞳が小刻みに揺れている。

「こ、コナン君！ 起きてきて大丈夫なの？」

「うん。何、見てるの？」

壁から手を離し、ふらつきながら蘭の元へ歩み寄る。蘭は微かに視線を彷徨わせて逡巡し、そして答えた。

「アルバムよ。子供の頃のアルバム」

「ア、アルバム……？　なんで、そんなもの」

「あのね、ちょっと気になった事があったって……」

答えかけた蘭の顔が一瞬ぼやけたのと同時に、かなり強烈な眩暈に襲われて、コナンは右手で額を抑えながら俯いた。蘭を見上げて顔をあげていた姿勢が良くなかったのかもしれない。久しぶりに吐き気にも襲われて、コナンはぎゅっと目をつむる。

「コナン君……だ、大丈夫？ お布団戻る？」

言いかけた言葉を止めた彼女の心配する声が、ぐらぐらする頭の中で、やたら遠くに聞こえた。とりあえず、何とか安心させなければと思い、下唇を噛みしめながら頷き、ゆっくりと長い息を吐いて、目を開けた。

「だ、大丈夫……それより、アルバムどうしたの？」

もう一度尋ねると、蘭は小さく頷いた。そして、机の上にあげていたアルバムの開いたページを、コナンの目線に下ろす。そして、困惑した様子で、一枚の写真を指差した。

「これ、誰かわかる？」

顔色を窺うように、アルバムの上から覗き込んでくる蘭の顔が視界に映らない程、コナンはその写真にくぎ付けになった。

靄がかかったような白んだ視界の先で、写真に写った少年はその存在をしっかりと見せていた。公園で、まだ子供の蘭とツーショットで、笑顔でピースを作っているその少年はまさしく、今の自分が眼鏡をとった姿より少しだけ幼くしたような姿の――けれど、彼は”違う”。

「ねえ、これ、新一じゃないよね？ 凄くよく似てるけど、でも別人……だよな？」

尋ねてくる蘭の声が、耳から抜けていく。額や首筋からは、じわりじわりと汗が浮き出した。

視界が、先ほどよりも酷く歪んでいく。そして、耳鳴りも酷くなった。現実世界からの情報全てが遮断され、コナンの意識は脳内を

めぐる記憶に支配された。

「くぁ……っ、はっ」

「コナン君？」

突然、目の前が真っ白になり、息が止まった。思わず喘ぐと、心配そうな声がどこか遠くに聞こえた。

「コナン君！ 大丈夫？ コナン君！」

「ぐくっ……げほっ！ ゲホガホゴホッ！」

何か答えようとして口を開くと同時に、耐えきれず激しく咳込んだ。追い打ちをかけるように襲う割れるような頭痛に、コナンは無意識のまま両手で頭を抑えて俯く。脳が溶けてしまいそうな程の熱さは、朦朧とした意識の中でも感じていた。呼吸の仕方が思い出せずに、苦しい吐息はどんどん荒くなる。

「コナン君？ どうしたのコナン君。コナン君……！ しっかりして！」

蘭の案ずる呼びかけも、肩に添えられた手も、意識の外の事だった。

コナンの脳内で、いつもの白い世界が広がった。顔を上げると、一人の小さな少年がたたずんでいる。少年は、どこか悲しげにゆっくりと微笑んだ。幼い頃の自分と、瓜二つな容姿を見せながら。

「そ、そ……うだ……そうだった、よな……。オメーは……っ」

「こ、コナン君！」

眩きながら、コナンは意識を完全に手放し、崩れるように床に倒

れ込んだ。リズムの乱れた熱い吐息を吐き出しながら、もやもやと記憶にかかっていた霧が晴れていくのを感じていた。

あれはそう、本当に限られた短い間の記憶だった。出会いも、別れも、突然だった。

何故忘れてしまったのだろう――あの、悲しい別れを。

いつ忘れてしまったのだろう。

幼い自分には力不足で、守り切れなかった、彼の事を。

まるで走馬灯のように、忘れていた記憶が次々と脳裏を巡った。

45、アルバム（後書き）

皆様、こんばんはー（＊＾＾＊）

今回もお読みいただきまして、ありがとうございます！

前回さりげなく予告させていただきました、江戸川が：w
随分じっくり絆や関係性の確立と伏線張り張りしてきましたが、ここでやっと江戸川さんが色んな事を…！

にしても、ホント楽しいですな、こんな江戸川妄想して形にするのはwww恥ずかしいけど楽しい事この上ないですなwww

んで、ですね。

頑張るつもりではありますが、もしかしたら、次回ちょっと更新お休みしちゃう可能性も（＾＾；

お年賀との時間と悩みそ切り替えのやりくりの関係で、ストックが大分ヤバめになって来てまして。まだ数話分あるけど、ストック切らすわけにはいかないので……。

とりあえず、これから1話半のストックを次回までに貯められたら予定通り出します！ 無理だったら、一週お休みさせていただきますー。年末年始の忙しい時だと思って、大目に見て＞＜これだけは、何があっても停滞させるつもりはないので。

まあ、でも頑張るよ♪

応援頂けたら幸いですv

では、次回もまたヨロシクお願いしますー☆

46、救急車

「コナン君！　コナン君、しっかりして！　コナン君！」

蘭は慌ててコナンを抱き上げながら、声を張り上げた。首の後ろにまわした腕には、ありえない高熱が伝わってくる。

「な、何これ！　酷い熱……それに、こんな凄い汗かいて……コナン君、コナン君！」

必死な呼びかけが、涙声混じりの叫びに変わる。腕の中で倒れているコナンの、このまま死んでしまうのではないだろうかという程生気の失せた様子と、倒れる直前の異常な苦しみ方に、蘭はすっかり気が動転していた。

「び、病院……そうだ、救急車！　すぐ救急車呼ぶから！　で、電話……電話！」

慌ててポケットをまさぐると、携帯電話が床に落下した。それを手に取り震える指で、三ケタの番号をプッシュし、止められなくなってきた涙を拭いながら、しゃくり声で状況を伝えた。電話先での心強い受け答えに少しだけ安堵しながらも、電話を切った蘭は再びコナンを抱き上げた。

「コナン君、大丈夫だからね。もうすぐ救急車来てくれるから！　だからしっかりして。お願い……もうちょっとだけ頑張って！　コナン君！」

呼びかけに一瞬だけ反応して、うつすらと目を開けたコナンは、

その虚ろで潤んだ焦点の合わない瞳を蘭の方に向ける。上手く力が入らないらしい腕を持ち上げ、数秒彷徨わせた手が蘭の頬に触れると、力なくその小さな指が涙を拭いた。そして、彼は眉を寄せながら苦しげに口を動かした。

「ら……ら、ん……。蘭……ごめ……ごめん、な……。らん、ねえ
ちゃ……」

途切れ途切れにそこまで呟いて、コナンの腕は床に落ちた。そしてまた再び、目を閉じたコナンはぐったりと蘭に凭れかかる。蘭の腕に体重を預けながら、コナンは朦朧とした頭の中で、走馬灯のよう
に巡る幼少期の記憶を辿っていた。

彼と初めて会ったのは、三歳の冬——年明けの頃だった。初めて行ったニューヨークで、母に手を引かれて案内されたのが、彼の家だった。知らない国と、知らない家と、そして知らない人達。少し困惑していた自分は、家に着くなり一步前に出てきた少年に驚いて、母の背に隠れたのだ。

少年の方は自分とは全く正反対の態度で、物おじせず冷静な顔で覗き込んできた。彼は柔らかそうな若干青みがかった白いセーターに、紺の長ズボンを履いている。その顔がまるで、毎日鏡で見ている自分のもののように見えて、それがまた少し不気味だった。

「写真みせてもらってたけど、やっぱりにてるね!」

そう言って、彼は人懐っこく笑った。その笑顔に少し緊張が解け、苦笑いする母の背からようやく離れた。彼の前に立つと、彼はすっ

と手を出した。嬉しそうに、目をきらきら輝かせながら。

「ずっと楽しみにまっていたんだ！　これからよろしく！」
「うん」

頷いて、出された手を握り返す。同じ背丈で、同じ顔。握手をした手の大きさも形も、本人達にすら違いは解らなかった。

「あ、言っとくけど！　ボクが兄ちゃんだからね？　ボクのが先に出ましたんだ」

「しってるよ。母さんが君のこといっぱい言ってたから」

少し頬を膨らませながら答えると、上からクスクスと笑い声が降った。

「明後日、日本に帰国する時に、一緒に帰るから。それまでに二人とも仲良くなっておいてね」

ニコニコと、本当に嬉しそうな彼に向かい合うくれた自分。そして、面白いものを見るように笑う母。出会いは、本当に突然だった。この日、自分には兄が出来た。

彼は、とにかくイタズラ好きで、更に歳の割にかなりの知識量を持っていた。色々な事を教えてもらったし、色々な事を教えたりもした。趣味も興味を示すものも似ている彼と、意気投合するのはとても早かった。

時折、彼は入れ替わりを持ちかけてきた。完全無欠な父親、優作をぎゃふんと言わせたくて。だが、そこはやはりあの優作だ。皆に

ばれない入れ替わりも、毎回気付かれてしまう。自分もまた随分な負けず嫌いだっただけ、途中からムキになって騙す事に全力を注いでもした。

母親譲りの演技力と、瓜二つの顔。父以外は簡単に騙された。あの時、自分は彼でもあったし、彼は自分でもあった。

両親が居ない日も、彼と一緒に居れば楽しかった。同年代の中では奇異な趣味だったものも、彼は普通に理解してくれたから。身体を壊して寝込んでも、寂しかった事は一度もない。親がいなくても、彼は傍で看病してくれたから。

何年でも、ずっと彼がいる生活が続くと思っていた。続く筈だった。まさか一年もたたないうちに、あんな事件が起きるなんて、思いもよらなかった。

阿笠邸で、新一ははっと目を開けた。むくりと身体を起こすと、額に置かれていたらしい湿ったタオルが地面に落ちる。哀との会話の後からどれ位時間が経ったのか。余程処置がよかったのだろう。傷はまだ痛むが、身体のだるさは消えている。額に触れてみても、もう熱はないようだ。だがそれよりも、嫌な予感が悶々と胸によぎる事に、彼は顔をしかめながらパジャマの胸元をぐっと握った。

「救急車が通る音が、聞こえた気がする」

眩き、齒ぎしりをしながらベッドを降りると、窓まで歩いた。カーテンを開けて外を見やるも、静かなものだ。不気味なほど静かな外の様子に、嫌な予感は尚更増幅した。

新一は、窓についた手に力を込めた。

「まさか、あいつ……」

新一は、鼓動が早まるのを感じていた。眉間にしわを作りながら、下唇を噛みしめて険しい表情を作る。

救急車なんか、さほどこの辺りをひっきりなしに動き回るものでもないだろう。もし空耳でないとすれば、いつ救急車に運ばれてもおかしくない存在にも、容易に検討がついた。そうでなければいいと思えば思うほど、そんな予感は強まってくる。数日看病してきた、最後に別れた時のコナンの様子を思えば、いつそうせざるを得ない状態になったとしても、おかしくはないのだから。

「コナン——！」

新一は、切迫した声を絞り出すように呟いた。

46、救急車（後書き）

はーい、こんばんはー（＊＾ー＾＊）

今回は、うん、一応前に話した一話半までいかなかったけど、とりあえず一話分ストック仕上がったので、まあ誕生日にサボるのも幸先悪いわなって事でアップする事にしちゃいましたwww
今回は進行状態によっては本当に休むかも^^;

って事で、今回。凄いテンションマックスで書いてたの覚えてますこの話www

やっぱり、こういうの書いてるのが一番楽しいわな♪
ぐったり江戸川サイコー！↑

お返事は、お風呂上がりか明日にでもー（＊＾ー＾＊）
毎回凄く嬉しいです！ ありがとうございますー！

では、また次話もヨロシクお願いしますー♪

47、悪化する事態

新一の胸には、最悪の事態ばかりが浮かぶ。最後に見た時も、コナンの体調は相当酷い状態だった。だから、時間がないと判断して例の研究所にまで乗り込んだのだ。

一応平次に病院に連れて行かせると説得したものの、四六時中付き添っていてくれるわけではないだろう。平次が居ない場面で、例えば蘭や小五郎などの前であの発作のような呼吸困難を起こして倒れたらどうなるだろうか。

――不意に、あの夜の電話が頭をよぎった。

「正直に答えろよ。あの時病院で、先生の研究室で聞いたんだ。A PTX4869とか言う薬を投与されたって言う子供を必死で探してるって。その子供の写真も見た。コナンにそっくりだったよ。あいつが、先生があそこまで血眼になって捜している子供なのか？」

『ああ、そうさ。ギムレットがというより、組織が……だがな』

「組織か。一体アレはどんな薬なんだ？ あんたらは、コナンをどうするつもりだよ」

答えてくれない確率の方が高い気がしたが、電話の相手はおかしそうに小さな笑いを受話器越しに伝えた。

『詳しくは、貴様の為にも知らない方がいいと思うが。投与された者は、ゆつくりとだとしても必ず死に至る薬だ。まあ本来速攻性の薬だが、まれに年齢が若く健康的な細胞だと、効き方が中途半端になって暫くは元気に過ごせるようだぜ』

「じゃあ、死ぬのか？ どうあっても」

『ああ。そのガキも長くはねえな。ギムレットが病院で診たらしい。奴は重要なモルモットだ。息をしなくなるまでその役目を果たしてくれるように、奴が妙な抵抗もできずに運ばれてくる手は打ったそうだぜ』

受話器から伝わる冷徹な宣告に、焦燥感を覚えた。もしかしたら、病院に連れて行った時に、既に何かされてしまったのではないかと。そして、聞かされた事実が胸が締め付けられた。

最初から、病院に連れていくのには少し抵抗があった。何を考えているのか解らないギムレットが、コナンについて様々な医師に情報を呼び掛けていたらしいから、どの病院も安心ではない。けれどあの時は、病院に連れていく事でよくなるのであれば、と思ったから連れて行ったのだ。それをどれだけ後悔した事だろう。

居てもたってもいられず、新一は窓から踵を返した。そして、ドアを開けて電話機を探す。きよろきよろしている新一に、階段を昇ってきた哀は声をかけた。

「どうしたの、トイレ？」

「いや。電話……貸してもらえねーか？」

すると、哀は微かに眉を寄せる。その表情に、やはり完全に信頼されたわけではない事を悟った。

「……どこにかける気？」

「探偵事務所だよ」

案の定された質問に、新一ははっきりと答えた。怪訝な顔で首を

傾げた哀を見て、新一は小さなため息の後で告げる。

「さっき、遠くで救急車の音が聞こえた気がした。嫌な予感がするんだ、確認したい。……信じられねーなら、おめーが電話をかけて聞いてくればいい」

「き、救……急車？」

見上げてくる彼女は、目を見開き、あからさまに動揺した様子を見せる。気付かなかったのも無理はない。先ほどまで地下に居たらしい彼女の耳には届く事はなかっただろう。そんな彼女にもう一度肯定の返事を返すと、彼女は青ざめながらポケットから携帯電話を取り出した。そして、アドレス帳から出した名前を呼び出す。耳に当たった携帯電話を持つ手を、小刻みに震わせながら。

「出ないか？」

「出ないようね……探偵事務所は」

震える声で呟いた彼女は、もう一度別の名前を呼び出してかけた。江戸川コナンの携帯電話に。

一回かけて、二回かけて出なかったらしい。哀は絶望的な表情で俯き、携帯電話を持つ手を下ろした。だが、間髪置かずに、その携帯電話が光り、高いメロディを奏でた。ビク、と肩を震わせた。文字盤に出た名前に一瞬だけ向けた瞳を大きく見開き、哀は再び、慌てた様子で携帯電話を耳にやった。

「もしもし、江戸川君？」

『……オレや。工藤やったら、今ちよっと出られへんぞ』

受話器から届いた聞き覚えのある関西弁に、哀は息をのむ。すっかり表情筋が固まっているのを感じながら、震える唇で尋ねた。

「出られないって……彼、寝てるの？　今、家よね？」

一瞬、電話の相手は黙った。そして、小さく息を吐く音が哀の耳に届く。

『事務所とちゃう。病院や。少し前やけど、アイツまた倒れてな。今回はホンマにアカン感じやって……姉ちゃんが救急車呼んでしもてん』

状況を的確に伝えているようにも思えるセリフだが、声が、その余裕のなさを告げている。

「……彼の、容体はどうなの？」

震える声を精一杯絞り出して、尋ねた。すると、また電話相手は少しだけ沈黙し、答える。

『今、処置中や。せやから何とも言えへんな』

短く告げられた声は静かに暗くて、否が応でも理解させられる。彼が今どんな状態なのか。ぎゅっと下唇を噛みしめ俯いた哀の肩の上を、新一の大きめな手が覆った。

「なあ、ちよつとかわつてくれねーか？」

「あ、ちよ……っ」

哀が彼に電話を渡すよりも前に、彼は力が緩んでいた哀の手から電話を抜き取った。そして、それを耳に当てる。その硬い表情には、僅かな怒りも見えた。

「服部、だよな？」

話しかける声に含まれる少し威圧的なトーンもまた、彼が僅かばかり怒っているらしい事を物語っていた。

電話の受け答えを聞いているらしい彼は次第に目を細め、眉を寄せている。そして、小さく息を吸ってから、彼は受話器に口を寄せ、低く呟いた。

「オメーが、オレにそれを問い詰める資格があるのか？」

そのトーンから伝わる圧力は、その場に居ただけの哀にまで、強い緊張感を強いた。

47、悪化する事態（後書き）

こんばんはーw w w w

あんな事言っておきながら、何とか頑張れたみたいですオイラ！

やってみりゃ意外となんとかなるもんよね。

というわけで、47話もあーっぷ！

今回も見下さってありがとうございますv

5話分位余裕あれば、年末でも何とかなるんだけどね（だって、一か月4話だからさw w w）とりあえず何も書かなくてもギリギリストックは残せるというわけですよw

年明けまではこんな感じで、進行によっては休むかもーと言いつつ、アップ出来ればアップします。

投稿を休むか突っ切るかは、投稿した時にストックが3話を切るか否かによって決めさせていただくつもりです（^^）

でも多分前回とか前々回もだけど、温かい言葉いっぱいもらったから頑張れたんだと思うのv皆様に感謝ー♪

では、次話も宜しくお願いいたしますー！

48、守りたかったもの

『服部、だよな？』

「お前……なんでそこにおんねん！ 急に姿消しよって……そこで何してるんや！」

聞こえてきた声に、平次は最初目を丸くした。だが、すぐに我を取り戻し、そう問い詰めた。すると、電話の相手からは威圧的な答えが返される。

『オメーが、オレにそれを問い詰める資格があるのか？』

「何やと？」

咄嗟に言い返すと、彼は先ほどよりも強い口調で言った。

『オメーを信じていたから！ オメーに、アイツを託せると思ったから、だからオレは……オレは！』

「さっぱり解らへんわ！ お前どこで何しててん。姿消してからずっとそこに居ったわけやないやろ？」

『当たり前だ！ なんでコナンが病院に居るんだよ。なんで易々とそれを許した？』

痛い所を突かれ、平次は一瞬押し黙った。

うたた寝をしてしまっていた間の出来事だ。ここ数日の寝不足のせいもあっただろう。部屋の外から微弱に聞こえた何かが倒れる音では覚醒するまでに至らず、その後冷静さをまるで失った蘭の、悲鳴のような叫び声でようやく目を覚ます事が出来た。

布団の中に居る筈のコナンの姿は見えず、慌てて部屋を飛び出てみれば、蘭の腕の中でぐったり目を閉じているコナンが居た。半開

きの口から漏れる吐息は、かろうじて途切れてはいないが次第に微弱に変わってゆく。更に、気を失ったコナンに何をして、まるで反応する事はない。

そうこうしているうちに、バタバタと救急隊員達が入りこんできて、病院へと連れ込まれた、というわけだ。そして、処置中にかかってきた電話に出るべく、今は病院の入口の壁に寄り掛かっている。

「確かに、今こうなつとるのはオレが寝てしもたせいやけど……」
『ああ』

「せやけど、どの道こうするしかなかったんや。……死んでたで、アイツ。あのままほついたら、確実に」

重く伝えると、今度は相手の方が黙る番だった。沈黙する空気に、変に言葉を付け加える事もせず、平次は無言のままじっと携帯電話を耳につけ、相手の返答を待った。

数十秒、二人は携帯電話を通して、その沈黙を共有した。そして、ずっと息を吸う音が、電話越しに平次の耳に届く。

『――そんなにか？』

短く低い問いかけが、平次の鼓膜を揺らす。

『アイツ、もうそんなに、まずい状態なのか？』

「……まるで、あれ以上悪くなるんが解ったような口ぶりやな」
『どうなんだよ』

平次は口を閉ざし、先ほどまで居た院内に視線を向けた。そして眉を寄せながら俯き、下唇を噛みしめた。握りしめた拳は、小さく震えている。

「誤解すんなや、アイツの生命力ホンマに半端ないんやぞ。適切な処置してもろたら、けろっと元気になるに決まっとるやろ……！」

自分に言い聞かせるように、声には自然と力がこもった。

実際脳裏によぎるのは、ここ数日の、自分が知っているコナンとは程遠く弱り切った姿と、倒れていた時の生気も感じられないぐったりとした姿だ。けれども、それを認めるわけにはいかなかった。変なイメージが、真実になるかもしれない可能性が怖かった。

『で？　どこの病院だ？』

唐突に沈黙をぶち破る問いが聞こえて、平次ははっと顔を上げた。

「……ここは、米花総合病院や。なんや、前にもアイツ診た事あるらしいって医者が呼ばれとったけど」

『なんだと？』

「オレが東京に来る前に、一度お医者さんに診てもらたんやろ？　そんな時の医者が、都内のあちこちの病院に、めっちゃ繋がりとるお偉いさんみたいやで」

電話越しに伝わる呼吸が、若干乱れたように感じた。どうしたのか、と尋ねる前に、向こうから先ほどよりも荒げた声が返ってくる。

『眼鏡の医者か！　医者の癖にがっしりして体格がいい、三〇四十代そこそこの！』

「あ、ああ……せやったな。そんな先生やったで」

『……くっそ！』

絞り出すような声が聞こえた直後、電話は切れて、無機質な機械音だけが平次の耳に届いた。まだ彼が今どこで何をしているのか、

という事も聞けていないうちに一方的に電話を切られ、平次は僅かに眉間にしわを作った。が、かけ直すという選択肢をとる程の余裕はなく、コナンの容体知りたさに、平次は院内へと戻って行った。

「ギムレット……！」

電話を切った新一は、そう呟いて、ぎりぎり歯を軋ませた。見上げてくる哀の視線を受けながら、ただじっと携帯をきつく握りしめる。額から、一筋の汗がその頬を伝った。

「どうしたの？」

下からかかった声に、新一は携帯を握る手を緩め、哀に視線を送る。見上げてくる不安げな顔を見て、強張らせていた表情筋も少し緩める。

「心配すんな、大丈夫だよ」

荒らぐ気持ちを抑え、出来るだけ穏やかな声で答えながら、哀の頭にそつと手を置いた。二度ほどポンポンと撫でると、彼女の不安げな顔は、若干不快な表情に変わる。

新一は手をどけないまま、哀と視線を合わせるようにその場にしゃがんだ。怪我を追っていた足が痛んで一瞬顔をしかめたが、すぐに平静を装った。

「アイツの事は、オレが必ず守るから。だから、オメーは余計な心配しないで、早くアイツを助ける薬を完成させてやってくれねーか？」

そう言った後で、ゆっくりと哀の頭から手を離し、手をつきながら痛みをこらえて立ち上がった。そして、腕と足が正常に動く事を確認して、ぐっと身体に一度力を込める。見上げてくる目が、静かに細められる。

「……行くの？ 病院に」

「ああ。この記憶が確かかどうかからねーけど、子供の頃、大切な奴を守れなかった気がするんだ。だから、今度こそ……何をしても」

言い終えてから、哀の前に携帯電話を差し出した。

「これ、助かったよ。ありがとな」

「ええ」

受け取った彼女は、尚ももの言いたげに見つめてくる。

「どうした？」

「工藤君を救える薬はまだ出来てないけど……彼を、よろしくね」

尋ねると、彼女はやっとそう呟いた。そして、小さな手がそっとそれを渡してきた。驚いていると、真剣な瞳に、じっとまっすぐに見上げられていた。

「あなたも。自分が怪我人だって事忘れないで。死んだら承知しな

いわよ」

予想もしなかった言葉に目を丸くした新一は、またゆるりと微笑んだ。

「ああ、ありがとう。薬、よろしくな……あと、博士にもよろしく言っといてくれ。ありがとうなって」

「ええ、こっちこそ」

着替えを終えて、彼は阿笠邸を後にした。

処置を終えた医師に、蘭は縋るように飛び付いた。

「あのっ、コナン君は！　コナン君は大丈夫なんですか？」

医師は、反動で少しずれたその黒ぶちの眼鏡をくつと中指で直すと、人の良さそうな笑みを顔に貼り付けた。そして、淡々とした口調で告げる。

「ええ。少し熱が上がりがりすぎてしまったようですね。何日も続いた高熱で相当体力も消耗してますし、衰弱してますから、このまま入院していただきますがね」

「は、はい！　ありがとうございます……ヨロシクお願いします！」

安堵から出る涙を止められず、蘭は何度も頭を下げた。そして、処置を終えたコナンの元に駆け寄り、ベッドの横にひざまずく。点滴が繋がれたままくたりと力なく置かれている手を包むように握り、蘭は自分の胸元に抱きよせた。

「コナン君……絶対もうすぐよくなるからね……」

そんな蘭とコナンのベッドを背に、靴の音を響かせながら廊下を歩く医師は、くもらせた眼鏡を持ち上げながら、口元に歪んだ笑みを浮かべていた。

48、守りたかったもの（後書き）

皆様、こんばんはー！！

今回も無事投稿する事が出来ましたv

レスは…本当はこれ投稿する前にやろうと思ってたのですが、時間がきちゃったので不安にさせる前に先に此方をw寒くてどうもこのPCの自室は居つけないです^^;

次回も多分大丈夫…だと思う。一応、今週のノルマ一話だった所を、一話半頑張ったので。

お年賀に小説にと、年末終わるまで作業作業作業づくしで、忙しいやら楽しいやら…：うん、なんだかんだ言っても結局楽しいんですよ、創作活動は。小説は読んでくれた方の反応が何よりも原動力になりますし、イラストは相手の手に届いた時、気に入ってくれたり喜んでくれたりって考えるだけで嬉しくなるv

全て、こうやって創作活動が楽しく出来ているのは、皆様のおかげなんです！ だから、皆様に感謝なのですvいつも本当にありがとうございます！

今回、服部と工藤新一君、そして哀ちゃんとう工藤新一君、蘭ちゃんと江戸川、服部と江戸川と。沢山お見せ出来たかなーとか。ギムレットさんや、工藤新一君の今後の動きも、江戸川の今後もまたお楽しみください。

それでは、次回もまたよろしく願いいたしますーっ！！

49、守れなかったもの

白衣の医師が、看護婦に頭を下げられながら病院の廊下を歩いていく。そして、随分使われていない廊下の先にある、誰もいない倉庫部屋の戸を開けて、中に入る。後ろ手に戸を閉め、鍵をかけた彼は、顔を抑え、喉の奥から堪え切れない笑いを漏らした。

「……待った甲斐があつたな、工藤新一」

いやらしく笑いながら、彼はそう呟いた。眼鏡に中指を当てて抑えながら、彼は自身の昂る気持ちと闘った。腹を抱え、よじりながら。そして、齒をむき出しにせせら笑いながら。

「君は私のものだよ、工藤新一……ジンなどに、好きにされてたまるものか」

そう呟くと、彼は突然無表情に変わった。そして、彼は右手を自身のポケットに突っ込むと、中から古ぼけた手帳を取り出した。左手はメガネを抑えたまま、冷たい顔でそれを眺め、右手だけで器用に手帳のページを開く。

一ページ目には、僅かに色あせた写真が挟まっている。銀杏の木を背にして、白衣を着た若い男に抱かれながら、明るい笑顔でピースをしている幼い少年の写真だ。ふわふわとした柔らかそうな猫っ毛と、大きな目が特徴の少年だった。

「十年以上待ったんだ。そんな私の計画を、ジンなどに……！ 奴らなどに壊されてたまるものか！」

歯をきしませたギムレットは、手帳を閉じて再度ポケットにしまう。そして、顔をしかめながら舌打ちをして、腕を抑えた。

「……身代わりの分際で、やってくれたな。育ててやった恩も忘れて……」

周囲に怪しまれる事がないようにと、白衣の上から見れば特に怪我など見当たらない。だが、自分で処置をして痛み止めも施して、それでも痛むものは痛むのだ。飼い犬に手を噛まれるとはまさにこの事だろうか。

「まあいい。いずれ、アイツも私の元に戻ってくる運命^{さだめ}なのだからな……」

熱い。血が煮えたぎっているような、脳が溶けているような、そんな錯覚に陥るほどに。

熱くて、世界がぐるぐると回転しているようだ。上も下も、右も左も解らない。

呼吸すらもままならない。これはまるで”あの時”のように。

あの時、二人一緒だった。もし、当時の自分にも、あの時の彼と同じ判断が出来たなら、どう変わっていただろう。

死なせたくなかった。けれど、まだ無力すぎる自分の手で、どう

やって彼を助けられただろう。

彼は、自分の身を挺して逃がしてくれた。だから、走った。必死で走った。途中で、樹の幹につまずいて、こけて泥だらけで膝はすりむけて。それでも、彼が待っている事を自分に言い聞かせて、身体を起こした。また走りだそうとした時、突然の閃光と爆音ともに、背後からの熱い風によって、身体が数メートル先まで飛ばされた。

「う……。な、何が……？」

全身を地面に強打して、体中に痛みが走る。呼吸が苦しいのは、うちつけられた衝撃の他に、もわもわと、黒に近いグレーの煙が喉を焼くせいだ。

「げほっ！　げほげほげほっ！」

煙に巻かれて激しく咳込みながら、腹部を押さえて何とか立ち上がった。後ろを見れば、先ほどまであった筈の建物が、赤黒い炎と煙に包まれて、バチバチと音を立てて炎上している。

「……………に、いちゃ……………」

呆然と眩き、唇を噛みしめた。心臓の音が次第に大きくなってゆく。何かを考えるよりも前に、足が勝手に炎の方へ吸い寄せられるように動いた。前へ、前へ。つんのめりそうになりながら。

息を切らして、建物の前まで来て、頭の中では理解した。”生きているわけがない”という事を。

それでも、諦めきれなかった。心の中で、必死に否定した。だから、最後に彼と別れた所まで行こうとして、手をやけどしながらも、煤だらけになりながらも、障害物をかき分けて進んだ。咳込みなが

ら、熱い中を必死で潜り抜けて。

そして、そこで地面に落ちていた煤けた黒い欠片を見つけた。焦げた形状からでも、それがなんなのかすぐに解った。彼の所有物である、という事だけは。震える手でそれを拾い、熱さに一瞬顔をしかめたが、その視線の先にある光景に絶句した。黒ずんで焼け焦げた子供の左手だけが、がれきの下から一本出ていたのだ。

「——っ！」

足を一步踏み出して、手を伸ばそうとした。だが、炎上する建物はそれすらも許してはくれなかった。ガラガラと上から崩れるような瓦礫に阻まれ、何とか脱出した頃には、もう既に再び中に入れるような状況ではなかった。

「う……そだ！」

呟いてから、再びむせた。熱い手を開くと、そこには先ほどの欠片が握られている。それは数日前、連れて行ってもらったサッカーのイベント会場で、記念に二人でもらった色違いのキーホルダーだった。

「……だ、だれか……」

頭の中は真っ白になり、無意識の中で言葉が出てきた。

「だれか！ 誰か！」

くるりと踵を返し、走り出す。誰か、大人に助けを求めれば、もしかしたらと。そんな気持ち湧きあがる。

「誰か！ 助けて！ 誰か！」

死なせたくなかった。助けたかった。

助けて欲しかった。どんな手を使っても。けれど、足はもつれ、その場に倒れ込んでしまう。再び立ち上がろうとしたが、どれだけ頑張っても足がもう進まない。血がにじむほど叫んでも、自分も誰も、彼を助けられない。

「くそっ！ くそおお！」

倒れこみながら、既にボロボロな拳を地面に思い切りうちつけた。

「どうして、どうして……っ！ なんでだよお！」

何度もうちつけた。何度も、何度も。

やがて握力を失った拳から、キーホルダーの残骸が転げ落ちる。力を失い、地面にうつ伏せに倒れながら、朦朧とした意識でそれに手を伸ばした。そして、多分そのまま、意識を失った——んだっと思う。

気が付いたら病院に居て、事件の事もすっかり忘れていて、彼と過ごした時間の記憶も、彼の存在も、完全に忘れたわけではなかったが、殆ど薄れていた。幼かった頃の記憶力では、完全に消えるのもまた時間の問題だった。

そして、そのまま、自分は十年以上も生きてきた。

本当の真実なんて、全て忘れたまま——彼の存在を全て、頭の奥の引き出しに閉じ込めたままに。

「う……っ！ んぐ……ふっ」

ベッドの上に寝かされ、点滴と酸素マスクをつけられたコナンの口から、うめき声が漏れる。額や頬に滲んだ脂汗を白いハンカチで拭いながら、蘭は今にも泣きそうな顔でベッドの横に腰かけていた。蘭の左手はコナンの手を包むように握り、右手では熱い額と汗ばんだ髪を撫でている。家に居た頃は、うなされていてもこれで多少表情も和らいでいた筈だが、今はずっと苦悶に歪んだまま、変わらない。

「コナン君……」

「か、ふっ……くっ！」

「大丈夫、もうすぐ苦しいの治るからね。……元気になったら、今までで一番おいしいハンバーグ作ってあげるからね！ コナン君……っ」

一歩後ろに立っている小五郎と平次は、目を細めながら、神妙な面持ちで二人をじっと見つめていた。

49、守れなかったもの（後書き）

皆さんこんばんはーV

今回もまた無事に出す事が出来ました（^O^）

後、お返事遅くなりましたが、先ほどようやくレス終わりましたー
（＊＾ー＾＊）いつもありがとうございます！ お待たせして済み
ませんでしたV

というわけで、今回は前回の守りたかったものと対にして、守れな
かったものです。

ちよいちよいと少しずつ出してた過去の事件について、今回大部分
を明らかにした形です。

そして、今回はギムレットの事にも触れたお話になりました^^
彼の事情については、出し過ぎず、でも読者の方になっとくしても
らえるように出来たらな、と思いますV

では、また次回もヨロシクお願いしますーV

次回も無事に出せるように頑張りますV

P.S. 本誌さ。キャラ投票とか鬼畜ダヨネ☆選べねーよWWWとり
あえず三水吉右衛門について全力でツツコミWWW

50、再会

陽が沈みかけた頃、少し大き目に見える黒いロングコートを着た男が病院の前に立っていた。

彼は首元にグレーのマフラーを巻き、帽子を目深に被っている。吹いた風になびくマフラーが飛ばされないように手で押さえ、彼は眼を細めた。

もしも、ギムレットに見つかる事があれば、今度こそ捕まり殺されるだろう。そうならない為に相応の準備として用意した服を不自然にならない程度着込んできた。

今が冬でよかったと思う。これだけ身体を隠しても自然なのだから。

「寒い日だな。今日も」

冷たい風は、多少傷に染みた。だが、彼は僅かに身をすぼめてその寒さをやり過ぎしながら、病院の入口をくぐった。受付、ナースステーション、外来。広い病院だと、目当ての場所を探すのも一苦労だ。

「……江戸川コナンの、病室」

受付で聞くわけにもいかず、新一は考えを巡らせた。

恐らく、大部屋ではなく個室だろう。容体はさほど良くない筈だからそれを考慮した上の部屋割で、且つギムレットが好きに出来る位置にある筈だ。

ちらり、と案内を見やり、大方の見当をつけてその場所へ歩いた。そして、ようやく『江戸川コナン様』の文字を見つけ、ふっと微笑

した。

音を立てないように静かにノブを回し、少しだけ開けた戸の隙間から中を見る。すると、そこにはぐったり眠るコナンに寄りそう蘭の姿と、平次と小五郎の姿があった。

一瞬、ふっと此方を見た平次が、少し目を見開いて視線を止め、そして何も言わずまたコナンの方へ向き直った。その反応に眉を寄せて、また音を立てずに戸を閉めた。

病院に連れてきてもう数時間は経つが、未だにコナンの容体は安定しないままだった。とりあえず処置を受けて倒れた時よりマシになったものの、意識は回復する様子を見せずにずっとうなされている。辛そうな様子に、病室内の空気も少しぴんと張り詰めていた。

「しかし、一体どうしちゃったんだ、このボウズ。ただの風邪だと思っただのにここまで」

隣に立っていた小五郎が神妙な声で呟く。それを聞きながら、平次は眉を寄せた。視線の先で、蘭に寄りそわれながら酷い顔色で横たわり、苦しげな呻き声を上げるコナンを見ているのが苦しかった。日に日に弱ってくるコナンを見ていると、自分が知っていた筈の本来の彼を忘れてしまいそうだ。あのいつでも大胆不敵な、どんな相手にでも強く啖呵を切る、生意気で余裕綽々の態度を取っていた面影がまるでない。このままもう二度と、あの彼には会えないので

はないだろうか。

拳をきつく握りしめ、血管の浮き出た手が震えた。

そんな時に、後ろの戸が静かに開いた事に気づいて振り向いた。微かな隙間から、やたら着込んでいるイメージの若い男が覗き込んでいる。誰だかは、すぐに解った。例え偽物でも、彼の顔と纏った雰囲気は、工藤新一以外の何者でもないのだから。

それにしても、あの着込みようは何かあったのだろうか。ちょうどいい。電話が途中で終わって、離したい事は山ほどあったのだ。

一旦、興味なさげにコナンに視線を戻すと、病室の戸がゆっくり閉まるのを、気配で感じた。

「……姉ちゃん、おっちゃん、すまんけどオレちょっと出てくるわ。喉渴いてしもてん」

少しだけ空気の読めてない発言を装いながら、苦笑いと共に軽口でそう伝えた。すぐさま、隣からじっとりとした視線が降ってくる。

「ああ？ 出るなら勝手に出てけ！ ったく、こんな時にまでいつものちゃらけた態度とりやがって」

「スマンスマン！ それまでこのボウズの事、よろし頼むで！」

頭をかきながらそう告げると、小五郎は、さっさと出てけと言わんばかりに右手でしっしっのポーズを取った。平次はもう一度苦笑して、病室を出た――最後に一度だけ、ベッドで眠るコナンをちらりと見やりながら。

彼の姿が見つかるまで、きよろきよろと注意深く見回しながら、

平次は廊下を歩いた。

「どこ行きよったんや、アイツ」
「ここだよ」

見当たらない事に諦めて病室へ戻ろうかと思いかけた時、突然斜め下から声をかけられた。見れば、覗き込んだ階段の一段下で、壁に寄り掛かった姿勢で腕を組みながら、先ほどと同様帽子姿の彼が顔を覗かせた。

「なんや、そこに居ったん——」
「悪いけど、こんな場所で仲良く話す気はねーんだ。用があるなら、近くに小さい公園あったろ？　そこで待ってるから」

ぼそぼそとそう告げた彼は、億劫そうに身体を壁から離し、階下へ降りて行った。平次は眉を寄せてその後姿を眺めながら、口を尖らせてボソリ呟く。

「……何やねん」

それから、一度だけ心配そうに元居たコナンの病室を一瞥し、ため息を吐きながら面倒くさげに階段を一步一步と降りた。

ずっと、夢を見ていた。いつものあの少年の夢——否、今となっ

ては、兄の夢と言うべきなのだろうか。熱くて、だるくて、身体中が重くて、息も苦しい。その感覚が夢なのかどうかすら、よくわからない。

景色はまた白に変わっていた。動けなくなったコナンは、一人その場に座り込みながらハアハアと苦しげで荒い呼吸を繰り返す。胸を抑え、地面なのかどこなのか解らない白い床に手をつきながら。うねうねと歪む白は、自分の目がおかしいせいなのか、それともここがそういう空間なのか。

「……………ぐっ！」

唐突に激しい吐き気に咄嗟にコナンは口を抑えた。だが、酷いのは吐き気だけのようで、出して楽になる事も出来ないらしい。ぐわんぐわんと、不規則に脳みそをかき乱されるような眩暈と共に、耳鳴りがし始める。うずくまりながら、コナンはその不快な感覚を必死でこらえた。

吐き気は治まる事はなく、息苦しさもどんどん悪化していく。頭が、信じられない程熱く感じた。

「う、げほっ……き、気持ち悪い……なんなんだよ……はあっ……げほごほがほっ！ や、やべ、マジで……オレ、死んじゃうのか？」

蘭や小五郎、平次の前では絶対にそんなセリフは言わないけれど。今はもう、自分が何を言っているのかすら、もはやよく解らなくなってきた。

不意に、胸に今までにない強い圧迫感を感じた。うずくまったまま、コナンは両手で心臓付近をきつく押さえる。だが、その瞬間に、元の身体に戻る苦しみとは比較にならない程の衝撃が、胸を襲った。

「あ、ああああっ！　ぐっは……！　げほっ！　げほげほっ！　がはっ」

思わず叫び、詰まった息にむせ返った。呼吸の仕方が解らない。苦しくて、熱くて、痛い。

その時、ずっと誰かの小さな手が、コナンの前屈みに丸まった背中を優しく撫でた。

「大丈夫？」

聞き慣れた自分の声よりも、ほんの少しだけ幼く、高めの声。寄りそうように、隣にしゃがんだ彼は、コナンの背中を何度もさすった。歪んだ視界で見上げた顔は、優しく微笑っていた。

「に……ふ、ぐうっ！　げほがほっ」

「大丈夫……気をしっかりもって……すぐ治まるから」

次第に咳も落ち着いて、まだ苦しい息を整えながら顔を上げる。今度こそどこにも逃がすまいと、彼の衣服を握りしめたコナンの手を、彼の小さな手がそっと包み込む。

視線の先の子供は、安心させるようにずっと柔らかく微笑し続けている。

「大丈夫だよ、どこにもいかないから。……思い出しちゃったんだね、ぼくのこと、全部」

どこか悲しげにゆっくりと告げられた言葉に、コナンは目を細めた。

50、再会（後書き）

こんばんは☆

そして、メリークリスマススイブっ！

イブの日に50話をうpする事が出来るとは、なんてキリのいい事だろうか……（＊＾＾＊）

50話、ありがとうございますー！！！！

皆さん、素敵なクリスマスを過ごして下さいねー♪

というわけで、今回は再会。

誰と、誰が？ ええ、それは服部と”工藤新一君”であり、夢の中でもあり。

次話は服部のターンになるんじゃないでしょうか♪

あ、実は今クリスマスイラスト描いててですね。年賀作成で少し遅れちゃったけど、寝る前までには仕上げるつもりなので、サイト御存じの方は是非遊びにいらして下さいv

今回のクリスマスは、世良たん、江戸川、蘭ちゃん、哀ちゃんの四人ですv

それでは、今回もご覧いただきましてありがとうございます！！
次話もどうかよろしくお願いいたしますーv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8737r/>

最も危険な二人

2011年12月24日00時47分発行